新約迷宮神聖譚

自堕落無力

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは迷宮都市にて勇姿を人々に刻み続け、英雄の座へと至る男の話である。

目次

原作開始前
序章 1
一話 9
二話 19
三話 26
四話 32
五話 38
六話 51
七話 58
八話 65
九話 73
十話 79

時系列　原作とSO　一巻
十一話 85
十二話 95
十三話 108
十四話 124
十五話 134
十六話 141
十七話 148
十八話 157
十九話 166
二十話 179
二十一話 185
二十二話 192

二十三話 198
二十四話 207
二十五話 213
二十六話 217
二十七話 223
二十八話 230
二十九話 236
三十話 241
三十一話 246
三十二話 250
三十三話 256
三十四話 261
三十五話 268
三十六話 274
時系列　原作とＳＯ　二巻
三十七話 278
三十八話 282

原作開始前
序章

とある村に住む少年の一人であり、処女雪のような白の短髪に深紅（ルベライト）の瞳とまるで兎を連想させる生まれて五歳のヒューマンであるベル・クラネルは人一倍、『英雄譚』が好きであり、英雄に強く憧れていた。

それは物心つく前より両親が亡くなっており、育ての親となっている祖父から毎日、英雄譚を読み聞かせられているからでもある。

とはいえ、実際に英雄の勇姿を見たり、感じたりはしていないので英雄とは物語の中の存在でしかないと思っていた。今までは……。

「う、うわあああっ!!」

祖父からは常々、この世界には異形にして凶悪な存在であり、怪物の『モンスター』が居て、いつ村へと襲い掛かってくるか分からないから村の外には出るなと言われていたのにも関わらず、好奇心から村の外へと出たベルはゴブリンの群れに襲われ、滅多打ちにされる中で死すらも覚悟したとき……。

「ふっ!!」
突如、唸る槍の一閃がゴブリンの群れを一掃した。
「危ないところだったな。わんぱくなのは結構だがこういう目に遭うからちゃんと気を付けないと駄目だぞ」
「……はい」
ゴブリンの群れからベルを救った槍使いの男はそう言って、ベルの住む村へと共に移動していた商隊の車の中から治療のための道具を取り出し、ベルの治療をした。
幸い、ゴブリンはモンスターの中では最弱なのでベルの怪我は酷い物では無かった。
「あの、ありがとうございました。英雄のお兄さん」
「英雄ってのは言い過ぎだが、どういたしまして。兎の坊主……って、まじでモフモフだな」
ベルにとっての英雄はそう言って、笑いベルの頭を撫でる。
そうして、商隊と護衛である槍使いの男はベルと共にベルの住む村へと移動し、宿泊。
早朝、ベルは昨日まで話をしていた槍使いの男が居なかったので探し回っていると……。

「ふ、しっ、はあっ!!」
「やっぱり、英雄のお兄さん。凄い」
森の中で華麗にして壮絶な槍捌きを披露しており、ベルはそれの虜となった。

「……ふっ、一緒にやるか坊主?」
夢中になっているとベルが居るのにとっくに気づいていたのか、槍使いの男はベルへと笑いかけ……。
「……っ、うんっ!!」
そうして、槍使いの男は自分が予備として持っている短槍をベルへと渡し、そうして共に槍術の鍛錬を始める。
「……こいつは驚いた。坊主、お前は俺より強くなる才能が……英雄になれる才能があるぜ」
槍使いの男はベルが自分の技を見ながらの状態で完全に模倣してみせた事に驚きながらもそう言った。
「え、ぅ、嘘……そんな訳……」

「いや、ちゃんとこのまま努力し続ければ間違いなく、英雄になれるぜ。そうなりたいんだろ？」
「うん、僕もお兄さんのような人を助けられる英雄になりたいです」
　ベルは英雄としての勇姿を槍使いの男から見せられた事で英雄になりたいという想いと誰かを守りたいという想いを持つようになっていた。そうして、宣言する。
「ああ、なってくれ。そうしたら俺も将来の英雄を生み出した男として誇れるからな。約束だ」
「うん、約束」
　こうして、ベルは『英雄になる事』を槍使いの男と約束した。その後、男から『基礎が一番なんだぜ』と槍術の基礎を習ったベル。
　彼との別れの時には短槍だけでなく男が商隊の車より将来的にはこれを使えるようになれと長槍を渡され、ベルは男との約束を果たすべく毎日、槍術の鍛錬に励み続ける。

　そうして……。
「はあああっ!!」
　七歳になった頃、村の外へと出なければならない村人の護衛をベルは務め、生まれつき優れている脚力を活かした素早い身のこなしと共に男から渡された長槍を巧みに操

る事で村人を襲おうとしたモンスターの群れに対して、華麗にして壮絶なる槍捌きを披露する。
『グガアアアッ!!』
これにより、モンスターは断末魔の叫びを上げながら、全滅した。

「……外に居るのは『ダンジョン』で出て来るのより、弱いって言ってたっけ。なら、まだまだ」
ベルは自分を戒めるかのように、外で活動しているモンスターは本来の縄張りであり、この世界のとある都市に保有されている『迷宮』であり、ダンジョンで出てくるものより、弱いという事を振り返る。
「お祖父ちゃん、僕は絶対に英雄になるよ。お兄さんが誇ってくれるような英雄に。応援してくれる?」
「勿論じゃよ。お前はわしの自慢の孫じゃからな」
ベルの問いに祖父は特に迷うでもなく、すぐに答えて頷いた。

そうしてその日から少しして……『やあ、こんにちは』とベルの住む村に三人の人物が現れた。

一人は中背であり、旅人の服に包まれたすらりと伸びた手足、端整な顔つきで羽根付きの鍔広帽子から橙黄色の髪を覗かせる男だがどこか人じゃないような雰囲気をベルは感じた。

その男の傍に居る一人は男にも負けない美貌の持ち主で眼鏡をかけた碧眼は理知と怜悧な色を感じさせる。水色のかかった髪は一房だけ白いという特徴的なもの。

振る舞いや雰囲気は高貴なものを感じさせる。お姫様のようだとベルは思った。

そして、更にもう一人は虎の耳や尻尾がある獣人で大柄であり、屈強な肉体と顔つきを持つ戦士そのものな男であった。

「はい、こんにちは。僕はベル・クラネルです。格好良いお兄さんに、綺麗なお姫様のお姉さんに、格好良い虎のお兄さん」

ベルは正直に自分の感じた印象を相手へと伝える。

「中々、感性が鋭いね。ベル君……因みに俺は神様だぜ、名前はヘルメスだ」

ヘルメスはベルの言葉に笑いながら自己紹介する。この世界より上の世界から『超越存在』である神はこの世界の人々の可能性に惹かれ、共に生きる事を選んだ。

そのために自らの超常的な力を封じながらも自分の眷属となる事を誓った者に対し、

可能性を切り開く促進剤となる『恩恵』を与えるのだ。
そして、『恩恵』を与えられた眷属は本人次第でいくらでも自らの能力、格を上昇し続ける事も出来る。
外はともかく、ダンジョンで戦うなら『神の恩恵（ファルナ）』を得る事は必須であった。
そして、その神であるヘルメスがそして、その眷属がベルの元へと訪れたのである。
神と眷属の集まりは【ファミリア】と言い、今回は【ヘルメス・ファミリア】がやってきたという事になる。
「私はヘルメス様の眷属で【ヘルメス・ファミリア】の団長、アスフィ・アル・アンドロメダと言います。呼ぶときはアスフィで良いですよ……とても礼儀正しい返事ありがとございます。ベル」
「……ん」
アスフィはベルへと近づき、優しく微笑みかけながらベルの頭を撫で、ベルは心地良さげに目を細めた。
「俺は【ヘルメス・ファミリア】の副団長、ファルガー・バトロスだ。よろしくな、ベル」
ファルガーも又、ベルの頭を撫でる。
そして、【ヘルメス・ファミリア】が今回、やってきた理由とは……。
「ベル君、英雄になりたいって聞いたぜ。俺も英雄の誕生は望んでてね。だから君の夢

を応援させてもらいに来た。君のお祖父さんにも頼まれたってのもあるけどね」
　こうして、ベルは教養や知識、学問をアスフィからそして、戦闘における鍛錬はファルガーが担当となって指導される事となる。
　もっとも【ヘルメス・ファミリア】の本拠は『ダンジョン』を保有している都市であるオラリオにあり、ヘルメスは主神、アスフィは団長でファルガーは副団長という重要な者たちばかりなのでオラリオにはなるべく早く帰る必要があるので滞在は僅か、そのためある程度の周期などを設けて、ベルは村で指導される事となるのだった……。

一話

人に亜人、神々が多く集っている事から『下界の中心』と呼ばれ、モンスターの本来の生息地である『ダンジョン』よりモンスターが出ないように巨塔によって蓋をしつつ、ダンジョンには入れるようにしている事から『迷宮都市』とも呼ばれるオラリオ。

その都市では少し前まで『絶対悪』と総称される悪党による侵略を防ごうと都市内の全【ファミリア】が連合を組み、そのため一大決戦が行われていた。

結果としては見事、勝利を納めたが犠牲も又、大きく……それは【ヘルメス・ファミリア】も例外ではない。団長のリディスというヒューマンの女性が死んだのだから。

その後任としてアスフィが団長の座を引き継いだのである。元々、特殊な能力を有する魔道具（マジックアイテム）の製造する能力を持つ優秀さもあって色々と働かされ、それは『絶対悪』との決戦中も又、同じ。

そして、団長の座についてからもアスフィはヘルメスに働かされていた。ストレスやら疲労やらで堪らないってときにヘルメスは言ったのだ。

『ちょっと知り合いの子供……ベル君って子の教育、よろしく頼むぜ☆』

そんな軽いノリでまた、妙な事を……とはいえ、実際ベルというその子供に会えばなんとも可愛らしい子兎のような少年だったため、中々癒されたが……。
それに勉強の時間においても……。
「うーん、此処は……」
「焦らなくて構いません、ちゃんと自分で考えて答えを出すのが重要ですからね」
「うん、分かったよ。アスフィお姉ちゃん」
自分が出す問題に悪戦苦闘しながらもベルは素直にしっかりと考えて答えを出す。彼は一生懸命であり、努力家でもあるため最初は分からなくても次第に理解を深め、知識を蓄えていった。
自分がオラリオに帰っている時も予習と復習をしっかりやるので生徒としても好ましかった。
更には……。
「では、一度休憩にしましょう。ほら、ベルこっちに……」
アスフィは部屋の寝台に腰掛けると手招きする。
「はーい」
ベルは愛嬌のある笑みと共にアスフィの元へと近づき、背中をアスフィに任せるよう

にして彼女の膝の上に座る。
「ふふ、本当にベルは良い抱き心地ですね。力加減はどうですか？」
「大丈夫だよ、アスフィお姉ちゃん。もっとギュってしてほしいくらい」
「ふふ、そうですか。それでは……」
「はう……えへへ、ギュってされるの大好きー」
アスフィがベルの求め通りに強く抱き締めるとベルは喜びながら言った。
「私もベルの事は大好きですよ」
「やったー」

ベルの笑顔に癒され、心ときめかされながらアスフィはベルに言い、ベルはまた、喜んだ。
実際、指導の時だけでなくお風呂や就寝の時までアスフィはベルと共に過ごしている。それはベルが実に可愛がり甲斐や甘やかし甲斐があり、そうする事でアスフィのストレスも癒されていく。
それだけでなく、姉的存在としてベルへの親愛も抱いているため、ベルと過ごす時間はアスフィにとってなくてはならない程のものになっているのである。
「貴方と出会えて良かったです。ベル」

「僕もそう思うよ、アスフィお姉ちゃん」
ベルの頭を撫でながら、指圧マッサージのような事までし、更に顔も優しく弄り回しながら言うとベルも気持ち良さげな表情のままに言ったのであった……。

二

アスフィと入団時期が近く、彼女に足りない戦闘能力の埋め合わせをするように心がけているファルガーはアスフィが団長になった事で必然的に副団長の座に就いた。
彼も又、アスフィのようにヘルメスやリディスに苦労させられたものである。そんな彼はある日、ヘルメスから『ファルガーはベル君への戦い方への稽古、頼むぜ』と無理難題としか思えない事を言われた。
ベルはどうも数年前、一人の男から槍術を習ったと聞いたがそれでも七歳の子供だ。どう、稽古つけようか考えながら初めてみると……。
「えいッ!!」
「っ!?」
試しにベルの槍の素振りをさせた瞬間、ファルガーは驚愕する。子供の身には全く似

つかわしくない程の鋭さであり、流麗さを有する槍の舞をベルが披露したからだ。
身の丈の二倍はある槍を完全に手に馴染ませているどころか体の一部にしている程であり、槍の間合いすらもしっかりと把握していた。
『恩恵』も得ていないのだ……まるで古代の英雄のようですらある。
「(ベル……君は一体……)」
一体、どれほどの才能をその身に有しているのだと驚愕しつつも……。
「(面白い)」
ファルガーの戦士としての部分がベルが将来、どれだけの戦士になるのかその果てを見たいと疼く。
そうして、実戦形式で鍛錬を始め……。
「やあああああッ!!」
「ああ、良いぞ」
ベルは『神の恩恵』を有し、【ランクアップ】という器の成長も遂げてダンジョンのモンスターとも戦えるファルガーに対し、限界など無いとばかりに研ぎ澄まされていく流麗であり、魔性の輝きすら持つ槍術にて立ち向かう。
人の動きを一度見ただけで模倣できる能力を転じ、相手の動きを完全に理解する洞察力と分析力とそれに伴う有効打の選択、あるいは有効となる技を編み出し、槍の間合い

を把握した立ち回りといったように戦闘において重要な『技と駆け引き』をもってファルガーと渡り合っていくのだ。

「良し、俺も本気を出していくからな」
「うん、望むところだよ。ファルガーお兄ちゃん」
そうして互いに全力を出して手合わせを始めたベルとファルガーだが……。

「うーん……面倒かけてごめんなさい、アスフィお姉ちゃん」
「……まあ、次からちゃんと気をつけてくれるなら、それで良いですよベル。ですが、ファルガー、貴方って人は……」
「……すまん」
『技と駆け引き』は天才を越えた領域であるベルでも体力などは別であり、気合と根性で奮起したとはいえ、結局はバタンキュー。
そのため、ファルガーはアスフィに呆れられながら、怒られてしまった。

とはいえ、ファルガーはベルの師匠となる事に意欲を出す事となり、その結果、数年後には第一級冒険者の座にまで上り詰めるのだがとある事情から【ファミリア】の戦力をオラリオにて偽っている【ヘルメス・ファミリア】はファルガーの実力を隠す事に苦労する事になるのは別の話である……。

三

ベル・クラネルはヘルメスにアスフィ、ファルガーと出会った事で彼にとってとても楽しい日々を送っていた。

そして、ヘルメスたちが【ファミリア】という集団であるために質問する事にした。

「ねえ、アスフィ姉ちゃん。お姉ちゃんの【ファミリア】には金髪で綺麗なエルフの女の人っている?」

「はい、いますけどどうしたのですか？」
「いや、お祖父ちゃんが金髪のエルフの女性とは会うべきだって前に言ってたから……」
「……ベルのお祖父さん、後でお話が」
「うぐッ!?」
　何やら妙な事を吹き込んでいるらしいベルの祖父をアスフィは威圧しながら言った。
「それで、ベルは貴方の言うエルフに会いたいですか？」
「うん」
　アスフィからの質問に特に下心なく、頷きベルは答えた。
「分かりました。なら会わせてあげますね」
「わーい、アスフィお姉ちゃん。ありがとう、大好きー!!」
　ベルは微笑みながら自分の頼みを聞いてくれたアスフィへと満面な笑みを浮かべながら抱き着く。
「ふぐッ!?　え、ええ……どういたしまして、私もベルが大好きですよ」
　アスフィは強烈な衝撃を受けながらも何とか耐えてベルの好意に応えつっ、抱き締め返す。
「うーん、中々ベル君も天然だなぁ」

「わしの孫ながら、凄いな」
ヘルメスとベルの祖父はベルとアスフィの様子にそう、呟いた。

そしてこのやり取りがあった数日後……。
ベルの元へと結わえた金の長髪と濃緑の瞳を持つ美麗なエルフの女性であり、【ヘルメス・ファミリア】の団員であるローリエ・スワルがアスフィにファルガー、ヘルメスとともに訪れ……。
「僕はベル・クラネルって言います。よろしくお願いします、エルフのお姉さん」
祖父から言われたために出会う事に憧れていた存在とのそれが叶った事で喜び全開のベルはローリエへと挨拶する。
「(ッ!?)」
ローリエの種族であるエルフとは種族柄、心を許した者でないと手で触れあう事すら嫌う程に潔癖のそれが強いし、女性ならば操も固いという恋知らず。
しかし、そんなローリエに純真無垢で愛嬌溢れるベルの笑みが炸裂し、更に彼女すら知らない異性に対する彼女の嗜好は年下ヒューマン白髪赤眼……つまりはベルがドストライクである。
よって……。

「わ……私はローリエ・スワルだ。こちらこそ、よろしくお願いする……」
ローリエは顔を赤く染め、胸すらときめかせながらたどたどしくベルの手を握る。
「うん、ローリエお姉ちゃん」
「っ!!　ふわあぁぁ……」
そして、ベルの笑顔にさらに衝撃を受けて、悶える。
『(堕ちたぁぁぁぁぁッ!?)』
アスフィにファルガー、ヘルメスにベルの祖父全員がローリエの様子に対し、感想を一致させる。

「ベル君はとても、可愛いなぁ」
「でしょう」
「んふふ……」
その後、ローリエはアスフィと共にベルを愛で始め、ベルは幸せそうな様子で二人にされるがままとなるのであった……。

二話

人に亜人、神々問わず性格や振る舞いなどに変化を与える一番の物とはやはり、他者との出会いであり交流である。

「うへへ、ベルくぅん……君は本当に可愛いなぁ」

【ヘルメス・ファミリア】のエルフの団員であるローリエはベルとの出会いにより、彼女にとってベルが理想的な異性だったのもあるがすっかり、惚れこんで夢中になると彼女の担当する仕事が都市外担当での諜報活動が主なのもあって、頻繁にベルの住む村へと足を運んでいた。

一応、団長と副団長のために仕事が忙しく、ベルの元へと行く機会を作りづらいアスフィとファルガーに代わってベルの様子を見に行くことが出来るのである程度、ローリエのその行為は容認されていた。

只、普段の殆どはベルに対し、想いを馳せているどころか拗らせまくっているのでドン引かれてもいたが……。

『出会いを知ったエルフは面倒ってのはこういう事か……』

エルフに対し、まことしやかに言われている事柄をローリエは身をもって証明してしまっているのだった。

そして、ベルとの出会いにより、変わったのは無論、ファルガーでもある。

「……成程、そういう事か。まぁ、事情は分かったし気持ちも分かる。君たちのところの魔道具は役立つし、良いよ、君からの個人的な依頼を受けよう」

「すまない、【勇者（ブレイバー）】」

オラリオの冒険者における二つ名で【勇者（ブレイバー）】を冠している冒険者であり、このオラリオでの最大派閥の【ファミリア】の団長を務めていて、槍の達人でもある冒険者に対し、ファルガーは個人的な槍術の指導を頼んだ。

それは自分を経由してベルに槍術を伝えるためである。直接、ベルへの指導を頼まないのはその冒険者がオラリオにおいて重要戦力なので都市外への外出が厳しいのと師匠としての意地もある。

ともあれ、ファルガーが【勇者】と呼ばれる冒険者に事情を話すと彼は理解を示し、自派閥の団長であるアスフィが製造する魔道具のかなりの提供を条件にしたとはいえ、依頼を引き受けてくれた。

「ベル、俺も頑張るからな」

そうして、積極的に自己研鑽にファルガーは励み、ベルの師匠でありつづけられるよ

うに実力を高めていくのだった。

このようにベルとの出会いによって変わっている【ヘルメス・ファミリア】の者たち。

だがその中でも一番、変わった人物と言えば……。

「（駄目ですね、すっかりあの子の事ばかり考えるようになってしまいました）」

今までは他者からの視線、特に異性に対するそれなどは仕事の上でぐらいしか、意識することは無かったのに今では普段から意識するようになってしまっている。

無論、ベル良く思われたいからでベルはとても素直であり、純粋なので自分に対して見惚れるそれが心地良いのだ。

ローリエ程ではないとはいえ、それでも彼女の事を言えない程にアスフィも又、ベルに夢中である。

そんな彼女の雰囲気も今までは怜悧な印象が強かったのだが、柔らかい物が加わっていた。

だから、だろう。

「……ほぅ」

他派閥のとある冒険者の女性はアスフィの変化に何かを感じ取り、面白そうだと笑み

を浮かべたのであった……。

二

出会いに交流は人を変える。それは無論、ベルも例外ではない。

「よっ、はっ!!」

今まで身内は親代わりとなっている祖父だけだったのが教養や雑学、勉学の指導者でありながら、姉代わりにもなってくれているアスフィ、戦闘面における指導者であり、兄代わりにもなってくれているファルガー、そして頻繁に様子を見に来てくれてやはり、姉代わりになってくれているローリエにアスフィたちの主神であり、自分にも良くしてくれているヘルメス等、【ヘルメス・ファミリア】との出会いと交流を通してベルにとって日々は楽しい物になったし、英雄を目指す意欲も増した。

「(早く来てくれないかなー)」

忙しいアスフィにファルガー、ヘルメスに代わって良く自分の元へと来てくれるローリエもであるが、アスフィたちが来てくれるのを願うベル。

そんなベルの髪は長く、服装も男女どちらともとれるようなものを着ている。
少し前にアスフィから『長い髪、似合いそうですね』と呟かれ、ベルはそんな彼女に『じゃあ、伸ばす』と答え、手入れなどを教えてもらいながら髪を伸ばすようにしているために長くなりつつあった。
そして、服装の方はオラリオからアスフィとローリエが選んで持ってきているのを着ているからである。
見た目も心情にも変化が訪れているベルは今日も又、早朝の自己勉学を終えた後、ファルガーという冒険者の中では中堅という実力者との手合わせを通して他に入れた戦闘感覚によって、更に磨かれている槍術の鍛錬に励んでいると……。
「……これは何とも素晴らしい槍の技……可愛らしい兎さんなのにびっくりしました」
拍手と共にベルは女性から声をかけられた。
腰まで伸びる絹のように滑らかな長い黒髪であり、前髪を額の位置で切り揃え、簪を指しており深窓の姫君のような美貌と振る舞い、濃赤の着物という島国、極東の衣装を身に着け腰には鞘に納めた長刀を差している女性だ。
彼女の名はゴジョウノ・輝夜。
オラリオにて所属する派閥の独自的な活動により、治安維持に励んでいる【アストレア・ファミリア】の副団長である。

アスフィの変化が気になった彼女はアスフィの主神であるヘルメスとお話した事でベルの事を聞き出し、こうして足を運んだのだ。

そして、ベルの槍術を見てまだまだ幼い年齢に反し、冒険者ですら顔負けのその技巧の凄まじさに内心、驚愕しながらベルへと声をかけた。

「ありがとうございます、綺麗なお姉さん。初めまして、僕はベル・クラネルです」

「これは丁寧に……私はゴジョウノ・輝夜。アスフィ様とは【ファミリア】は違えど、仲良くさせてもらっています。そんな彼女から貴方の事を聞いたので気になって、会いに来ました」

「はう、そうだったんですか」

輝夜はベルへとしれっと言いながら、彼の頭を撫で始めその感触に満足し、ベルはベルで心地良さに身を任せた。

「ええ、なので私ともアスフィ様のように仲良くして頂けますか？」

「はい、勿論です」

輝夜に対し、ベルは笑顔で頷き答えた。

「ありがとうございます。それではよろしくお願いしますね、ベル……あ、それとアスフィ様にするように接してください」

「それじゃあ、よろしくね。輝夜お姉ちゃん」

「っ!!（ふふ、これは中々……【万能者（ベルセウス）】が夢中になるのも良く分かる。悪いが私も一枚、噛ませてもらうぞ）」

自分に対し、素直に明るい笑みで応じるベルの姿に胸をときめかされながら、笑みを浮かべる輝夜は内心でベルを気に入りながらアスフィへと言ったのだった。

「んふふ」

ベルはまた一人、自分と親しくしてくれる者が出来た事を純粋に喜び、頭を撫でられる心地に浸っていたが……。

三話

山奥の森で縦横無尽に動き回る黒と白の影による舞が披露され、それに伴い音が鳴り響き続ける。

しかして実情として披露されている舞は黒の影こと【アストレア・ファミリア】の副団長であるゴジョウノ・輝夜による刀舞と白の影ことベル・クラネルによる槍舞であり、音を奏でているのは長刀と槍が衝突しあっているからである。

輝夜とベルは手合わせを行なっており、戦況としては互角。

そうなっているのは輝夜の刀舞が粗野な泥踊りと化してしまう程の流麗な槍舞――下界の人類においては鋭い技の冴えを有し、間合いの管理や感覚的な読み合いなどを含めたあらゆる『技と駆け引き』の面はベルが先を行っているが、しかし体力や腕力など能力の面においては輝夜が先を行っているからである。

「（輝夜お姉ちゃん、ファルガーお兄ちゃんより強い）」

手合わせを通してベルは輝夜がファルガーよりも優れた戦闘能力と技術を持っているのを把握していた。そして、それは当たりである。

冒険者であり、神の眷属にはＬＶ．という『神の恩恵』による自分の『器』を示すものがあるのだが、ファルガーがＬＶ．３なら輝夜はＬＶ．４なのである。

「(まさか、これ程とは……)」

自身が副団長である【アストレア・ファミリア】の中でも白兵戦に優れる輝夜はだからこそ、ベルの技量と駆け引きの巧みさに驚愕する。

「(これでは、まるで……いや、待て)」

それと同時に思い返した。

才能という面において『才禍の怪物』と言えてしまう程の領域にあるベルの姿に自分たちが少し前に『絶対悪』との戦いにて対峙していた者の姿を想起したからである。

そして、思い返してしまえばこれ以上ない程に姿が似ている事にも気づく。

「(後で問い詰めてみるか……)」

輝夜はそして、ベルの祖父だというどうも何かを隠している匂いがしている者を問い詰める事にしつつ……。

「はぁはぁ……輝夜お姉ちゃん、どうしたの?」

思案に耽っていた事で一旦、様子を見ていたベルは問いかける。体力の面では輝夜に劣っているためにその息は大分、上がっていた。

「いえ、大丈夫ですよベル……ふふ、それにしても私が想像するよりも遥かに強いですね、流石は英雄を目指すだけはあります」
「えへへ、ありがとう。でも輝夜お姉ちゃんもファルガーお兄ちゃんより強くて驚いたよ」
「それはどうも」
自分の言葉に素直に反応し、照れながら笑うベルを微笑ましく思いながら輝夜は応じる。

「では……そろそろ私も本気を……奥義を見せてあげましょう」
そして、輝夜は言いながら刀を鞘に納めて半身の構えを取った。極東における刀術の技である『居合』だ。
「(っ、迂闊に踏み込んだらやられる……)」
ベルは輝夜の居合の構えから下手に踏み込んだら自分は敗北するそのプレッシャーを感じた。
「それじゃあ、僕も……」
故に最近、編み出した技を使う事に決めた。
体全体を縮めるかの深い前傾姿勢となりながら、槍を撓らせながら穂先を地面に押し

付ける構えを取る。

そうして……。

「やあああっ!!」

次の瞬間、ベルの体が地面から輝夜へ向かって、兎の如く跳躍すると共に突撃し、鋭く強烈な刺突を片手に持った槍にて輝夜へと放つ。

「っ!?」

輝夜は辛うじて居合の一閃によって弾くもその威力と鋭さに驚愕していた。

「あう……やっぱり、輝夜さん凄い」

「いえいえ、先ほどの突きは大変素晴らしかったですよ、ベル。では今日はここまでにしましょうか」

「はぁい」

輝夜の言葉に返事を返すとそうして、手合わせを終える。因みに輝夜がベルに指導するのは戦いにおけるものだけではなく、極東にて貴族の地位にある家柄の為、勉学を納めているのでそうした指導も出来た。

よって、勉学も当然、付き合っているのだが……。

「ふう」
「っひゃあ!!　ちょ輝夜さんや、止めてぇ」
　耳に艶のある息を吹きかける事で悶えさせる悪戯や擽ったりと悪戯を頻繁にした。
「も、もう苛めるの止めてくださいよ輝夜さんっ!!」
「いえいえ、可愛がっているだけですよ。ベル」

　そんな事を言いながら、輝夜はベルへの悪戯を楽しんだのであった。こうして風呂に入り、ベルを抱きながら一旦、眠った輝夜だが少しして起き上がるとベルの育ての親代わりとなった祖父の元へと行き……。

「貴方は――ですね。――は人に紛れ込める者もいると女神様から聞いています」
「……ああ、その通りじゃ」
　彼の正体を聞き……。
「では、ベルは――の息子ですか?」
「正確にはその妹のだ」
　彼の母親の事も聞いた。

「そうでしたか……安心してください。気になったから聞いただけで特にベルに何かするつもりではありませんし、この事は女神様や団長たちにも秘めておきますので」
「そうしてくれると助かる」
納得を得ると輝夜はベルの元へと戻り、眠っている彼に悪戯しながらその反応を楽しみつつ、眠りについたのだった……。
ベルが輝夜とも出会って少しした頃……。

「あ、待ってたよ。ヘルメス様、アスフィお姉ちゃん、ファルガーお兄ちゃん、ローリエお姉ちゃん」
「どうも、【ヘルメス・ファミリア】の皆様方」
『よりにもよって厄介な相手が……』

朗らかにヘルメスたちを出迎えるベルと裏を感じさせる笑みと共に出迎える輝夜。
ヘルメス以外は厄介な相手に知られ、これから面倒なことになるのを悟った。
輝夜に問い詰められたヘルメスは気まずそうに顔をそむけたが、当然この直ぐ後、アスフィに絞められてしまったのであった……。

四話

古代の時代、大陸の片隅に『穴』が開いた。そして、その穴より這い出るは狂暴な異類異形の怪物である『モンスター』。

彼らは世界を侵略するが如く怒涛の勢いで下界中の生物たちにその牙を、爪を、そして暴威を撒き散らしていき、餌食としていく。

そうして、そんなモンスターに対抗するべく人と亜人、種族の垣根を越えて協力し反撃する。

その結果として、モンスターの大半を『穴』へと押し返し、モンスターの地上進出を阻むために塔と要塞によって蓋をしたのだ。

そうした下界の人々の奇跡が如き、活躍であり可能性の輝きを下界よりも遥か上位の世界である『天界』より見下ろしていた『超越存在（デウスデア）』が『神々』は夢中となり、そうして下界の人々と共に生きる事を決める。

超越者としての『力』を封じながら、自らを支える眷属となる者に『可能性』を切り開く切っ掛けの役目を持つ『神の恩恵（ファルナ）』を与え、【ファミリア】という組織として神と人々

は共に生き始めたのだ。
こうした時代を『神時代』と言った。
そんな神時代では多くの【ファミリア】がモンスターの住まう本来の世界で、『穴』から入れる地下世界であり、未知に塗れた領域である『ダンジョン』を抱える大都市であり、迷宮都市の『オラリオ』に居を構えている。
だが、それだけでなく国と化すほどの【ファミリア】を築いているなど下界中に【ファミリア】は広がっている。

そして、【ファミリア】の中には定住地を設けずに大陸を渡り歩いてはモンスターの討伐を行う【ファミリア】も存在する。
「森が騒がしい……いくぞ、ランテ」
「ちょ、待ってくださいよ」
とある森の中にて野営を築き、夜を過ごした『狩猟』の派閥である【アルテミス・ファミリア】。
爽やかな空気の為か普段、早起きする女眷属（そもそも全二十人の眷属全員が女だが）よりも早起きした青い長髪を結わえ、顔もスタイルも優れた美しき女神でありながら弓に片手剣、自らの眷属よりも『技と駆け引き』に優れ自ら戦闘指揮を執りながら、眷属

と共に戦う武闘派であるアルテミスは森の騒がしさに異変を感じ取り、眷属の中でも足の速い女眷属に指示を出しながら、自ら向かって行った。
「見つけたっ、ふっ!!」
そして、森の隙間から駆けだし、姿を見せたモンスターに対し素早く弓を構えて矢を番え、アルテミスは矢を放った。
『矢を射るのだから、それは必中』という彼女の道理に従い、矢はモンスターへと進み……。
『ガッ!?』
「ん?」
モンスターに自らが放った矢と同時、別方向から飛来した槍がモンスターの身を貫いたのだった……。

二

村に住みながら、オラリオに居を構えている【ヘルメス・ファミリア】のヘルメスからアスフィにファルガー、【アストレア・ファミリア】の輝夜と交流しながら教養に雑学、

武技に戦技を習いながら英雄となるべく自らを高めているベル・クラネル。
それだけでなく畑仕事など祖父や村人を手伝ったり、モンスターの魔の手から村を守れるよう周辺を巡回していたりもする。
そんなベルの装備は『神の恩恵』程では無いが、身に着けた者の身体能力を向上させるアスフィ特製の魔道具であり、ペンダントに『神の恩恵』を刻んだ眷属であり、冒険者が使う用で従来の物より重いがしっかり馴染ませ、性能も高い長槍と輝夜より彼女の技と共に譲られた長刀である。
「やあっ!!」
ベルは今朝、周辺をうろついていたモンスターの群れを縦横無尽に槍を唸らせては屠っていく。
「ガゥァッ!!」

ベルの実力に恐れをなしたモンスターの一匹は逃亡を図って逃げる。
「逃がさないよ」
槍を回転させて勢いをつけると上空へと投げると共にベルも又、飛び上がり……。
「はあっ!!」
回転しながら落ちてくる槍を蹴るようにして、モンスターに絶命を与える『矢』へと

変えながら飛来させた。
『ガッ!?』
「え?」
絶命の矢と化した槍はモンスターに突き刺さったが同時に別方向から飛来した弓矢による矢がモンスターに突き刺さったのを着地したベルは訝しんだ。
槍と矢に核である『魔石』を貫かれ砕かれたモンスターの体は消滅したのでとりあえず、槍を拾おうとその場へと向かえば丁度、矢を放っただろう者も向かっており……。
『あ』
こうしてベル・クラネルと女神アルテミスは出会った。
「(アスフィお姉ちゃんにローリエお姉ちゃん、輝夜お姉ちゃんみたいに綺麗……ヘルメス様みたいな雰囲気も感じるし多分、女神様だよね?)」
ベルはアルテミスの美しさがアスフィたちかそれ以上であったために見惚れ……。
「(……な、なんだ。この気持ちは……)」
アルテミスはベルの兎如き、可愛らしい姿を一目見ると胸がときめき、不可思議な鼓動をする。それに戸惑った。
そう、彼女は『処女神』であるため、貞淑を司っている彼女は恋愛知らずどころか恋愛アンチ。眷属にも男女交際を禁じている程。

それなのに、なんと彼女は……。

「えっと、女神様ですよね？　初めまして、僕はこの近くにある村に住んでいるベル・クラネルです」

ベルは戸惑っているアルテミスに自己紹介しながら、微笑みつつ手を差し出す。

「っ!!　あ、ああ……私の名前はアルテミスだ……よ、よろしく頼む。ベル」

アルテミスはベルの笑顔に彼女の意思とは無関係に胸がときめき、激しく鼓動。顔も赤くなり、熱くなるままに彼女はベルに自己紹介をしながら、その手を握る。

「はい、よろしくお願いします。アルテミス様」

「っ～～～～、あ、ああ……」

更に笑顔を浮かべた事や自身の手を握ったベルのそれにアルテミスは堪らず、顔を伏せてしまう。

それは傍目から見て……。

「（アルテミス様が恋をしたあああああああああああああッ!?）」

アルテミスに遅れてこの場へとやって来たランテは確信しつつ、驚愕したのであった……。

五話

モンスターの多くは古代、人と亜人による猛攻によって這い出てきた穴へと押し戻され、モンスターが文字通り、生まれ続ける魔窟である『ダンジョン』から地上へと進出できないようにされた。

その過程の中で逃げ延び、自らの魔石を分割するという弱体化というリスクを背負って、数を増やす事を選択したモンスターの生き残りが居る。もっとも例外はある者で中には『主』と呼べるほどの強大なモンスターが大陸のどこかにいたりはするが……。

そんな未だ、大陸にて繁殖し村や国などを襲っているモンスターを狩る事で下界の者たちを守っている【ファミリア】が存在する。

女神アルテミスが率いる全二十人の女性眷属で構成された『狩猟』の派閥たる【アルテミス・ファミリア】であり、ベルはその【ファミリア】と遭遇。

アルテミスがベルに一目ぼれしたり、女性寄りな顔つきで格好も中性的な服装であるため、一瞬アルテミスが同性愛的なそれだと思われたり、色々とあったが……ベルの住む村近くにて食料の蓄えやら次の旅に向けての休息も兼ねて【アルテミス・ファミリア】

は三日ほど野営する事となった。
そしてベルは【アルテミス・ファミリア】の野営地へと行き……。

「よぉし、それじゃあこのランテお姉さんが試してあげよう」
自分がオラリオに居る【ヘルメス・ファミリア】のアスフィやファルガー、【アストレア・ファミリア】の輝夜に指導を受けながら村を守っている事を伝えると特にアスフィと輝夜は二つ名がオラリオ外に広まる程の実力者とあって驚かれながらも興味を示したランテが言いだす。
もっとも……。
「(適当に押し倒して悪戯しちゃおうっと……ぐへへ)」

そんな下心あったりもしたが……。
「分かりました、よろしくお願いします」
ベルは承諾し、ランテと場所を移動しながら長槍を構え、ランテは片手剣を構える。

「ベル君、頑張れー」
「ランテ、大人げない事をしないでよ」

ベルはまだまだ子供であり、恩恵も受けていない事で団員たちの多くはベルを応援し、赤髪を後ろに結った女性である団長のレトゥーサはランテを注意する。

「それでは、始めっ!!」

アルテミスが審判代わりに合図をすると……。

「ふっ!!」

「……ふぇ?」

合図とともに『技と駆け引き』を持って、ランテに反応許さず、槍の穂先を閃光の如く、走らせてランテの持つ片手剣へと激突させて弾くとそのまま首元に槍の穂先を突き付けた。

何がなんだか、分からずランテは大混乱。

「勝負あり、ベルの勝ちだ。見事な槍の技だったぞ」

「えへへ、ありがとうございます。アルテミス様」

アルテミスはベルに勝利を告げると近づき、頭を撫でてベルは嬉しそうに笑う。その笑顔に又、アルテミスは胸をときめかせた。

『……凄ぉぉぉいっ!!』
「……まるで武神だな」
ランテ以外の眷属はベルに対し、驚愕しながらも讃えてレトゥーサも唸った。
「ちょちょちょ……も、もっかいだけやらせてよベル君。こ、これじゃあ……わ、私の立場が」
ランテはみっともなくベルへと再戦を要求する。
「良いですよ」
「ランテが済まないな、ベル」
ベルは拒否もせずに応じ、アルテミスは溜息を吐きながらベルの頭を撫でて詫びる。
そうして再戦する事となり、ベルは槍では無く長刀を鞘に納めたまま、腰から抜いて半身で構える。
「先手は譲りますよ」
「あ、ありがとう。それじゃあ遠慮なく……やああっ!!」
ベルの言葉にランテは応じ、眷属の中でも抜群の速さが取り柄な彼女はそれを発揮し、ベルへと迫るが……。
「居合の太刀――『一閃』」
瞬時にベルは輝夜直伝の居合の技を使用し、鞘から抜き放たれ、銀光を放つ超速の刀

閃がランテの片手剣をまたも弾き飛ばす。
「居合切りいいいいっ!?　【大和竜胆】はなんて技、教えてんのよぉぉぉっ!!」
極東に伝わる刀術の奥義をベルが使った事でその師である輝夜に対し、ランテは文句を言った。

「さ、最後……あと一回だけ、やろうベル君。公平に素手で」
「良いですよ」
『ランテ……』
そうして更にみっともなくランテは懇願し、ベルは承諾する中アルテミスたちはドン引きした。
「もうこうなったら、やけくそだぁぁぁぁっ!!」
ランテはアルテミスの合図を待つ事なく、全速力でベルを捕えようと突撃し……。
「はあっ!!」
「ふべっ!?」
ランテへと踏み込むと共に地面を蹴り上げる事で跳躍しながら、右の回し蹴りというカウンターを彼女の顎に炸裂させるとランテは一瞬、意識を失って倒れた。
ファルガーと輝夜との鍛錬にてしっかりベルは格闘の技も仕込まれ、そうして彼は足

技を身に着けていたのだった。
「……うわぁぁん、あの子は兎の皮を被った怪物だよぉぉぉぉっ!!」
意識を取り戻すとランテは半泣きで叫んだ。
「……ランテお姉ちゃん、嫌い」
怪物と言われた事でベルは気分悪くなったのでそう言った。
「わ、わあああっ、ご、ごめんねベル君。謝るから嫌いにならないでぇぇっ!!」
可愛らしい兎のようであり、彼女にとっても好みなベルに嫌われた事でランテは謝った。

「それとうるさい」
「ぐふっ!!　す、すいません」
実はアスフィにローリエ、そして輝夜へとベルの祖父は覗きやらセクハラしようとするのだが、アスフィたちは容赦なく撃退しており、特に輝夜は毒舌にて罵りながらとっちめたりしている。
その毒舌がベルにも移ったりしていた。可愛らしい見た目から放たれた容赦ない毒舌がランテの心を射抜いて本気で謝らせたのであった。
「ま、まぁ今回だけは私に免じてランテを許してやってくれ。やりすぎる事は多いが、

ムードメーカーなんだ」
「安心してください、アルテミス様。ランテお姉ちゃんが悪い人じゃないってのは良く分かりますし、只の冗談ですから」
「そうか、それは良かった」
アルテミスに頭を撫でられながら、ベルは彼女と自分にとっては他愛のない話をする。
「あ、ありがとうございますベル様、アルテミス様」
ランテは心底安心しながらそう、平伏して感謝を示した。
『ランテ……』
レトゥーサたちはランテに呆れた。
「良し……良い物を見せてもらったし、私からもベルに見せよう」
そうして、アルテミスは的と弓矢を持ち出させ、弓術の披露の場を作る。

「ふっ!!」
「凄いです、アルテミス様」
アルテミスが弓を構えては矢を番えた直後、見事、矢を的の中心に命中させた事でベルは彼女の弓の腕を賞賛する。

「ふふ、やってみるかベル？」
「はい!!」
そうして、ベルがアルテミスへと近づけば彼女はベルに弓矢を渡しつつ、傍について弓術の指導を手取足取りでし……。
「おおっ、出来た」
アルテミスと共に放った矢は先にアルテミスが貫いていた矢の羽根から割いて的の真ん中に突き刺さる。
「ああ、弓もなかなか悪くないだろう」
「はいっ……あの、次は一人でやってみて良いですか？」
「勿論だ」
ベルからの要求に頷くとベルから離れて眷属と共に様子を見れば……。
「むっ」
『っ!?』
弓を構え、矢を番えたベルの姿勢を見てアルテミスも眷属たちも驚愕する。ベルのそれは全くもってアルテミスと同じだったからだ、
「ふっ!!」
そうして、ベル一人で放った矢は又も先に的を貫いていた矢の羽根を割いて的の真ん

中に突き刺さった。
「驚いた。一回で私の弓術を完璧にやってしまうなんて……凄いじゃないか、ベル」
「えへへ、実は一度見た動きは真似出来ちゃうんです。それにアルテミス様の教えも良かったですから……」
「そうか……」
『（……ええ）』
ベルとアルテミスのやり取りは微笑ましいが、ベルの見せた才能と言うなの暴力ぶりににレトゥーサとランテたちは絶句したのであった……。

二

ベルの住む村へと【アルテミス・ファミリア】が滞在してもう三日、つまり明日には旅立つ事になる。
その間、アルテミスたちから彼女の今までの話を聞いたり、アルテミスから弓術の指導（予備の中から長弓と幾つかの矢を納めた矢筒を贈られた）を受けたり、アルテミス

たちにセクハラかまそうとしてやっぱり撃退される祖父に『なんで懲りないんだろう』と疑問を持ったり、祖父は悪影響だとして【アルテミス・ファミリア】の野営地にてアルテミスに抱かれながら眠ったりした。

そして、満月の光が照らす中、湖の近くにベルとアルテミスは二人で居た。

「とうとう、明日ですね……その、アルテミス様やレトゥーサさん、ランテさんたちとの時間、とても楽しかったです。ありがとうございました」

「私のほうこそ楽しかったぞ、ベル……ありがとう」

二人は微笑み合いながら、言葉を交わすと抱き締め合う。

「えへへ、やっぱりアルテミス様に抱き締められるの、まるでお母さんに抱き締められているみたいで暖かくて、凄く安心します」

ベルはアスフィやローリエ、輝夜にレトゥーサやランテたちからは姉のようなそれを感じていたが女神であるアルテミスからはベルが物心つく前に亡くなった母の暖かさとはこういうものだろうと、そんな雰囲気を感じ心地良くなっていた。

もっとも神にとっては下界の者は誰もが子供という事になるのでベルの感性は間違いでは無い。

「私もベルの抱き心地は好きだぞ……」
「アルテミス様、いつかまた会いに来てくださいね。僕は此処か、オラリオで待っていますから……」
　ベルはアルテミスたちに自分の夢である『英雄になる事』、そしてそのために将来的にはオラリオへと行く事を言っている。
　なので一度、アルテミスの眷属になる事を誘われたが、断ったのだ。

「ああ、勿論だ。だからそれまでこの月を通して、お前の事を見守っている。だから、私に会いたいときは月を見上げてくれ」
「はい、アルテミス様……大好きです」
「ああ、私も大好きだ……そして、愛している」
　ベルの言葉にアルテミスは答えると共に彼の額に口づけした。
「え……ぁ……」
　ベルはアルテミスからの額への口づけに照れ、胸が不自然に鼓動し戸惑う。
「ふふ、レトゥーサ達……特にランテには内緒だぞ。そして、これから二人きりの時はお前の事を【狩人（オリオン）】と呼ばせてくれ。私が特別な者へと送る名だ」

「特別……はい」
「本当に良い子だな」
こうして、二人きりでベルとアルテミスは月夜の中で気持ちを交わし合った……アルテミス達と別れた後日、アスフィにローリエ、輝夜に【アルテミス・ファミリア】との思い出を軽いところだけ話せば……。

「そうですか、あの【アルテミス・ファミリア】に……それは良かったですね」
「ふふ、流石はベル君だ。色んな人に好かれるな」
「いやはや、楽しい思い出が出来たようで何よりです」
そう、アスフィたちの言葉は優し気なものであったが……。

「ふひゃはは……あむ、くふ、あ、ああ……や、止めて、アスフィお姉ちゃんたちぃ・な、なにするのぉぉ……」
『お仕置き』
擽られたり、顔を弄られもみくちゃにされたり、ベルはアスフィたちから嫉妬によるお仕置きをされてしまっていた。

そんなベル達とは別の場所では……。

「あ、あの……大の恋愛アンチのアルテミスが……俺、ベル君の事が怖くなってきたよ」
「ふふふ、見てろ。このままいくとあれに追い回されるわしみたいな事になるぞ。流石はわしの孫じゃな」
「あんたが言うと、説得力や実感が違うから止めてくれ……」
ベルの祖父とヘルメスがそんな会話をしたのであった……。

六話

　この下界において人や亜人を脅かすのは下界に未だ蔓延っている『モンスター』だけではない。
「へへへ、流石はかの有名な【アルテミス・ファミリア】様だ。全然、モンスターに出くわさねぇぜ」
　森の中を十人近い人数で進むヒューマンの男たちは武具を持っており、明らかに只の旅人たちでは無かった。
「確かにこの近くに『村』があるんだな？」
「ええ、そう聞いています」
「さぁて、金になるものや美女がいたら最高なんですけどね」
「こんな田舎なんだから、大したものは無いに決まっているだろう。まあ、身を落ち着ける場所くらいにはなるけどな」
「ともかく、やっちまうか」
　そう、男たちは野盗である。

大陸を渡りながら、モンスターを狩猟している【アルテミス・ファミリア】がこの近くに滞在した情報を掴んだことで周辺のモンスターを狩ったのだと判断し、野盗たちは近くの村にて略奪を働こうとしていた。

下界の人に亜人を脅かすのは何も『モンスター』だけではない。同じ下界に住む人や亜人どうしが脅威を齎し、その身を脅かし合う事だってあるのだ。

しかし、今回、野盗たちは目当てとする村にて略奪を働く事は出来ない。

何故なら……。

「はあっ!!」

木々の隙間より、凄まじい勢いで飛び出してきた何かがその手に持つ凄絶なる槍による刺突が一人の男の体を穿ち抜いた。

『なっ!?』

そして、物言わぬ死体となった男の仲間たちは奇襲を仕掛けられた事や奇襲を仕掛けた者が子供である事などに動揺し、混乱。

「やあああああ（絶対にさせないっ!!）」

自分の村を襲おうとしている野盗たちの様子を探り、会話の内容を聞いた事で村を守るために男たちを排除する事を決めたベル・クラネルは胸より燃え滾る義憤に使命感、

覚悟を原動力にして縦横無尽に駆け跳ねながら、その勢いと速度を利用した軽業を交え、長槍による戦舞を披露する。
『ぐあああああっ!?』
ベルの凄烈な槍捌きによって瞬く間に男たちはその身を貫かれ、切り裂かれ、打ち砕かれて全滅したのだった。

「ふぅ……うっ!?」
ベルは血に塗れた槍を軽く振り回す事でその血を飛ばすと深呼吸しながら、野盗たちの死体を眺めていたが次の瞬間、強烈な不快感と吐き気によって堪らず、槍で支えているとはいえ、地に膝をつけ開いている右手で口元を抑える。
『ベルっ!!』
そうして、ベルの元へと野盗たちの悲鳴を聞いた事でこの場へと急いでアスフィにファルガー、輝夜にローリエ、遅れてヘルメスが駆け付け、状況を理解した事でアスフィに輝夜、ローリエがベルの元へと近づく。
「うおええ、げええ……」
「良い、耐えるな。そのまま楽になるまで嘔吐いていろ」

アスフィたちが近づいてくる間に耐えられず、ベルは嘔吐を始め、輝夜は耐えようとするベルに対し声をかけながら背を撫でていく。

「ベル、すみません。もっと私達が早ければ……」
「本当にすまない、ベル君……」
まだまだ幼いベルに人殺しを体験させてしまった事でアスフィとローリエはベルに対し、謝りながらも輝夜と同じくベルの背を撫でて少しでもベルが楽になるようにしていく。
「はぁはぁ……謝らないでアスフィ姉ちゃんにローリエ姉ちゃん……輝夜姉ちゃん、僕も輝夜姉ちゃんの【ファミリア】のように『悪』を倒して村の人たちを守ったよ」
「ああ……そうだな。良くやった、それでこそ私の自慢の男だ……」
「ええ、良くやりました」
「立派だ」

輝夜にアスフィ、ローリエはそれぞれベルの頭を撫でながら村を守ったベルを賞賛する。

「えへへ……ただ不思議だね、モンスターの命を奪う事はなんともないのに……人を殺すのは気持ち悪くなるなんて」
「それで良いんだ。ベル、その感覚を絶対に忘れるな……血の匂いや人を殺す事に慣れては駄目だ」
「うん……ねえ、ちょっと手伝ってくれない。せめてこの人たちの墓を作ってあげたいから」
ベルは輝夜からの真剣な言葉に頷くと相手は悪人とはいえ、自分が命を奪ったという事実を噛み締める彼なりの行動なのだろう。墓を作る手伝いを頼むと全員、土の中へと埋めて彼らの武具を墓標代わりにして墓を作り、そうして皆で祈ったのであった……。

二

野盗より自分の村を守ったベルはその数日後……。

「ベル君、君、他の村や街、国とかに興味持っていたよね？」

「だから、少しの間外の世界を見て回りませんか？」
「外の世界を見るというのも、悪くないぞ」
　アスフィにローリエから自分たちと他の村や街へと旅をしないかと持ち掛けられた。それは無論、野盗とはいえ命を奪った事に大なり小なりストレスを抱えているベルが少しでも楽になるようにするためである。
「……っ、でも……お祖父ちゃんが……」
　アルテミスの話で外の世界に興味を持っていたので一瞬、喜んだが祖父が一人になる事に気づき躊躇う。
「おいおい、儂の事は気にするなよベル。儂はお前の重荷になる気はないからのぅ。それにお前の大好きな二人の姉ちゃんと旅できるなら最高じゃないか。楽しんで来い」
「お前の村は俺がしっかり守るからな。安心して行って来い」
　ゼウスにファルガーがそれぞれ、ベルへと呼びかける。

「行こうぜ、ベル君。ちょっとした『冒険』に」
「行きましょう、ベル」
「行こう、ベル君」
「……うん」

ヘルメスにアスフィ、ローリエにも再度言われた事でベルは頷き、そうしてヘルメスにアスフィ、ローリエらと共に自分の村より外の世界へと出たのであった……

七話

　オラリオにて居を構えている【ヘルメス・ファミリア】は他の派閥や組織においては中立的な関係を貫いている。そして、自派閥としての活動においてはオラリオから他国へ、他国からオラリオへあるいは他国同士と大陸中の運び屋や情報屋、商会との提携や旅人の支援と様々な事業を行っていて、『なんでも屋』みたいな派閥になっている。
　多岐に事業を行っているので当然、諸方面からの契約書や手続きに関する書類が連日のように届いている。よって。忙しい派閥なのである。
　もっとも特に忙しく働いているのは団長のアスフィだが、今の彼女には実の弟以上に可愛く、愛しいベルという存在が居るのでそれだけでメンタル面は大丈夫であった。
　ともかく【ヘルメス・ファミリア】は派閥活動もあって旅の専門家と言え、ベルは最初の旅を皮切りに度々、ヘルメスにアスフィらと自分の村からオラリオ以外（オラリオには魂の色を見れる美神が居て、ベルの魂の色が女神好みだと取られかねないため）の他国や村に街へと度々、仕事のついでとばかりに連れて行ってもらっていた。
「ふわぁぁ……」

純粋で素直なベルは真新しい風景などに逐一、感動しその愛嬌振りにヘルメスたちは微笑ましい気分となり、癒されたりする。
また、一緒に旅をするのはヘルメスにアスフィ、ファルガー、ローリエばかりでは無く……。
「へぇ、お前がヘルメス様たちが可愛がっている子か……なんていうか兎人（ヒューマンバニー）より兎っぽいな」
【ヘルメス・ファミリア】ではその機動力の高さを活用して斥候や諜報などを行っていてダンジョンにおいては地図作成や採取物の獲得を行う盗賊をしたりする短い黒髪に小麦色の肌、犬の耳に尻尾、素肌目立つ身軽な服装をした犬人（シアンスロープ）の女性、ルルネ・ルーイはベルを見ると頭を撫でたり、顔を弄ったりしてじゃれながら印象を言う。
因みに白い長髪に女性寄りな容姿に中性的な服装もあって、ベルの事を女性だと思っており、ベルから男だと告げられた時には混乱していたりした。
「えへへ、良く言われます……あの、ルルネさん」
「ん？」
「僕もルルネさんの耳や尻尾に触っても良いですか？」
ベルはルルネの耳や尻尾を興味深そうに見ていた。

「……優しく触るなら良いぞ」
「ありがとうございます」
　そうしてファルガーの時もそうだが、ベルはルルネの耳と尻尾の毛並みや感触を楽しみつつ、優しく触った。
「……確かに可愛いな。うちで飼いたいくらいには」
「でしょう」
「ルルネもやっぱり、分かるか」
　そうして、ルルネもベルの事を気に入り始める。こんな具合に他にもエルフの男性であるセインやパルゥムの魔導士の女性であるメリルやヒューマンの女性であるネリーら、【ヘルメス・ファミリア】の団員たちと交流しつつ、旅をする。
　最初はベルの事を可愛い少年だと思うだけだが……。

「ふっ!!」
　旅の最中においてはアルテミス直伝の弓が使える事から射手を担当させられ、モンスターとの遭遇においてベルが見せる弓術における速射や連射、複数の矢を一度に番えての発射、風の軌道に乗せての曲射など必中は当然として凄まじい弓の技術に……。
『マジかよ……』

その才能の暴力ぶりに驚愕させられるのであった……。

二

【アストレア・ファミリア】の副団長である輝夜がベルに会って、2年にある。まだまだ『絶対悪』と大抗争を繰り広げた『暗黒期』の爪痕は大きく、残党も居たりして治安維持に忙しい彼女はアスフィのようにベルの存在に癒されていた。

そんな彼女はある日、ベルから……。

「輝夜さん、これ……お守りです。ダンジョンはとても危険なところだって聞くから……」

そう、冒険者用装身具（アクセサリー）を贈られた。

「貴女の事を想って一生懸命、作ったんですよ」

アスフィが補足する。少しでもお守りの効果が出来るようベルはアスフィに手伝って貰いながら魔道具染みた手法で作ったのである。無論、アスフィたちの分も別に作って渡しているが……。

「ふふ、それはそれは……ありがとうございます。一生の宝物にさせてもらいます」

「えへへ」
輝夜はベルからのお守りを身に着けると彼を優しく深く抱き締めながら頭を撫でてやり、ベルはそれをとても喜ぶ。
「ベル、貴方を置いていったりしませんからね」
「んひゃうっ……うん」
そして、優しく耳に息を吹きかけながら甘噛みという悪戯をしつつもそうしっかりと言い、ベルは悶えながら頷く。
自派閥の本拠へと戻れば、装身具を身に着けているので団長やエルフの同僚、それに派閥は別だが、都市の治安維持を担当していて協力し合っている団員から色々聞かれたりしたが、のらりくらりとかわしつつ絶対悪に追随していた様々な犯罪行為を行う『闇派閥（イヴィルス）』の宿敵との決戦へと自派閥、そして協力者と共に臨んだが……。
「あはは……きっとこれは天罰ね」
「……まぁ、こういう事もあるんでしょう」
「うーん、流石に同情しちゅうなぁ」
宿敵の『闇派閥』はギルドの職員と裏で繋がったりし、ダンジョン内に手罠まで張り巡らせて自分たちを待ち伏せ、自分たちはそこへと足を踏み入れるところであったのだが……。

なんとその前に何故かオラリオの最大派閥でありつつ、主神である女神の一番の存在となり寵愛を受けるために団員同士で本拠内で争い合っていたりするとある美神の派閥の団長とその幹部らがダンジョン内で激闘を繰り広げていて、これに『闇派閥』は巻き込まれ蹂躙されるとその過程で事前に仕掛けられた罠が原因でダンジョンの自衛機能としか思えない特殊なモンスターが現れたがこれも『少々、厄介だった』という程度で美神の団長と幹部は撃破してしまったのであった。

美神の団長には一応、礼をし、借りが出来たと告げると『……この程度、気にするな』と応じられた。

「(コレか……コレのお陰か)」

ベルのお守りの効果の凄まじさに驚愕しつつもそれだけ、自分の事を想って作ってくれたのだと理解し、寄ってベルへの愛おしさが強まり……。

「ベル、貴方様のお守りは大変、効果ありました。ありがとうございます」

「んむっ!?　ふむ、くむ、んちゅ、ぷぷっ、んん……」

ベルの元へと行くと自分の出身である極東の貴族の成り立ちや役目柄、『猛毒』を体に有しているため、輝夜は異性と深い繋がりを持つ事は出来ないがオラリオの超凄腕のと

ある治療師に相談しながら、自分の血を元に自分の体が持つ毒の抗体を作ってもらい、ベルに飲ませて深い口づけをした。
「ふぁぁ……こ、これ……なんかドキドキする」

「ふふ、気に入っていただけたようで良かったです」
「それなら、私もしてあげましょう」
「じゃ、じゃあ私も……」
「ふあ、んくあああああっ!!」
　そうして、ベルはアスフィとローリエからも深い口づけをされ、そのまま輝夜達3人に愛でられ、可愛がられた事で至福感を覚えながら悶えていったのであった……。

八話

オラリオに居を構えている派閥の一つであり、輝夜が副団長として所属する【ファミリア】が【アストレア・ファミリア】は主神であり、『正義』と『裁き』を司る女神であるアストレアのそれに準じて都市内における犯罪行為を取り締まっていた。

無論、主なのは『正義』なので困る者ならば市民であろうとも話を聞いて解決へと動いてもいる。

その団員構成は十一人であり、【アルテミス・ファミリア】と同じく全て女性である。

そして、そんな【アストレア・ファミリア】に話題が出来た。それは輝夜が最近、身に着け始めたネックレス型の『冒険者用装身具』の事であり、良く愛おしげに眺めながら触っているので『男』が出来たと団長たちは判断したのだ。

だからこそ、輝夜の『男』は誰かと気にし始める団長に団員達、このままでは後をついてきてでも探りかねないのでアスフィたちに許可を取りつつ、ついでとばかりにアストレアにも紹介するようにした。

又、アストレアにだけはベルが自分たちが激闘を繰り広げた『絶対悪』のとある者と

の関係性やベルの祖父の正体、アルテミスとはかなりの関係である事なども教えておいた。

「それにしても流石は輝夜ね、いつの間にオラリオからこんな外にまで足を運んでいたのよ」

輝夜にそう言うは赤い髪をポニーテールにした緑の瞳のヒューマンの女性で容姿も輝夜に負けず劣らず、美しくスタイルも整ったヒューマンの団長であるアリーゼ・ローヴェル。

「度々、休暇を取っているなとは思っていましたが……」

覆面を付けていても長い金髪にアリーゼたちより美しい容姿であり、エルフとしての尖った耳、外套纏ったその女性は輝夜と白兵戦にて互角の実力を持つ女戦士、リュー・リオンである。

「ともかく、楽しみね。その輝夜が世話しているっていうベルって子に会うのは……」

そう、言ったのは胡桃色の長髪に深い藍色の双眸、リューよりもさらに飛び抜けて美しくスタイルも魅力的な女神、アリーゼたちの主神であるアストレアであった。

そして、更に……

「ええ、私も楽しみです。ベル君に会うのは」

アリーゼたちとは派閥が違うが共に戦ってきた短くまとめられた薄青色の髪に可憐な容姿、スタイルも抜群な女性でオラリオの『憲兵』と呼ばれる【ガネーシャ・ファミリア】所属のアーディ・ヴァルマだ。

「まさか、お前まで来るとはな……」

「うん、だってベル君は……だから」

輝夜からの言葉にアーディは何事かを口にし……。

『……』

アリーゼたちは全員が神妙な顔になる。

ともかく、ベルの住む村へと輝夜が案内しながら、向かっていると……。

「輝夜お姉ちゃーん!!」

輝夜達の元へと駆け跳ねつつ、軽業にて勢いを加え更に距離を縮めつつ、彼女たちの前で停止するベル。

それはまるで帰宅するのを待っていて、帰宅したのでご機嫌な様子で出迎えに来た子兎のようであった。

「迎えに来たよ、輝夜お姉ちゃん」

「ええ、ありがとうございます。ベル、やはり貴方は良い子ですね」
「んふふ」
　輝夜へと笑顔を向けると輝夜は微笑み、彼の頭を撫でベルは心地良さげに目を細める。

「か……」
『か？』
　アリーゼがそれを見て、何やら打ち震えると……。
「可愛いいいいっ!!　もう大好きよぉぉ、っていうかこんなの好きになるしか無いじゃなーいっ!!」
「ふぶっ!?」
　ベルへと凄い勢いで抱き着き、そのまま自分の胸の中へと抱き寄せる。
「狡い、狡いわよ輝夜。こんな子が居るのを黙っているなんて……っていうか、この子、男なの？　いやもう性別がどうとかどうでも良いわ。もう私、惚れちゃったんだものぉぉぉっ!!」
「ああ、もう分かったからとりあえずベルを解放しろ。窒息しかかってるぞ」
「お、落ち着いてくださいアリーゼ」

「はいはい、どうどう」
輝夜にリュー、アーディはアリーゼを引き剥がしにかかり……。

「アリーゼ……」
アストレアはアリーゼの暴走振りに頭を抱えた。

「はぁはぁ……ひ、酷い目に遭った。ランテお姉ちゃんより酷いや……」
強く抱き締められ過ぎて窒息しかかっていたベルは愚痴る。
「う、うおっほん。私はアリーゼ・ローヴェル、貴方の事は輝夜から聞いているわ。私の事もよろしくしてね」
「さっきみたいな暴走しないなら、良いよ」
「う、も、勿論よ。さっきはつい暴走しちゃったの。反省しているわ」
「なら、良いよ」

『可愛い……』

アリーゼに対し浮かべた微笑みにリューにアーディ、アストレアに輝夜も見惚れ……。

「あ、駄目……無理ぃ」

「ちょ、アリーゼお姉ちゃん!?」

直接、ベルの愛嬌たっぷりな笑顔を直視したアリーゼは限界を超えた事で悶え、気を失って倒れてベルは驚愕する。

「……アリーゼがすみません……私はリュー・リオンです。よろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いします。リューお姉ちゃん」

「っ!?」

ベルはリューが自己紹介すると彼女の手を握りながら、微笑み言った。

そして、ベルに手を自然体で握られたので反応出来なかったが全く嫌悪感を覚えずに受け入れてしまった事に驚愕する。

「わぁ、リオンの手を握れるなんてベル君は凄いね。私はアリーゼたちとは違う【ファミリア】で【ガネーシャ・ファミリア】所属のアーディ・ヴァルマだよ。よろしくね」

「はい、よろしくお願いします……え、【ガネーシャ・ファミリア】って……」

ベルはアーディに笑顔を浮かべ、握手で応じながらも彼女の所属する【ファミリア】の名に驚く。それは彼が英雄を目指すきっかけとなった憧れの男である槍使いの男が所属している【ファミリア】であると言っていたからだ。

「やっぱり、――が言っていた子だったんだね。――から君の事は聞いていたよ」

「お兄さんが僕の事を……」

ベルは自分の事を槍使いの男が他の者に自慢していたとアーディが言うのを聞いて機嫌良く微笑んだ。

「(ごめんね、ベル君。まだ君には言えないよ)」

アーディは笑顔を浮かべるベルの姿を見ながら、実は彼の憧れの男は自分の代わりに『絶対悪』との抗争中、唆され邪神たちに手を貸した少女をアーディより先に助けようとしてその少女の自爆によって死んだ事を思い返しながら内心で謝った。

「私は輝夜にアリーゼ、リューの主神、アストレアよ。アルテミスとは天界では同郷で神交もあったわ。だから、よろしくね」

「勿論です」

「っ!?(これね、これにアルテミスは心を射止められたのね。確かにこれは最強だわ……)」

ベルの笑顔により、アストレアは心をときめかされ、鼓動させられながらアルテミス

とかなりの関係になった訳を理解したのであった……。

九話

迷宮都市オラリオにおいての組織力は【ヘルメス・ファミリア】や【アストレア・ファミリア】よりも大きく、最大派閥のひとつとなっている【ガネーシャ・ファミリア】はオラリオの全てを管轄し、中枢を担っている組織である『ギルド本部』と密接に繋がっている事もあってオラリオ全体の治安維持を担っており、『オラリオの憲兵』として【ガネーシャ・ファミリア】は知られていた。

そんな【ガネーシャ・ファミリア】に男は所属していた。もっとも派閥としての仕事をこなす態度は程々と言ったもので真面目では無かった。しかし、そんな彼はとある商隊の護衛という依頼をこなした後、急に真面目以上となって己を高める努力すらするようになった。

「お前、この前の依頼でなんかあったのかよ?」

人が変わったと言える程の変化に男の同僚であるハシャーナがそう、聞いた。

「こんな俺でも英雄と呼んでくれた奴がいるからな」

ハシャーナの質問に男はそう答え……。

「アーディ、お前と同じくらい英雄譚が好きで将来的には間違いなく英雄になれるベル・クラネルっていう兎みたいな少年に会ったぜ。このオラリオに来るっていう約束もしてるからよ。その時はお前もよろしくしてやってくれ」
　アーディに対してもそう声かけた。
「うん、分かったよ」
　アーディは男に対し、そう応じた。
　そうして男は約束を交わした少年であるベルに恥じない者であり続けようとして働き続けたが『絶対悪』との大抗争中、アーディより先に『闇派閥』の手先となっていた少女を助けようとして、自爆に巻きまれて亡くなってしまったのだった……。
　そう、だからこそ……。

「（私が――の分まで……）」
　アーディは男との約束も含めてベルを世話していく事を誓っている。
　そして、輝夜からの勧めもあってアーディはベルと手合わせをする事となり……。
「やあああっ!!」
「っ、はは、凄いよベル君っ!!」

地を駆け跳ね、空中にて舞うが如く身を捻っての回転という軽業を幾つも披露する事で空間中を己の庭が如く自由自在に動き回りながら、手に持つ長槍によるその動作一つ一つ、どれをとっても『絶技』の域にある槍舞をアーディに対し披露した。

アーディの冒険者としてのＬＶ．は４であり輝夜と同じ、更には『大抗争』を戦い抜いた一人で激戦を経験した者。よって、ベルの槍舞を片手剣の剣舞にて捌き、『技と駆け引き』の応酬を繰り広げるがだからこそ、アーディは驚く。

ベルが放つ槍の穂先は避けても防いでも変幻自在な軌道をもって、次から次へと追い縋ってくる上、かと思えば槍の柄や石突が自分を打ちのめそうと繰り出される。

壮絶にして華麗な槍捌きである。それに何より……。

「（うん、本当に凄い。――との約束を果たすためにとてもよく頑張ってきたんだね）」

ベルの槍捌き、『技と駆け引き』から感じ取れる才能の是非を問わないと言わんばかりの努力であり、彼が捧げた血と汗の結晶は武を納めているが故にアーディを見惚れさせ……。

『……』

アリーゼにリュー、アストレアをも見惚れさせた。

「ふっ、一段と又腕を上げたな」

既にベルの技量を知っている輝夜は満足げに言いつつ、やはり見惚れる。

「アーディさんもやっぱり、強いね。だから奥の手を使わせてもらうよ」
そうしてある程度の間合いを保ちつつ、ベルは深呼吸しながら構え……。
「しっ!!」
「いっ!?」
次の瞬間、空間すら捻じ曲げながら繰り出されたそれぞれ別方向からの三つの穂先であり、すべて同時に繰り出された三刺突をアーディは捌ききれず、片手剣を弾かされてしまった。
極めた技量は魔法と変わらないというが、ベルの繰り出したものはもう、魔法の一つと言っていいだろう。
「もう、驚きすぎて言葉に出来ないけど本当に凄いわ、ベル……容姿も実力も申し分ないしうちの【ファミリア】に入りなさい。いいえ、このまま断れないようにもう、うちの『本拠』に連れてっちゃう!!」
そして、アーディとベルの手合わせが終わった瞬間、アリーゼはベルへと駆け寄ると彼を抱え上げて捲し立てたかと思えば、そのまま大爆走を始めた。
「おい、団長(バカ)!!　それでは未成年略取誘拐だろうがぁぁっ!!」
「アリーゼ、今すぐに投降しなさいっ!!」
「正義の眷属が犯罪してどうすんのっ!?　ともかく、逮捕だよ」

呆気に取られたものの、すぐに輝夜にリュー、アーディが後を追い……。
「アリーゼぇぇ……」
アストレアは自分の眷属の大暴走に深いため息を吐き、頭を抱えた。

その後、アリーゼは輝夜とリュー、アーディと大激戦を繰り広げたものの当たり前の話であるがベルからも奇襲を受けて倒され、そのまま反省として逆さに吊るされる事となり……。
「アリーゼお姉ちゃん、怖いよぉ……」
ベルはアリーゼに対しガチで誘拐されかけたのも相まってかなりの恐怖心を抱き、泣きながら震え……。
「済まない、本当にうちの団長が済まない」
「私に出来る事はなんでもさせていただきます」
「ほんっとうにごめんね、ベル君」
「主神として心から謝らせてもらうわ、ベル君」
あまりにも気の毒過ぎるベルを輝夜にリュー、アーディにアストレアは全力以上に可愛がり、甘やかす事でベルを癒す。
その結果、輝夜は前からだが更に親密となり、リューも又、ベルと姉弟のように仲良

くなり、アーディはベルと同じく英雄譚が好きであるのも相まってやはり、親密に……アストレアもベルから母のように慕われる事となり、アストレアも又、ベルを受け入れる。

大体の者がベルに受け入れられたが、アリーゼにだけはベルは一歩どころか何歩か引いた対応をするようになってしまったのであった……。

十話

『迷宮都市オラリオ』において派閥の活動として治安維持や市民個人を犯罪から守ったりと『正義』と悪に対する『裁き』を執行している派閥である【アストレア・ファミリア】は女神アストレアを主神としている派閥であり、眷属は十一人で全て女性だ。

そして、輝夜に紹介されてアリーゼとリューにアストレアがベルと会ったのを皮切りに……。

『かっっ、可愛いいっ!!』

桃色に髪を染めた種族柄身長が一二〇?にも満たないという低身長でパルゥムの女性であるライラ、ベルやアリーゼ、輝夜と同じヒューマンで濃褐色の短髪の女性であるノイン、三つ編みを左右に垂らした魔導士のリャーナ、深青色の長髪でアストレアに負けないくらいの胸囲を有する治療師のマリュー、銀の短髪で褐色肌の狼人（ウェアウルフ）の女性であるネーゼ、黒髪を後ろに結った種族柄、褐色肌である女性でアマゾネスのイスカ、種族柄手足が短いドワーフの女性、アスタとリューと同じエルフであり短い緑色の髪の魔導士、セルティらがベルと接触し……そうして、ベルの兎のような愛嬌っぷりに全員が心

をときめかされる。

「話には聞いていたが、本当に兎人よりも兎っぽいな」

もっともライラはオラリオの最大派閥の団長であり、同族においての英雄と呼べる【勇者】という二つ名を有する男、そう、個人的にファルガーが槍術を学んでいる男と結ばれるという目標があるので惚れる事は無かったが……しかして、可愛いものは可愛いのでベルの頭を撫でながら可愛がり始める。

「うんうん、これはアリーゼが攫いたくなるのも分かるかなぁ。ああ、ごめんごめん。私は攫ったりしないから、安心して」

ノインは言いながら、アリーゼの件に関して言及する。当たり前だがベルに対し誘拐紛いの事をしたのは有名である。

「うちの団長がごめんなさいね、本当に」

「ちょ、もう許してよぉ……ベルにはちゃんと謝って許してもらったんだから、ね、ベル」

「うん、もう気にしてないよ」

ノインに続き、リャーナまで自分がやらかした事について言われ、アリーゼは唸った。

彼女とベルが言うように一応はアリーゼによる未成年略取誘拐の件は後日、必死にア

リーゼがベルに謝り、和解した事で解決している。
「それにしても、可愛らしいわねぇ」
「食べちゃいたいくらい、可愛い」
「ネーゼ、涎垂れてるわよっ!?」
「ちょ、すぐにネーゼを離してっ!!」
「これはベル君の可愛さが恐ろしいという事なんでしょうか……」

とにもかくにもベルの可愛さは日ごろから世界の中心とも呼ばれる大都市で他の国や都市と比べても広大なオラリオでのダンジョン探索に治安維持と激務に励んでいる彼女たちにとって大きな癒しとなった。
故に眷属になる事を勧められたのだが……。
「でも、アリーゼお姉ちゃんたちの派閥、アルテミス様のとこのように全員、女性だから駄目なんじゃ……」
『ベル君なら、良いよ』
ベルの質問にアストレアまでがベルなら問題ないと即座に言い出した。
「いや、でも目立つし……」

「女装すれば大丈夫だ」
「いや、全然大丈夫じゃないよっ!?　え、あ、や、止めて、いやぁぁぁぁぁぁっ!!!!!」
物は試しとは言わんばかりにベルは女装ショーを輝夜によってされたりなど弄られつつ、可愛がられた。
なんだかんだと言って【ヘルメス・ファミリア】に【アストレア・ファミリア】、【ガネーシャ・ファミリア】のアーディら等に可愛がられながら交流し、育っていくベル。

しかし……。

いつも僕の面倒を見てくれる皆さんへ
一年ほど自分一人だけで大陸を旅して、オラリオでは皆さんに頼り切るような生活をしないよう鍛えてきます。
オラリオで会いましょう。

書き置きだけ残して旅立った僕をどうか許してください。

十三才になったベルはその書き置きだけを残して祖父にすら何も言わずに長槍に長刀、必要な旅の必需品を持って旅立った。

「うーむ、まぁ流石は儂の孫と言いたいが……とにかく、絶対にヤバいから儂も旅に出るか」

ベルの祖父は書き置きを見てヤバい事態になると察して彼も又、逃亡するように村を出た。

そして、ベルの行動はアリーゼはすっごく悲しんで今すぐにでも追いかけようとしたのを阻止されつつ、他の者は大体、『ベル君も男だなぁ』という感じで受け入れられた。

特に関わりが深いアスフィにローリエ、輝夜はと言えば……。

「ええ、良いですよ。ベル……貴方の成長のためです、許しますよ……それどころかやり遂げたらたっぷりと褒めてあげます」

「ベル君、君は本当に立派だ。それに私も応えないとな」

「まぁ男というのは旅立つ者と聞いている。それを受け入れるのも妻の甲斐性というも

の……その代わり、帰ってきたらたっぷりと……」

何やら包容力を見せて受け入れる素振りも何かヤバい雰囲気を出しながら思案に暮れていたのだった……。

時系列　原作とＳＯ　一巻

十一話

　下界に存在する建造物の中でも天に届かんほどの長大であり、超高層である白亜の巨塔はその都市においての象徴だ。塔の名は『バベル』であり、この塔の地下には古代、モンスターが這い出てきた『穴』があり、その穴を通じてダンジョンへと入ることが出来る。

　そして、バベルこそは『穴』からモンスターが地上へと進出しないようにする『蓋』であり、この『バベル』を中心に大都市へと発展したのは『迷宮都市オラリオ』である。

　人や亜人においては夢や野望を叶えるためや果たすため、名声や富を得るために向かう場予であり、神においては眷属を得て、派閥競争をしている他の神よりも大きな派閥を造り上げるため……ともかく様々な目的を果たす上で一番の場所である。

　故に今日も又、オラリオへと入るための門の前には商人や旅人たちなどによる長蛇の列が出来ており……。

「おはようございまーす、オラリオへようこそ。私は【ガネーシャ・ファミリア】のアー

ディ・ヴァルマって言います」
　オラリオの門衛を務めるのは都市の運営を管轄している中枢組織である『ギルド』の職員にその『ギルド』と密接な繋がりのある【ガネーシャ・ファミリア】の団員である。
　よって、アーディは門へとやってきたローブに付いたフードで隠しており、大きなバックパックに腰に佩いていた長刀納めた鞘、槍の穂先に布を巻きつけたものを渡してきた者に声をかける。
「相変わらず、元気だねアーディさん……一年ぶりだね、勝手に旅に出てごめん」
　そうしてフードを取り、白い髪の長髪に深紅の瞳と兎を連想させる見た目のベルがアーディへと微笑んだ。
「っ、本当、驚いたし、心配したんだからねベル君っ!!」
「ちょ、う、うわっ!?」
　アーディはベルの姿を見た瞬間、ベルへと抱き着きにかかりベルは驚きながらもアーディを抱き止める。
「えへへ、良く受け止めました」
「んむっ!?　ふ、あ、うく、んちゅ」
　アーディはベルを抱き締めながら彼の口に深い口づけをし始めた。
　なお、アーディがベルへとキスをするのはこれが初めてではなく、十三才になって旅

に出るより前にも何度かやっていたりする。
　そして、当然ながらいきなりディープキスを交わし合う二人。それも美少女のアーディと同じく見た目だけなら中性的で美少年にも美少女にも見えるベルの絡みに周囲の者たちは驚愕と興奮の声を上げた。
「ふあぁ……ちょ、アーディさん……駄目だよ、皆が居るしアーディさんは仕事中なのに」
「えー、それ言っちゃって良いのかなベル君？　私達に黙って勝手に旅に行っちゃったのにさぁ、お陰で私たちはベル君分が不足しきって禁断症状を起こしてるんだよ」
「あうぅ……何を言ってるんですか」

　ベルはアーディに顔を弄られながら、彼女の意見に混乱する。
「ともかく、少し話をしようよ」
「はい」
　そうして、アーディはどうも前もって話をしていたようで代わりの者と仕事を交代し、詰所の休憩室へとベルを誘い、ベルも応じた。
「いやああ、流石は男の子だね。一年の間に凄く格好良くなってるよ。お姉ちゃん、お姉ちゃんって甘えてきた可愛い子だったベル君が……ふふふ」

「は、恥ずかしいよアーディさん」
「えー、良いじゃん。それにベル君の旅の話を聞いて私達はとても誇らしかったよ。良いね、【白兎の槍士（ラビット・ランサー）】って名は」
「うわぁぁぁ、絶対弄られると思ってましたよー、んもぉぉぉっ!!」
休憩室にて一年の旅の間、ベルは世直しの如く旅の間に寄った村や街、果ては国の人々の平穏をモンスターや盗賊等の魔の手から守った。
そうした活躍は段々と美談化されていき、冒険者でもないのにベルは【白兎の槍士（ラビット・ランサー）】という二つ名を手に入れたのである。
もっとも、ベルにとっては恥ずかし過ぎる二つ名であるのだが……。
「なぁに、恥ずかしいの？　でもベル君の活躍は劇にもなってるじゃん。格好良かったし、私達は大好きだよ」
「うぅ、お願いだから止めてよぉ（恨みますよ、アフロディーテ様ぁぁ）」
更にベルはアーディによって弄られる。
そう、彼女が言うようにベルの【白兎の槍士（ラビット・ランサー）】としての活躍は劇になっている。それの大本は歌劇の国のメイルストラでの劇であり、ベルはその国を訪れた際、国を治める【アフロディーテ・ファミリア】の主神で美しい金髪に緑の瞳、スレンダーながら美しく整った魅力的な美神のアフロディーテに気に入られた。

それはベルがアルテミスに対し、アフロディーテが教えたがっていた『愛』を教えられる期待の人物であるからである。

もっとも自らの『美』にまったく魅了されない彼に最初は不機嫌となったり、アルテミスとの事を聞いた時には宇宙の真理を知った猫のような表情で固まったりしたが、ともかくそうしてアフロディーテはベルに関する劇を作り、それもあって、ベルの旅での武勇伝は尾ひれや誇張が付きつつ、広まってしまったのだ。

「うんうん、やっぱりベル君は可愛いね。良かった、そういうところは消えてなくて」

「うちゅ、んちゅ、ふちゅ……ま、またぁぁ」

アーディは愛おし気にベルを見つめると再度、深い口づけをしてベルを蕩かせる。

「キスは何度でもしてあげるよ……それに私の順番はまだだけど、ちゃんと処女も上げるからね」

「んなっ!?、あ、ああ……」

蠱惑的な声でベルの耳へとアーディは甘く囁き、彼を悶えさせた。

「ふふふ、それじゃあそろそろオラリオに入って良いよ。アリーゼたちはあいにく、ダンジョンの遠征に向かっててていないけどアスフィさん達は待ってるから」

「はい、行ってきますね。アーディさん」
「うん、行ってらっしゃい。後、ベル君なら問題無いけど【ロキ・ファミリア】の試験頑張ってね」
そう、実はベルはもう既に入る【ファミリア】を決めている。それはオラリオの最大派閥である【ロキ・ファミリア】。
英雄となる下地としては十分な派閥であるからである。
それに【ロキ・ファミリア】では試験があり、合格さえすればどの種族だろうが、どんな見た目だろうが入団する事が出来る。
なにより、彼の好きな英雄譚でパルゥムという下界の中で一番の低身長ながら大活躍し神々が降臨するまで一族の女神という存在にまでなったフィアナ、そしてそんな彼女に続いた同じくパルゥムの戦士は英雄として評された。
その英雄譚は『フィアナ騎士団』という。
そして、自身がパルゥムであるが故にフィアナに代わる存在になり、一族にとっての希望となろうとしているのは【ロキ・ファミリア】の団長であるフィン・ディムナ。
フィンこそ個人的にファルガーに対して槍術を指導している者であり、ライラが伴侶になることを望んでいる（フィン曰く、尻に敷かれそうだからと断っているが）男である。

つまりは話が合いそうなのもあって、ベルは【ロキ・ファミリア】入団を選んだのだ。

「はい、頑張ります」

そうして、ベルはオラリオの中へと入り……。

「この時を待っていましたよ、ベル」

「今日は一日、私達に付き合ってもらおう、ベル君。この広いオラリオを案内してあげたいし」

どこかからアスフィはＬＶ．５、ローリエはＬＶ．４というベルへの愛情が切っ掛けで凄い実力を上げたその能力を活かして瞬時に現れ、アスフィは右側、ローリエは左側からベルの腕を取りつつ、がっちりと捕まえた。

「は、はい。なんでもアスフィさんとローリエさんに従います。勝手に旅に出てごめんなさい」

「謝れるのは偉いですよ、ベル。まあ、男は旅立つというのは聞いていますし、貴方の活躍も聞きましたから」

「まさか、二つ名を手に入れる程だなんてね……【白兎の槍士】。うん、とっても良いよ」
「う、うう……あ、あの……最初に寄りたい場所がどうしてもあるんですけど」
　ベルはそうしてアスフィにローリエと共に八方位のメインストリートであり、それぞれ特色があるオラリオの南東部の『第一墓地』、『冒険者墓地』があるオラリオの共同墓地へと向かい、その道中に買った花束をベルにとっての英雄である【ガネーシャ・ファミリア】所属の槍使いの男の墓標に置く。
　彼はもうすでに槍使いの男が死んでいるのを、間違いなく英雄として殉じた事をアーディから聞いていたのである。流石に聞いた時は一日中、アーディの胸の中で泣き続けてしまったが……。
「英雄のお兄さん……僕はお兄さんが誇ってくれる英雄になるから……あの時は本当に助けてくれてありがとう」
　そうして、再度ベルは自分の英雄へと誓いと感謝を告げた。

「ベル、すみませんが少し離れた場所にある墓にも献花してもらえませんか？」
「分かりました」
　ベルはアスフィから言われ、彼女に誘導され広葉樹が生い茂る雑木林へと進んでいると『三つの墓』がある場所に辿り着く。そして……。

「(あ、あれ……何で……)」
三つの墓のうちの一つに対し、ベルはなぜかとても懐かしい感覚がしてしまう。
「(やはり、感性が鋭いですね)」
ベルは姿も名も知らないが『絶対悪』として、世界を救う次代の英雄の踏み台となるべく立ちはだかり、果てた者でベルにとっては叔母である【静寂】という二つ名で呼ばれていて、その圧倒的才能から『才禍の怪物』とも呼ばれたアルフィアの墓に反応したのを見てアスフィはベルの勘の鋭さを評した。
ともかく、ベルはアスフィに言われた通り、アルフィアの墓に花を添えて瞑目した。
その後はアスフィにローリエと共にベルはオラリオを観光し……。

「んちゅ、くちゅ、むちゅ……どうですか、ベル?」
「ふむ、くちゅ、ふ……こういう事は初めてだからな、上手くできているかベル君?」
「う、うああ……駄目、だよ二人とも……こ、こんなの……うあぁぁ……」
【ヘルメス・ファミリア】の本拠で宿泊するようにベルは勧められてそれに応じると夜中、アスフィの部屋でアスフィとローリエの二人から性的な奉仕を受け、ベルはその快楽の虜となっていく。
その実、アスフィとローリエはベルを甘く貪っているのだが……。

「いいえ、駄目じゃないですよ。私たちが貴方とこうなることを望んでいるのですから……」
「それにもう二度と、何も言わずに旅立たないようにしないとな」
因みに先にアーディが言っていた順番ではアスフィとローリエが最初を勝ち取っていた。
「あ、んくあああ……ふあああああああっ!!」
こうして、ベルはアスフィとローリエの姉二人と深く繋がりながら、その快楽と多幸感の虜となっていき、蕩けに蕩けてしまったのだった……。

十二話

覚醒しようとする意識の中、心地の良い物に包まれていて、頭に顔、お腹や背中と体中を優しく触られているのを感じ、落ち着くしこのままずっと浸っていたくなる。

しかし、そういう訳にはいかない。

「ん、んん……」

浸ろうとする意識に活を入れて目を覚ましていくと……。

「あら、起きてしまいましたか……貴方の寝顔はいつ見ても癒されます」

「ああ、それだけで私達も元気が出て来る」

アスフィの部屋の寝台にてベルを挟んで横になっているアスフィとローリエがベルの頭を撫で、顔を弄りながら微笑んで挨拶をし、ベルへと声をかけた。

「それは良かったです……おはようございます、アスフィさん、ローリエさん……昨日はありがとうございました。とても気持ち良くて幸せでした」

ベルは昨夜、アスフィにローリエと男女の関係を結んでいてその事について礼を言った。
「それはなによりです……貴方も大変、可愛らしかったですよ。久しぶりに私達にお姉ちゃん、お姉ちゃんって甘えて縋って……」
「ああ、とても可愛らしかった。最近のベル君は大人ぶっていたからな」
「う、うう……」
二人が見せる姉としての顔と態度にベルはたじたじとなる。
「ベル、これからも私たちは貴方を愛しますし、甘やかして可愛がってあげます。でも……」
「次、黙って旅に出たりしたらその時は本当に許さないからな」
「あく、ふあ、んむぅ……っ、次は絶対にしません……あむぅ」
アスフィとローリエはベルの頬を軽くつねったり、とにかくもみくちゃに……弄りながら注意し、ベルも頷いたのだった。

そうして、朝食を済ませ準備をすると……。
「それじゃあ、頑張ってきます」
「ええ、しっかりやるのですよ」

「ベル君なら、合格間違い無しだ」

ベルはアスフィにローリエの二人に見送られながら目的であるオラリオにおいて頂点と呼んでも間違いでは無い最大派閥たる【ロキ・ファミリア】の入団試験を受けに行った。

【ロキ・ファミリア】の本拠である『黄昏の館』はオラリオの中心に建てられているバベルから北の方角であり、都市の北部。

そこに近い北のメインストリートの特徴としては服飾関係の商売が発展していたり、ギルドの関係者が住まう高級住宅街や受付嬢専用の集合住宅もある。

そんなオラリオの北部、北の目抜き通りから外れた街路沿いに周囲一帯の建物と比べ群を抜いて高い長大な館が建っていて、高層の塔が幾つも重なっている事で槍衾のように思え、赤胴色の外観はまるで燃え上がる炎のように見える。

塔の中で最も高い中央塔には派閥の象徴たる道化師（トリックスター）の旗が立っていて今は朝日の光に照らされていた。

そして其処へと入団試験を受けるために訪れ、正門の前に居る一人の男、門番へと声をかけたのだが……。

「はぁ？　お前のような兎みたいなのが俺たちの派閥に？　身の程を知れよガキ」

開口一番、ベルは拒絶された。

「いや、でも誰でも試験は受けれるって……」

ベルが言うのは確かな情報であり、【ロキ・ファミリア】はどんな種族であろうと入団試験を受ける資格だけはあると宣伝しているし、これは子供のころから確認している事だ。

しかし……。

「おいおい、そんなの真に受けてんのか。後、どれだけ自信過剰なんだよ。わざわざ、見栄え良くしようと武器まで持って、笑わせるぜ」

門番の男はベルを嘲笑い続ける。

「……そうですか、それはどうも……」

全く聞いてた話と違い、しかも子供の頃からアスフィらからも【ロキ・ファミリア】は素晴らしい派閥だと聞いてたのに……門番の人を見た目で判断し、見下してくる態度などで人それぞれだとは知っているが、それでも色々とショックが大きく、幻滅に近い印象を抱いた。

それにこのまま、話しても自分を取り合わない事、他の者に自分の事を言いもしない

事は明確だ。
口論も柄ではないし、荒事に発展するのも望んでいない。
よって……。
「そういう事なら、帰ります」
「おう、帰れ帰れ。冒険者なんか夢見ずに田舎に帰りな、兎さんよぉ」
「はぁ……」
入団試験を諦め、一度、気持ちを落ち着けようと当て所なくメインストリートを歩いていると……。

「あれ、ベル君。【ロキ・ファミリア】に試験受けに行ったんじゃなかったけ？」
オラリオの治安を守るべく憲兵として巡回していたアーディに遭遇する。
「その……試験すら受ける資格無いって門番の人に門前払いされちゃって……」
「……は？」
ベルは苦笑して言うが、長年ベルを可愛がっていた彼女だからこそベルが傷ついているのが分かり、彼女の表情は変化し……。
「ちょっと待っててね、お話してくるから」
「絶対、話で済まないですよね!?　僕は良いですから……」

ベルは今にも殴りに行きかねないアーディを必死で止めた。
「でも、こんなの許せないよ!!　ベル君、あんなに【ロキ・ファミリア】に入ろうとしてたのに……断言できるけど、絶対、門番の人の独断だよ」
「とにかく、もう良いですから……争いになるなんて嫌ですし」
「ベル君……じゃあ、もう私たちのところに来る？」
「そうですね。もう少しだけ、自分で派閥を探して入れなかったら、そうします」
そう、アーディと話していたベルであったが……。

「誰かぁ、ボクの眷属になっておくれーっ!!」
黒い長髪を二つで結び、童顔で愛嬌があり、一四〇？の小柄な体格だがそれに反してグラマーなスタイルである美少女の女神が首元から胸へと『眷属募集』と書いた紙を掛けていた。
「ヘスティア様……とうとう、なりふり構わずに……」
アーディはもはや神としてのプライドも捨て去っている行動をしたヘステイアに苦笑を浮かべ……。
「ヘスティア様……アーディさん、僕、派閥を決めました」
ベルは実はヘスティアの事を知っている。アルテミスがもし、ヘスティアと出会った

なら良くしてやってくれと言われた事があるからである。

「……うん、ベル君が入りたいなら私達は何も言わないし、応援するよ」

「ありがとう、アーディお姉ちゃん」

微笑むアーディにベルも微笑んで礼を言う。

「もう、こんな時だけなんて……旅の間に余計な事も覚えちゃったのかな？」

「えへへ」

ベルは頭を撫でられながら笑顔を浮かべ……そうして、ヘスティアの元へと向かい……。

「ヘスティア様……僕を貴方の眷属にしてください」

「っ、い、良いの？」

「勿論……じゃないと声なんてかけませんよ」

「うわーい、ありがとうううううっ!!　絶対に大事にしまくってあげるからねえええっ!!」

ヘスティアはベルに感激し、涙を流しながら抱き着き礼を言う。

そうして、ベルはヘスティアと共に彼女の住居である廃教会へと行き、それにヘス

ティアとは面識があるアーディもベルとの関係を言いながら、見守らせて欲しいと続く。

ヘスティアが住む廃教会は北西のメインストリートと西のメインストリートに挟まれた区画にあり、廃教会の中には生活するための地下室があった。

「……なんでか、僕、ここが好きなようです」

ベルは廃教会に入った瞬間、何故か懐かしくなり、しかも気に入ってしまう事に戸惑いながら告げる。

「そうかい、それは良かった」

「(やっぱり、血筋かな)」

ヘスティアはベルの言葉に喜び、アーディはアルフィアと出会った際、それがこの場所で彼女が言うには妹が好きな場所であったとの事……故に血の繋がりというものを実感した。

ともかく、ベル達はヘスティアの案内により、地下室に入り……。

「その……よ、よろしくお願いします」

ベルは椅子に座ると上半身の衣服を脱いで恥ずかし気に背中をヘスティアへと晒す。

その様はまるで……。

「っ、初心な生娘みたいな反応されても困るんだけど……なんか妙な気分になってくるし」

「ふふ、可愛いですよね」

ヘスティアの意見にアーディはそう言った。

「ともかく、いくよ」

ヘスティアは指に針を刺して『神血(イコル)』を流すとベルの背中へと血が流れる指を当てる。

「んぅ」

「ちょ、艶めかしい声を出さないでくれよ、もう」

「あう、だ、だって……」

ベルの声にいけない気分にすらなりながらも早く終わるようにヘスティアはベルの背中に『神の恩恵』を刻んだ。

そうして『神の恩恵』を刻んだ事で記されている【神聖文字(ヒエログリフ)】を羊皮紙に『共通語(コイネー)』へと書き換えた【ステイタス】を書く。

その詳細は……。

ベル・クラネル
ＬＶ．１
力：Ｉ０
耐久：Ｉ０
器用：Ｉ０
敏捷：Ｉ０
魔力：Ｉ０

≪魔法≫
【ムーン・サイト】
・視界強化魔法。
・月下条件達成時、効果超高域強化。
【】
【】
≪スキル≫
【英雄志願（アルゴノウト）】
・早熟する

・意思が続く限り効果持続。
・意思の丈により効果向上。
・窮地における全能力超高補正。
【才器超越（ギフ・スプリーム）】
・能力の常時限界解除。
・『力』、『耐久』、『器用』、『敏捷』、『魔力』の超高補正。
・アビリティにおける【ステイタス】自動更新。
【槍武求道（ランス・シーカー）】
・槍の装備時、発展アビリティ『槍士』の一時発現（補正効果はＬＶ．に依存）。
・槍の装備時、『力』、『耐久』、『器用』、『敏捷』の強化。
・槍における攻撃時、体力と精神力の消費に応じた威力増大＆範囲拡張。

こういうものであった。

『ぶっ!?』

ベルの衝撃的な【ステイタス】にヘスティアもアーディも言葉を失い、驚愕した。

とはいえ……。

「ベル君、アルテミス様の事結構、意識してるんだ」
「は、初めて会った女神様ですし……また会いたいとは思っていますよ」
　アーディはベルの魔法の名がアルテミス由来なので揶揄い、ベルは恥ずかしくなりながら答える。因みに一年の旅の間にアルテミスと再会出来るかと期待したが、それは叶わなかった。
　そして、ヘスティアにとっても神友であるアルテミスの名が出た事で主神という事で詳しくベルとの関係を聞いたが……。
「え……あ、あの……大恋愛アンチのアルテミスが……」
　自分も処女神だがそんな自分より恋愛に対してアンチと呼べるほどに嫌悪しているアルテミスがベルに対し、あれな事を聞き、アフロディーテのように宇宙の真理を知った猫のような表情と態度となる。
　ともかく、ベルはヘスティアの眷属となった事で【ヘスティア・ファミリア】は創設された。今日はこのまま交流したいと聞いたのでアーディは去り……まずは本拠の整備からだと地下室もだが、地下室より外で大聖堂の中の大掃除を始める。
「うん？」
　そして、祭壇の掃除をしていると妙な感触、中に何か隠されているかのような音がし

たのでヘスティアの許可を取って壊すと……。

「これ、魔導書(グリモア)じゃないかぁぁぁぁっ!?」

中から奇妙な色や幾何学模様が刻まれた特殊な本であり、読めば魔法を発現させる凄まじい魔道具とも呼べるアイテムが出てきたのでヘスティアは驚く。

その後、大掃除を済ませてベルはオラリオでの生活用にそれなりに貯めていた旅費と生活費を使って食材を買い、アスフィたちとの生活で覚えた料理を振る舞い、ヘスティアから絶賛されたりしたがそうして……。

「それじゃあ、読みますね」

「うん、どうぞ」

ヘスティアから自分が住んでいる時に出てきたのだから、自分たちの物だという事でベルに魔導書を読んで言いと許可をし、ベルは魔導書を開いたのであった……。

十三話

今より七年前、オラリオの全【ファミリア】と『闇派閥』からなる『絶対悪』との大抗争が起こる少し前。

オラリオの都市北西の第七区画、人々の記憶からも忘れ去られてもいるだろう……そんなうらぶれた廃教会が存在した。しかし、その廃教会にて灰色の長い髪であり、目が覚めるような美貌、漆黒のドレスの衣装を纏っているとこの教会の雰囲気とはかけ離れ過ぎている女性が居た。

「（全くもって……らしくない真似だ）」

自嘲している彼女の手には『魔導書』がある。彼女がかつて所属していた【ファミリア】の団員に頼んで自分の血を素材に造らせたものだ。

彼女には妹が居て、子供も生まれていた。その子供に自分が贈れるものは何かと考えて用意した。とはいえ、【ファミリア】が壊滅し、妹とも離れる事になって渡せぬままだったが……。

そして、渡さないままだった『魔導書』を今、彼女の妹が愛した場所で此処に置こう

としていた。
「（我ながら、捻くれているな……）」
運命といったものを彼女は信じてはいない。しかし、この下界は全知全能の神ですら見知らぬ『未知』という奇跡であふれている。
万が一、あるいはもしかすればという事も無いとは言えない。
「（賭けというのは好きでは無いが……ま、一度くらいはな）」
『絶対悪』として英雄の踏み台となる最後の心残り、人間性を捨てるための行動としては悪くない。
そうして、彼女――【静寂】の二つ名を有する魔導士であり、絶対悪に脅威をもたらした一人であるアルフィア。
ベルの母、メーテリアの姉はメーテリアが愛した教会の祭壇に『魔導書』を隠した。
「（お前の事も愛しているぞ、ベル）」
姿を見れば、覚悟が揺らぐかもしれないと結局、会う事をしなかった妹の忘れ形見へとこの魔導書が渡る事を願いながら、アルフィアはこの場を去り、そうして『絶対悪』、次代の英雄の踏み台と化したのであった……。

そうして、時は過ぎ……。

廃教会の祭壇に隠されていた『魔導書』を読んだベルは頭の中で鐘の音が響くのを聞いたかと思えば……。

「え、こ、ここは……僕は『魔導書』を読んでた筈……」

何もない空間にベルは居た。自分の行動を思い出しながら、周囲を探すもヘスティアもおらず、自分一人だけだ。

しかし……。

「また、鐘の音……」

魔導書を読んだ時にも聴こえた鐘の音が響いていて、その方向を頼りに歩くことにする。自分を呼んでいると感じたからだ。

そうして、進んでいれば……。

「なるほど、こうなったか……下界の『未知』というのも存外、悪くない」

目の前に灰色の長い髪、色彩の違う両目だが目が覚めるような美貌、漆黒のドレスを着た女性はベルに対し、穏やかな笑みを浮かべた。

「こんなにもあの子そっくりだとはな……父親譲りの赤い瞳だけはくりぬきたくなるが」
「ひいいっ!?」
　穏やかな笑みを浮かべたかと思えば急に不穏な雰囲気と共に物騒な事を言いだした女性にベルは恐怖し、震えた。
　しかし、それでも目の前にいる女性からは……。
「(なんで、こんなに……もしかして……)お母さん?」
　とてつもない懐かしさを感じてベルは思わず、そう呟いた。神すら予期できないし、干渉できない『未知』の奇跡により、自分は物心つく前に亡くなった母親に会えているのではないかと思ったからだ。
「いや、違う……私はお前の母親、メーテリアの姉だ。名はアルフィアという……すまないが、こっちに近づいてきてくれないか?」
「……はい」
　ベルはアルフィアの求めに応じ、彼女の元へと近づいた。
「ふふ、こうしてみればまるで兎だな。実に愛らしい」
「ん……ふ……」
　アルフィアはベルの髪を、肌を、顔を優しく触り、撫でて、弄っていく。生前、して

やれなかったことをしてやるように……。
　ベルは暖かく、優しく、甘い感覚に浸る事でアルフィアから伝わってくる愛情を受け取った。

「もう、終わりか……ベル、私も、そしてメーテリアもお前の事をいつまでも見守っているからな。愛している」
「はい、ありがとうございます。アルフィアさん」
　アルフィアはベルを抱き締めると優しく囁きながら、最後に彼の額に口づけしたのだった……。
　そうして、ベルは意識を取り戻すと目を覚ますとまるで竈の火に温められているような心地良い感覚と頭や頬などを愛撫される快楽を与えられていた。
「う、んぁ……へ、ヘスティア様……」
　魔導書を読んで意識を失ったベルに膝枕をしながら甘やかしていたのである。ヘスティアは歎願者や迷い子を受け入れ、居場所を与え、心に温かさを与える『竈』の女神である。
「おや、起きちゃったか。それにしても、良いね、ベル君は……とても甘やかし甲斐があ

るよ。アルテミスもだけど、アストレアやアフロディーテが可愛がっていたのも良く分かる」

自分の甘やかしを素直に受け入れ、無意識にねだってくるベルへとヘスティアは微笑む。ベルとの掃除や夕食中の交流にてアストレアにアフロディーテとの事も彼女は聞いた。

アストレアに関してはヘスティアに世間話として名前は挙げなかったが、ベルの事を言っていたようだが……。

「も、もう良いですから……あぅぅ」

「ふふ、良いんだよ。遠慮しなくてもね」

ヘスティアはベルの要求に更に微笑むともっと甘やかしていった。

そうして、『魔導書』の成果を確かめるために【ステイタス】更新をすると……。

≪魔法≫

【クリロノミア・チャイム】

・付与魔法（エンチャント）。

・音属性。

・接触した『魔力』の無効化。
このような魔法がベルの二つ目の魔法として発現したのであった……。

2

ヘスティアの眷属となり、【ヘスティア・ファミリア】を創設した翌日。
身支度を整え、朝食を作りヘスティアと食べたベルは……。
「ふっ、しっ、はぁっ!!」
廃教会の聖堂内を駆け跳ね、軽業にて宙を自在に舞い踊る。
まるで聖堂内の空間全てが自分の領域だと言わんばかりに動き回りながら槍による凄烈にして華麗なる戦舞を舞う。
突きに薙ぎ払い、振り回し、手元での回転、下へと振り下ろした槍を次の瞬間には柄を蹴り上げた勢いを利用した強烈なる切り上げ、背中へと回した槍の石突きを掌で押した勢いを利用した突き、肩に担ぎながら体と共に回転斬り、柄の持ち手を調節しての間合い調整等々……正道の術理、正道から外れた術理による一つ一つが『絶技』の領域によるそれを披露し続ける。
「(やっぱり、恩恵があると違うんだ。全然、良い)」

自らの『神の恩恵』による【ステイタス】を試し『躍動感』を感じながら、日課である朝の鍛錬をベルは行っているのだ。

「(この魔法も便利だ)」

武技もそうだが、ベルは一つ目の魔法である【ムーン・サイト】という視界強化魔法を使用していて彼の瞳は月光の輝きを放っていた。

あくまで見るだけの魔法であるが故か無詠唱で発動し、それからは精神力の消費によって維持されるそれはベルに凄まじい遠視能力、対象を見通せば見通すほど、生物の全てを洞察できる能力、左右から背後と周囲を見通せる能力と凄まじい『眼力』を与えた。

まるで闇夜の上空で浮かび、空の下全てを見通す『月』の視界を手にしたようにベルは感じた。

そうして、朝の鍛錬を終えると……。

「わぁ、ベル君……凄すぎるよぉ、【白兎の槍士】として冒険者でもないのに2つ名を与えられただけはあるね」

「お願いですから、その二つ名で呼ばないでくださいよぉぉぉ」

ヘスティアに旅の間に呼ばれるようになった二つ名で呼ばれ、羞恥に悶えながらベルは頭を抱えた。

「ええ、良いじゃないか。実にシンプルで良いと思うぜ、ボクは」
「でもラビットって兎って意味でしょう？　兎は可愛いもので格好良いものじゃないじゃないですかぁ」
　ベルはヘスティアに猛抗議する。

「ベル君の槍捌きは格好良いけど、普段は可愛いからね。ギャップもあって良いじゃないか」
　そんなヘスティアの意見に……。
「うん、私もそう思うよ」
「同じく。ベルを表現していてとても良いです」
「ああ、俺も相応しいと思う」
　アーディにアスフィ、ファルガーが【ヘスティア・ファミリア】の本拠である『廃教会』へとやってきた。
　更に……。
「本当、良い二つ名よね」
　アストレアまでもが『(下界というものは不思議ね)』とベルとアルフィアの繋がりなどを踏まえて内心、思いながら廃教会へとやってきた。

「アストレア様まで……その、書き置きだけ残して旅に出てすみませんでした」
ベルはアストレアへしっかりと深く頭を下げて謝った。
「ふふ、ベル君のその誠実さは変わらなくてよかったわ。ええ、貴方の謝罪を受け入れます」

アストレアはベルへと頷きつつ、頭を撫でる。
『このモフモフ感も変わらなくてよかったわ』と言いながら、久しぶりの感触を堪能する。
「確かに何か匂わせるとか相談とかはしてほしかったけど……そうしたら、アリーゼは特に反対しただろうし、私はベル君にもやんちゃさがあったんだなって安心したの。まあ、アリーゼたちは流石に何かすると思うから覚悟しておいて……痛い事はしないと思うけど」
「はい、それは勿論」
ベルは頷きつつ、アーディ達が訪れた訳を問う。もっともベルが昨日、【ヘスティア・ファミリア】の団員となった事をアーディがベルに対する保護者一同の連絡網を用いて知り、祝いに来ただけなのだが……。

アスフィからは団長としてやるべきことを記したものを贈られ、ファルガーからは戦闘衣にバックパック、回復薬用のレッグホルスターと冒険者としてダンジョン探索に必要な装備品を贈られたのである。

そして、アストレアからは……。

「まだ順番は先だけど、十四才になったプレゼントのちょっとした前払いよ。ちゅ」

「あうっ……あ、ありがとうございます」

口づけされ、ベルは顔を赤く染めた。

因みにベルが【ロキ・ファミリア】を門前払いされた事に対しては……。

「待っててくださいね、ベル……貴方を追い出した門番にはちゃんとした報いを与えてあげますから」

「俺もお礼してきてやるからな」

「ちゃんと裁いて来るからね」

「あの……皆さん、目とか雰囲気が怖いんですけどっ!?」

当然ながら怒り心頭であった。ベルは知らないことだがベルが【ロキ・ファミリア】に入る事自体は保護者一同には伝わっており、先んじて密かにファルガーはフィンへ、アストレアはロキへベルが入団試験を受けれるようにそれとなく話をし、フィンもロキも

それぞれの相手へ頷いていた。
なのでフィンやロキの意思を無視した事が確実でベルに入団試験を受けさせず、追い出した門番には怒りしかない。アリーゼたちが帰って来た時に改めて報復手段を考えようとアーディ達は決めていた。
「ふふ、皆から愛されてるんだねベル君は……ボクもこれから、いっぱい愛してあげるから期待しててくれよ」
「ありがとうございます、ヘスティア様」
そうして、ベルは【ロキ・ファミリア】の時のようにならないよう、『冒険者登録』を見届けるというアーディが付き添う中、『行ってらっしゃい』とアスフィたちから見送られ、ベルは『行ってきます』と笑顔で言い、廃教会を出たのだった……。

三

本拠である廃教会を出たベルはギルド本部で『冒険者登録』をする前にヘスティアから『回復薬を買うなら行ってあげてほしいところがある』とオラリオの西のメインストリート、一般市民が多く住まうのが特徴的である其処の路地裏深くで商売をしているヘ

スティアの神友である神の派閥、【ミアハ・ファミリア】の本拠へと向かった。
「おお、とうとうヘスティアに眷属が出来たか……良かった」
群青色の髪に貴公子のような美貌に雰囲気、灰色のローブを着た男神であるミアハはヘスティアに眷属が出来た事を心底喜んだ。
「ベル・クラネル……じゃあ、貴方が【紅の正花（スカーレット・ハーネル）】の言ってた……」
ミアハ唯一の眷属で犬人（シアンスロープ）の女性、ハーフアップの髪に眠たげだが十分に容姿が整っており、左腕が半袖、右腕は長袖であり、手にも手袋をしているのが特徴的なナァーザ・エリスイスがベルの名を聞いてちょっと驚いた顔をした。
「え、【紅の正花】ってアリーゼさんの……まさか、あの人……オラリオ中で『ベルー、愛してるー!!』とか『私にも春がきたわぁぁっ!!』とかそんな事言い回ったんじゃ」
アリーゼの二つ名を聞き、ナァーザの反応を見てベルは推理し……。
『おお、大正解』
ダンジョンでもアリーゼはベルへの愛を燃やしていたと補足しながら、アーディにナァーザは拍手をした。
因みにアリーゼはベルへの愛でその丈により、成長補正や能力上昇させる【スキル】を発現させており、現在、ＬＶ．６になっているしその点で言うならベルの師匠として相応しくありたいとファルガーもＬＶ．６であったりする。

「何してんですか、あの人はぁぁぁぁぁぁっ!!」
アリーゼが自分を愛してくれるのは嬉しいのだが、それでも自分の名が知られたら、注目やら変な反応される事確実なので呻いてしまった。

ともかく、ベルは回復薬に高等回復薬、精神力回復薬と回復アイテムを買い、「ベル、これからも回復薬を買って私達を助けてね」と零細ファミリアであるのも相まって、高額な商品まで買ったベルに感謝しながら、ベルの頭を撫でる。
「え、ええ、ヘスティア様も世話になったようですから……勿論」
「うん、良い子良い子……可愛いね」
心地良さに浸っているベルの反応に喜びながら、ナァーザは更に撫でる。
「でしょ、良かったら、ベル君をこれからも可愛がってあげてね」
「ふ、ん、あんん……」
アーディも加わって甘やかし始め、ベルは蕩けていった。

そうして、目的地であるオラリオの北西、冒険者用の武器屋に道具屋、酒場といろんな店と冒険者向けの設備があるのが特徴的で『冒険者通り』と呼ばれたその区画にある

白い柱で作られた神殿、『ギルド本部』へと行き……。
「くす」
「うわあああ、絶対あの人、僕の事を姉に同伴された弟みたいとか思ってますよおおおお」
　セミロングのブラウンの髪、エメラルドの瞳に眼鏡をかけた容姿整っているハーフエルフの美女であり、ギルドの受付嬢のためにパンツスーツの制服姿であるエイナ・チュールに愛おし気に微笑まれ、ベルは察して隣で寄り添っているアーディへと恥ずかしさのままに叫んだ。
「まぁまぁ、良いじゃん。似たようなものだし」
「それはそうですけど……うぅ」
「気にしない気にしない。大丈夫だよ」
　恥ずかしさに呻くベルの頭を撫でて宥めるとエイナへアーディに補足されつつ、冒険者登録を済ませた。
「ベル君は凄い子なんだね。こんなに可愛いのに」
「あ、あふ、んん」
　そうして、アーディの勧めでエイナがベルの頭を撫でて可愛がった事でベルは心地良さげとなったりしたが、アーディとエイナに見送られてダンジョンのある中央広場へと

ベルは向かったのであった……。

十四話

下界に住む人に亜人、神々の殆どが集う事から『世界の中心』と呼ばれているオラリオが『迷宮都市』と呼ばれている由縁。

それは中央部に聳え立つ長大にして超高層である白亜の巨塔、『バベル』によってモンスターが壁より生まれ続け、下へと降りれば降りる程、複雑となり広大となり、環境が厳しくなっていく『ダンジョン』の入り口たる穴に蓋をし、実質、ダンジョンを保有しているからだ。

しかして、モンスターを倒せば魔石や武器や防具、薬品や道具の原料となる『ドロップアイテム』が収穫できるし、鉱石や植物と外界では手に入らない『未知』の物体がダンジョンに入れば手に入れられる。

モンスターを倒す事で『器』を成長させられる糧にも出来るのもあって、厳しい環境のダンジョンにて生き続けられれば力や富を手に入れられるのでそうしたチャンス求めて神の眷属である冒険者はダンジョンへと赴くのだ。

そうして、今日も早朝からダンジョンへと多くの冒険者が挑むため、バベルへと向か

う中……。

「ふん、ふんふーん♪」

いよいよ、冒険者としてダンジョンに挑戦するとあって、興奮しているベルは無意識に鼻歌を歌い、今にも飛び跳ねるかと思う程にご機嫌な様子でバベルへと向かっていた。

はた目から見れば兎が可愛らしく飛び跳ねて移動しているようでもある。

『(かっ可愛いいいいっ)!!』

女性寄りな見た目で戦闘衣も中性的である、そんなベルが見せる仕草に男も女も癒しを受け、微笑ましく見ていた。

「(うん、視線?)」

ベルは突如、バベルの頂上辺りから自分の全てを見透かそうとする無遠慮な銀の視線でありながら、暖かく自分を見守るような視線を感じた。

【ムーン・サイト】

だからベルは魔法を使い、視力を強化するとバベルの頂上の部屋から自分を見つめている銀の長髪であり、銀の瞳、とにかく美しく、そして成熟し魅力的な容姿を持つ女神の姿を視た。

「確か、アフロディーテ様が言ってたな……フレイヤ様だっけ?」

その女神の姿から旅の最中に立ち寄ったメイルストラで世話になったアフロディーテの言葉を思い出して名前を告げる。

思い出す最中も口元に手を置き、小首を傾げたりするのでやっぱり可愛らしく周囲、勿論、フレイヤも更に癒されるし、微笑ましく見るその熱が強まった。

因みにベルは最初こそアフロディーテに手を出されようとはしていたが、アルテミスとアストレアと関係しているのを知ると、『なんて奴らと関わってんのよ!?』と態度を急変して止めた。

「ベル、私が貴方に女の扱い方ってものを教えてあげるわ」

そうして、アルテミスのベルへの態度を聞くと、自分が愛の素晴らしさを教えたいのもあって、ベルに対し世話したし、可愛がったりしたのだ。

その世話には口説き方や振る舞いも含まれている。とはいえ、少なくともアスフィたちにはそれをする前に手玉に取られ、蕩かされてしまっているが……。

一応、機会があればそれをしようとは思っている。

「良し、やってみよう……ありがとうございます☆」

ベルは実践の練習がてらフレイヤと自分を微笑ましく見てくれている皆に対し、チョキにしたそれを目元近くに置き、首を傾けながら可愛らしい笑みを意識しつつ、行うというアフロディーテ直伝のキューティポーズとスマイルをした。

『っ、ぐはあああああっ!?』

ベルの愛らし過ぎるその仕草に周囲の冒険者たちは悶絶しながら、倒れ……ベルが対象としているバベルから見下ろしているフレイヤはと言えば……。

「かふっ!?」

ベルの愛嬌、自分を明らかに見ているその視線も合って嬉しいやら可愛すぎるやらで処理能力を超えた結果、胸を抑えて倒れてしまった。

「フレイヤ様……何が……うっ!?」

そして長い灰の髪によって右半分の目を隠しながら、露になっている闇で塗りつぶしたような黒一色の左眼もそうだが、全体的に見れば目が覚める程、容姿は酷く整っていて黒を基調にしたドレス然とした服装を纏い、魔女の弟子のような女性でフレイヤの付き人として有名な女性はフレイヤが倒れた原因を見ようとベルを見下ろした瞬間、やはりその凄まじすぎる愛らしさに倒れてしまった。

「こ、此処は天国(ヴァルハラ)なの……」

「じょ、浄化されるう……」

フレイヤにフレイヤの侍女頭であるヘルンという女性はそんな事を呟いた。

バベルの頂上も周囲も惨憺たる有様の中……。

「え、ちょ、み、皆さん!?」

ベルは只々、周囲の者たちが倒れた事に驚愕し慌てた。

そんなベルの頭の中ではアフロディーテが微笑みながら、『良くやったわ、上出来よ』と良い笑顔であり、誇らししながら親指を立てているのを幻視したのだった……。

二

周囲の者たちが倒れたのでベルは一通りの介抱を済ませていざ、バベルの地下一階へと行き、ダンジョンに挑もうとすると……。

「お姉さん、お姉さん、兎のようなお姉さん」

足元から自分を呼ぶ声が聞こえ、ベルがそちらを見れば超大きなバックパックを背負

い、ローブを着た栗色の髪のパルゥムの女性が居た。

「どうも初めまして、僕はベル・クラネル。見た目や恰好から良く誤解されますが僕は男ですよ」

「え、嘘ぉ!? お、おっほん……それは失礼をしました。リリはリリルカ・アーデと言います」

ベルの自己紹介に驚きつつ、リリルカも自己紹介を返す。

「それで要件は何でしょうか、リリルカさん?」

「リリで結構ですし敬語も不要ですよ……フリーのサポーターとしてリリは長いのですが見た所、ベル様はソロですよね?」

リリルカの言うサポーターとは冒険者の傍に付き、魔石やドロップアイテムの回収や戦闘での支援を行う文字通り、冒険者の支援職である。

「はい、そうですよ。お恥ずかしながら、【ファミリア】が出来たばかりで冒険者になったのも今さっきなんです」

「ふふ、そうだと思いました。そこでどうです? リリをサポーターとして雇っていただけませんか。先輩としてアドバイスもしますので」

「はい、よろしくお願いしますリリ」
　ベルはリリルカからの要求に即答し、手を差し出す。
「っ、は、はい、よろしくお願いしますベル様。（想像以上の獲物ですねぇ）」
　ベルの愛らしい笑みにやられながらも内心、ベルはとても騙しやすく、自分の稼ぎに利用出来ると思いながら二人のパーティでダンジョンへと入り……。

「しっ!!」
　そうしてベルは縦横無尽にダンジョン内を駆け跳ねながら、軽業で自由自在に舞い踊る事でモンスターを翻弄し尽くしながら、槍の戦舞を繰り出す事で貫き、切り裂き、打ち砕いていく。
「（やっぱり、全然、違う）」
　ベルは冒険者としてダンジョン探索をしながら、【ムーン・サイト】による効果を実感する。
　索敵においては当然ながら優れており、戦闘においても視界範囲内の相手の全てを洞察できる故に機先を楽々、制する事も出来る上、相手の弱点という綻びや致命的な瞬間であり、隙を狙い撃つことも出来る。

狩人として活動するための必要な能力を発揮出来ていた。

そして、やはり槍を所有する事で発揮される【槍武求道】の効果も凄まじい事を実感する。

なにせ槍を持ってさえいれば、【才器超越】による超高補正も合わさってはいるだろうが、空けた片手にて長刀を扱うなんていう芸当まで可能にするのだから……。

そして槍に体力と精神力を込めればそれに応じて槍の穂先から更に真空の穂先が伸び、リーチを伸ばすと共に威力を強化する。

槍を手で投擲するのは勿論、ベルが得意とする足での投擲（旅の最中、とある神から『ゲイ・ボルク』の名を与えられた）の際は石突きから閃光が噴射され、威力と飛距離を上昇する。

そして、モンスターを倒す毎に【才器超越】によるアビリティの自動更新によって、力が湧き上がり、全能感もする。

「（僕はまだまだ強くなる）」

自らが強くなるのを実感しながら、英雄になるために果てなく強さを求めて意思を燃やしてベルは戦い続けた。

「は？」

そんなベルとは対照的に大混乱し、思考停止しているのはリリルカである。兎そのもので態度も超柔らかいベルが戦闘時になると正しく、古代の英雄のような勇姿やら戦いぶりを見せたのだ。

混乱も思考停止も当たり前である。一応、戦闘が終わる度にベルと共に魔石回収とドロップアイテムの回収が出来ているのはサポーターとして長年の経験の賜物だろう。

因みに二人の行動方針としてはダンジョンの階層内における正規ルートだけでなく、正しく足を踏み入れた階層内全てへと移動してから次の階層へと行っている。

稼ぎとしては既に1階層内で出会ったレアモンスターである黄緑色の羽毛を生やした鶏のような『ジャック・バード』を倒した事でその魔石と最低、一〇〇万ヴァリスの価値がある『ジャック・バードの金卵』を収穫しているので十分過ぎる程の成果はあった。

「……良し、そろそろ休憩しようか」

槍を片手に持って回転させる事で返り血を飛ばしたベルはリリルカに微笑みつつ、言

うと……。

「何が初心者ですか、騙しましたねぇぇぇぇぇぇっ!?　あれですか、兎だからって詐欺が得意なんですか、はははは、面白いですね、いや、全然面白くないですよ。むきぃぃぃぃっ!!」

「え、え、な、何?」

急に捲し立てながら詰め寄ってくるリリルカに戸惑うベルであった……。

十五話

オラリオに本拠を有している【ファミリア】の団員たちの多くがそうしているように冒険者となったベルはオラリオの中心に『蓋』として建てられている白亜の巨塔、『バベル』の地下一階、モンスターの魔窟である『ダンジョン』へと向かった。

だが、当初予定していたソロではなく【ソーマ・ファミリア】という派閥の団員であるが、能力の低さや才能の無さから自派閥のパーティに入れてもらえず、他の派閥の冒険者に付くサポーターとして、つまりはフリーのサポーターとして行動しているというリリルカ・アーデとの二人のパーティでダンジョン探索を始める。

進んでいる階層は通常の新人冒険者では到底、潜り抜ける事の出来ない6階層を越えた。

その階層に出て来るダンジョンの1階層から12階層までの『上層域』において新米冒険者が一人では勝てない強敵、人影がそのまま怪物となった『ウォーシャドウ』も楽々、ベルは一人で片づけたのである。

そうして、7階層へと進めば……。

『う、うわあああああっ!?』

どこからか悲鳴が聞こえたので直ぐに【ムーン・サイト】によって視力、視界を強化して遠くや周囲の様子を探り……

「不味いっ!! リリ、すぐに戻るから此処に居てよ」

「え、べ、ベル様っ!?」

大量の巨大蟻のモンスター、『キラーアント』の群れが冒険者のパーティを蹂躙しようとするのを見て救援へと向かう事を即決する。

『キラーアント』は傷つけられると仲間を呼び寄せるために特殊なフェロモンを発する。なので今回はその数が異常であるが、群れを成す事自体は良くあった。

ともかく、ベルはリリに一言断ると槍から真空の穂先を伸ばしながら、振り回して周囲の壁や地形を刻んでからキラーアントの群れの元へと駆け跳ねた。

ダンジョンの壁や地形を傷つければ修復のためにその地点においてはモンスターが生まれなくなるのである。

そして、キラーアントの群れが見えると【ムーン・サイト】を解除し……。

「(使わせてもらうよ、母さん)」

ベルは自分の叔母であるアルフィアが残した『魔導書』にて発現した魔法を使う事に

する。

「【福音(ゴスペル)】――【クリロノミア・チャイム】!!」

その魔法の発動と共にベルの体が透明な何かを纏う。そして……。

「はあっ!!」

槍を唸らせ、穂先や柄、石突きがキラーアントに接触したと同時、強力な圧と振動伴った鐘音の衝撃波が発生する。

その振動伴った衝撃波自体がモンスターの肉体を破壊するものであり、よって刺突に斬撃や打撃の威力を凄まじい域に強化するのである。

そして、無論……。

『ギィィィアッ!?』

キラーアントがその鋭い爪を魔法の効果を試すためにあえてその身で受けんと無防備となるベルに繰り出し炸裂した瞬間、音波纏い、鐘自身となっているベルより鐘音の衝撃波が放たれ、キラーアントの攻撃を弾き返しながらその身を逆に破壊してみせた。

アルフィアがベルへと与えた【クリロノミア・チャイム(遺産の鐘音)】は加護となってベルの力に

なっていた。
こうしてあっという間にキラーアントの群れをベルは瞬殺した。
魔法による凄まじい威力で魔石やドロップアイテムすら残さず、消滅させてしまったのだ……。
「すみませんが、一旦これで」
余りの瞬殺振りに呆然としている冒険者たちに断るとベルはリリルカを待たせているな所へと戻るために去っていった。
『こ、怖ぇぇぇぇっ!?』
白い長髪に深紅の瞳の冒険者が鎮魂歌の如く、鐘音を鳴らし続けながらモンスターを消滅させる様はまるで冥界からの使者、あるいは幽鬼を想起させ、そのため、ベルに助けられた冒険者のパーティは恐怖したのであった。
「改めて……救援することが出来て良かったです。回復薬は必要ですか?」
「い、いや手持ちで十分だ。危ないところを助けてくれてあ、ありがとう」
『(さっきの時と雰囲気違い過ぎる……)』
そのため、改めてリリルカを連れて戻ってきたベルを見て、戦闘時とのギャップもあって、激しく戸惑いながらの対応をしてしまったのである。

そうして、今日は初のダンジョンという事と既に『ジャックバードの金卵』を獲得しているので稼ぎは十分なために7階層内の全てを移動し尽くすとバベル地下一階に帰還し、そのままバベルからギルド本部へと換金のために向かう。

「まさか、『ジャック・バード』に出会って倒せるなんてベル君、運も良いんだね」

「あ、あはは。多くの神様と関わる事が出来たのでちょっとした加護があったりするかも……」

「ふふ、そうなんだ。じゃあ、御利益に預かろうかな」

換金によって百万ヴァリスちょっとの稼ぎを得たベルに対し、エイナは微笑みながらその頭を撫で回し、ベルはそれに心地良さげに蕩け始めた。

「うん、ベル君はやっぱり可愛がり甲斐があるよ」

「ふ、あう、んんっ……ど、どうも」

そうして、顔すらも弄り、自分の愛撫によってベルが更に蕩けたのを見ながらエイナは微笑んだ。

こうして冒険者として初の稼ぎを得たベルはリリとの山分けのために面談室を借り……。

「それじゃあ、六割はリリに上げるよ。お金がどうしても欲しいんでしょ？　そんな様子だよ」
「っ、あ、あの……」
　リリルカはベルの指摘に気まずげな表情を浮かべ、言い淀む。
「良いよ、隠さなくて……色々と大変なんだよね。それにこれからの雇用料って事で受け取ってよ」
「……す、すみません。そのご好意に甘えさせていただきますベル様。少し屈んでもらえますか？」
　リリルカ派は椅子から飛ぶようにして離れるとベルの元へと近づき、手招きしながら指示をする。
「う、うん」
　ベルはそれに従い、リリルカの元で屈むと……。
「ありがとう、ベル。お礼にこれからサポーターとして支えるだけでなく、こうして、たっぷりとお姉さんが可愛がってあげます。ベルは年上の女性に可愛がられ、甘やかされるのがお好きなようですから……」

「う、んぁうっ、く……あ、ありがとう」

ベルの一歳年上、十五才の女性としての態度をリリルカは見せつつ、蠱惑的な態度と言葉でベルに接する。

頭や顔を愛撫される度、可愛がられ甘やかされる毎にベルは蕩けていったのだった……。

十六話

夕方近く、冒険者として始めてのダンジョン探索を終えたベルはその収穫を【ソーマ・ファミリア】所属にしてフリーのサポーターとして雇ったリリルカと分配するとその礼として可愛がられ、甘やかされると『そんな、悪いですよ』と遠慮するリリルカに対し、『男の意地だから』と彼女が住処（派閥内で実力も稼ぎも少ないから、本拠には住まわせてもらえないとの事）としている場所の近くまで送り届けようと一緒に歩いていた。

それは勿論、ベルの優しさもあるのだが……。

「（やっぱり、ついてきてるな）」

換金所で収穫した魔石やドロップアイテムを換金したのだが、『ジャック・バードの金卵』という最低一〇〇万ヴァリスするものを手に入れられていたので要は大金をベルとリリルカは手に入れられた。

そこを他の冒険者の男たちに見られており、分配するために入った面談室から出た所から複数の男たちに尾行された。

【ムーン・サイト】にて尾行している者たちの数を探れば、獣人の男が一人にヒューマンの男が三人程である。

それぞれ一人になったところを襲ってくるのか、あるいは人目の無いところで襲うのかは分からないがともかく対処はすべきだろう。

「(輝夜姉ちゃんたちやアーディ姉ちゃんたちが頑張っていても、悪人は出て来るんだ……)」

旅の最中、ベルは色んな人や亜人、神と触れ合う中で『悪』とも対峙し、正義の派閥と主に民衆のために働く派閥の自分にとっては姉たちに世話されている者として状況によって取り押さえたり、殺したりもしている。

人や亜人、神々が触れ合う以上は様々な意思が絡むのだ。そして、それは良い面だけでなく『悪』が誕生するという悪い面もある。

『正義』がどれだけ尽力しようと『悪』の誕生は無くならない。

だが、それでも抑える事は、抑止は出来る。

だからこそ……。

「(まあ、それはそれで輝夜姉ちゃんたちやアーディ姉ちゃんたちの力になれば良いだけだし)」

『英雄』として、そして自分を育ててくれた大切な者たちのために『正義』などと偉ぶれ

ないが、それでも『善』の側で居ようと決めているし、このオラリオに入る以上は姉たちに協力し力になる事をベルは決めていた……。
「ベル様、もうここら辺で大丈夫ですよ……態々、ありがとうございます。本当にベル様はお優しいですね」
「そう、あれるように頑張ってるから。じゃあ、明日ね。リリ」
リリルカが止まり、告げたのでベルも又、止まって受け答えをする。二人は既に明日、ギルド本部で合流する約束は交わしていた。
「はい、ベル様。それでは」
そうして、リリルカが去っていくのを見送ると……。
「さて……」
呟くとベルは瞬間、凄まじい速さで跳躍し、建物の屋根から屋根へと更に跳躍を続けて移動する。
「な、消えた!?」
「バレちまってたのか!!」
物陰からもの影へと尾行していたベルの姿が消えた、逃げられたのだと悟った男たちは慌てたが……。
「ふっ!!」

屋根から屋根へと跳躍し続ける事で男たちの尾行を巻きながら、尾行者たちが居る物陰付近の建物の屋根へと移動したベルはそうして、男たちに向かって跳躍する事で飛び降りながら長槍の柄を舞わせ、三人の男たちへと柄を打ち込み、あるいは石突きで突く事で気絶させた。

「さて、まずは貴方たちの所属【ファミリア】を聞きましょうか……」

槍を手元で回転させ、槍の穂先をそのまま獣人の男の首元に突き付けながらベルは問いかける。

「お、俺たちはアーデと同じ【ソーマ・ファミリア】所属だ。い、言っておくがあの女だってお前を利用して……」

「ええ、それぐらい分かっていますよ。その上で僕はリリを許しているんです……だから、貴方たちの事も一度は許しますよ。悪人とはいえ、人を傷つけるのも殺すのも僕は苦手なんです」

「ひっ!!」

ベルは口調こそ穏やかだが、その瞳は笑っていないしなにより、威圧してきていた。

言葉の通り、次は許さず殺す事を……。

「(な、なんて目をしてやがる……)」

見た目は兎の如く、無力な者とすら思えるのにそれは正しく皮を被っているだけなの

だと獣人の男は思い知らされる。
「【ファミリア】の人たちに言っておいてください。これから先、僕やリリに危害を加えようとすれば、容赦はしないと」
「っ、ああ、わ、分かった。す、少なくとも俺たちはもう、なにもしねぇよ」
「ご理解、ありがとうございます。それでは、伝言よろしく」
突き付けた槍を引き、自分は男へと近づくと左頬を軽く叩くと男に背を向けて歩き去っていく。
「……と、とんでもねぇガキだ」
男は放心して座り込み、心底参った様子で呟いたのであった……。

二

ベルは尾行者に警告をして釘を刺すと男たちから去って、ヘスティアの神友で長い間、世話になったというミアハの派閥、【ミアハ・ファミリア】の本拠である『青の薬舗』

へと向かった。
今日のダンジョン探索で訪れた7階層で遭遇した『ジャック・バード』と同じレアモンスターでありながら、そのモンスターよりは出現率が高い青い蝶のようなモンスターであり、回復薬の原料となる『ブルー・パピリオの翅』というドロップアイテムを出すブルー・パピリオの群れに遭遇しており、しっかりと収穫していた。
数としては十個ほどであり、リリルカにも断って【ミアハ・ファミリア】にヘスティアが世話になった礼もあって、渡すために『青の薬舗』に足を運んだのだ。
「ギルドで換金すればそれなりに良い額になるだろうにありがとう、本当にありがとうベルよ」
「【象神の詩（ヴィヤーサ）】が言ってたように……ベルは良い子だね、ほら、おいで」
「んふ、ぅ、あ、く……」
ミアハに感謝され、ナァーザからも手招きされるとそのまま頭や首元、頬に顔と甘やかし、可愛がっていく。
「良い子、ベルは本当に良い子、初めてのダンジョン探索、お疲れ様……」
更に耳元へと甘く優しい言葉をかけていく。
「ふあ、ま、待って……くあぁ」
ベルは只々、ナァーザからの行為に蕩け、無意識にねだっていくようになる。

「素直に反応してくれるし、可愛がり甲斐があって、良いね。うん、これからも可愛がってあげるからね」
「あ、ありがとうございます……」
そうして、少しの間、ベルは蕩かされた後、『青の薬舗』を出て……そうして……。
「ヘスティア様、初稼ぎの礼という事でどうぞ」
ベルは『青の薬舗』から北西のメインストリートにある『冒険者用装身具（アクセサリー）の店』へと行き、ヘスティアの髪留めが痛んでいたのを見ていたので蒼い花弁を彷彿させる飾りつけのリボンに小さな銀色の鐘が付いた髪飾りを買い、ヘスティアにプレゼントした。
「うわぁぁぁ、もうどんだけ良い兎なんだい、君はぁぁぁっ!! もう今日はとことん、可愛がるからねぇぇぇ」
「ふふ、ベル君のそういうところ、変わらなくて良かったわ」
「うんうん、やっぱりベル君は良い子だよ」
「え、あ……んひゃ、くふあああああっ!!」
そうして感極まったヘスティアとベルの本拠に泊まりに来たアーディにアストレアによって全身マッサージされ、蕩かされ尽くす事となったのだった……。

十七話

下界に生きる動物、『猫』を飼い、育てる中で飼い主が猫に対しする愛情行為がある。
「ねぇ、ベル君……猫の飼い主が猫に対してする愛情表現に『猫吸い』ってのがあるの知ってる？」
「んふ、あ、うぅ……す、吸う？」
寝台の上で目覚めたベルは自分の主神であるヘスティアとベルが【ヘスティア・ファミリア】に所属した事で【ファミリア】の主神の許可を取って泊まりに来たアーディに自らが主神であり、現在、眷属であるアリーゼたちが遠征中（大体、一週間かそこらで帰ってくるのでは？　との事）のために本拠を留守にし、やはり宿泊に来たアストレアがそれぞれ、ベルの体中を愛撫しながら、蕩けて甘えてくる彼の様子に癒されている。
その最中にヘスティアが猫についての話題を出した。急にそんな事を言われたのでベルは戸惑った。
「うん、そうだよ。良く癒されるって聞くんだよねぇ……という訳で」
「私達も吸わせてもらうわね？」

「え、あ、ちょ……」
『すうぅぅぅぅぅ』
「ふあああああああああっ!!」
首元や腹部などに顔を近づけ、ヘスティア達にベルは吸われた。
猫吸いならぬ兎吸い(ベル)である。

「も、もう止め……力、抜けるぅぅぅぅ」
ベルは魂すら吸われているかという程の脱力感と気持ち良さを感じながらされるがままとなったのだった……。
オラリオの西のメインストリート路地裏深くにある【ミアハ・ファミリア】本拠である『青の薬舗』をベルは訪れた。
ダンジョンの探索のために回復薬を調達に来たのである。そして、もう一つ……。
「ミアハ様、ナァーザさん。昨日の晩御飯の残りですがお裾分け、持ってきました」
昨日、ヘスティアとアーディ、アストレアの分もそうだがヘスティアから【ミアハ・ファミリア】は零細【ファミリア】と聞いていたのもあって、元からミアハとナァーザの分も作っていたそれをお裾分けとして持っていった。
「おお、ありがとうベルよ……こういうのは本当に助かるぞ」

「すんすん……うん、匂いだけでも美味しそう。もしかして、ベルが作ったの？」
　ミアハは本当に嬉しそうな表情を浮かべて礼を言い、ナァーザは受け取ったタッパーを開けて匂いを嗅ぐと問いかける。
「はい、お口に合うかどうかは分かりませんけど」
　照れながら、苦笑しながら言うベル……。
「うぅん、絶対合うよ。これは」
　そう、ナァーザは答えると今日はもっと本腰を入れてダンジョン探索をするために回復薬を多めに買ったベルに対し……。

「まったく、ベルはそんなに私に可愛がってもらいたいの？　ふふ、良いよ。それに応えてあげる」
「え……あ……ふわ、く、んなぁぁぁっ!!」
　ナァーザは自室までベルを案内するとヘスティア達に兎吸いされた事でついた三人の匂いから『うん、だったらこれくらいまではセーフって事なのかな？』と何やら、基準を作りつつ、耳や首元を舐められたり、甘噛みされたり、尻尾で擽られたりと結構きわどい甘やかしと可愛がりをされ、ベルは又も蕩けたのであった。
「ふぅ、可愛がってくれるのは良いんだけど……ダンジョンに行く前から疲れるよ」

ナァーザからの可愛がりから解放されたベルは若干ふらふらとした様子で西のメインストリートを歩いていた。

「あ、あの……大丈夫ですか？　なんかお疲れのようですけど」

すると心配しているのが分かる声がかけられた。

「え、あぁ、はい。大丈夫ですよ、心配ありがとうございます。そしておはようございます、僕はベル・クラネルです」

白いブラウスに膝下まである若葉色のジャンパースカート、その上から長めのサロンエプロンをかけているという何処かの店の店員だろう恰好をした薄鈍色の髪を団子状にし、そこから一本の尻尾を垂らしたような髪型、薄鈍色の瞳の愛嬌ある美少女でスタイルも抜群なヒューマンの女性が居て、ベルは笑顔を浮かべながら挨拶する。

それはアフロディーテ直伝の挨拶でもあり……。

「……っ!!　わ、私はあそこの『豊穣の女主人』って店で働いているシル・フローヴァって言います。おはようございます、ベルさん」

シルは顔を赤に染めつつ、胸もときめかせ疼かせながら自己紹介をし、挨拶をする。

「はい、シルさん……これも何かのご縁ですし、今晩にでも僕の主神のヘスティア様と世

話になっている人たち合わせて四人、もしかすれば五人で店に行かせてもらいますね」
「わあ、それはありがとうございます。では、来店お待ちしていますね」
「はい、よろしくお願いします」
ベルは笑顔を浮かべて言うシルに笑顔を返しながら、背を向けて歩き去れば……
「っ、ふああ……と、尊いぃぃ」
少し硬直し、そして胸を抑えて倒れ込むと恍惚とした様子でそう言った。
対してベルはと言えば……。
「(シルさん、どこか人とは違う気配がしたなぁ……それに)」
シルとの会話中、どこかから怒りに殺意籠った視線に気配をぶつけられたのでシルと離れながら【ムーン・サイト】にて周囲を確認すれば第一級冒険者だろう雰囲気を有する黒い毛並みで荒々しい気性を隠そうともしていな銀の長槍を持った猫人（キャットピープル）の男に他にも十分な実力者だろう冒険者たちの姿を発見した。
冒険者たちが護衛に控えるシルは何者だろうと思うベルであった……。

二

オラリオの都市機能を管轄するだけでなく【ファミリア】の管理から冒険者たちの支援など様々な事を行っている中枢組織である『ギルド』。
ベルはその本部へとリリルカと待ち合わせているために向かい……。
「おはようございます、ベル様。今日もよろしくお願いします」
「うん、こちらこそよろしくお願いします」
リリルカと合流すると頭を丁寧に下げられたのでベルも丁寧に頭を下げて笑顔を浮かべる。
「っ、ベル様、お可愛いです」
「ぁ……ちょ……」
リリルカはそれに見惚れたかと思えばベルの頭を撫で回した。
ともかく、このままダンジョン探索のために『バベル』に向かおうとすれば……。

「今はオラがエイナちゃんに挨拶してるところだ。邪魔するなっ!!」
「高潔なエルフである我々に野蛮なドワーフが近づくからだろうっ!!」
「あ、あの困ります。ドルムルさん、ルヴィスさん」
受付嬢であるエイナの前で一七〇?とドワーフにしては高い身長ながら筋骨逞しい肉体、太い腕に足を有するＬＶ．３の冒険者であるドルムルと短い金髪に尖った耳、眉

目秀麗な容姿を有するエルフでＬＶ．３の冒険者であるルヴィスが言い争い、エイナが困り果てていた。

どちらも所属【ファミリア】は違い、現在のアドバイザーは違うが過去はどちらもエイナがアドバイザーを担当しており、エイナのアドバイザーとしての態度はダンジョン探索をする冒険者が死なないよう、知識をスパルタで教え込むというもの。

つまり、身近に接するのと容姿が良いのもあってエイナは二人に好意を持たれていて、恋敵であるために二人は良く争っている。

『あの二人、またやってるよ』

そして、少なくとも他の冒険者が知るくらいには二人の喧嘩は有名であるようだ。

しかし、此処はギルド本部、そして受付嬢が居るところで激しく言い争っているために他の冒険者たちからは当然、迷惑であり、皆が困り果てている。

だが、口を出せばとばっちり、あるいはヒートアップする事は間違いないので迂闊に声もかけられない状況であったが……。

「あの、一旦落ち着いてはどうですか？　お二人が好きなエイナさんも迷惑していますし……」

『五月蠅い、口を出すな兎野郎!!』

ベルが声をかけるとやはり、二人は口論しているのもあって取り付く島もない様子を

見せた。
「仕方ない……【ムーン・サイト】」
ベルは【ムーン・サイト】を最大出力で使用した。月はその光で空の下の闇を照らしながら、見守るもの。
魔法により、ベルの瞳は月光の如き輝きを得ると共に視認対象へとその光を当てる。
まるで太陽を背にした状態で虫眼鏡で黒い紙を覗けば、穴が空くように超常的な眼力は本来ならある筈の無い、ドルムルとルヴィスの致命的な部位と致命的な瞬間を無理やり見通した。
「ふっ!!」
「ぐげっ!?」
「がはっ!?」
そうしてベルは無理やり生み出した二人の隙を衝き、無理やり生み出した致命的な部位に向かって槍の石突きをドルムルとルヴィスに突き込み、意識を失わせて倒れさせる。
「まったく、大の大人がみっともない真似しないでくださいよ」
そうして、ドルムルの体を抱え上げようとすれば……。

「ああ、その二人は我々が連行しておこう。ありがとう、取り押さえてくれて」
【ガネーシャ・ファミリア】の団員たちが近寄り、声を掛けながらドルムルとルヴィスの体を抱え上げる。
「いえいえ……エイナさん、すみません。手荒なもの見せちゃって」
「うぅん、ああでもしなきゃどうにもならなかったし……あの二人はどっちも悪い人では無いんだけどね。ともかく、ありがとう」
「ふ……はい、どういたしまして」
　エイナへと謝ると彼女は礼を言いながら、ベルの頭を撫でてベルは心地良さげな表情を浮かべる。
「それでは皆さん、お互い冒険者家業頑張りましょう」
『おう、ありがとう!!』

　ベルはエイナから離れながら、周囲で見ている冒険者たちに言葉をかけると皆がベルの言葉に答えつつ、ドルムルとルヴィスの騒ぎを止めたベルに礼を言ったのだった……。

十八話

二回目となるダンジョン探索をするためにベルとリリルカは『バベル』へと向かうため、中央広場を歩いており……。

「おはよう」

ベルとリリルカの二人のように『バベル』へと向かう女性の冒険者から挨拶をされた。それは昨日、ベルのキューティポーズとキューティスマイルを見て悶絶しながら倒れた者の一人である。

挨拶したのは再度、ベルの可愛らしい仕草に笑みを見たかったからであり……。

「はい、おはようございます」

ベルはやはり、アフロディーテ直伝のキューティポーズとキューティスマイルによる挨拶にて返し……。

『(か、可愛い過ぎるぅぅぅぅっ!!)』

挨拶した女性冒険者だけでなく、周囲の男女の冒険者達も悶絶しながら倒れ……。

「べ、ベル様……もうちょっと……抑えてくださいぃぃ」

リリルカも注意を何とかしながら倒れた。
「え、リリ、抑えてって何を……って皆さんまたですかぁ!?」
リリルカと周囲の者たちが倒れた事に驚愕するベルは自身の可愛さをやはり、良く理解していないのだった……。
ともかく、目的通りに二回目のダンジョン探索を始めているベルとリリルカであるが、ベルはリリルカというサポーターとパーティを組めるようになった事で新たな武装を用意した。
「しっ」
バベルの地下一階にはダンジョンの入口である『穴』があるが、地下一階から上の階は幾つもの施設や店などがあり、その中には武具店もある。
その武具店からベルは長弓と矢筒に矢を購入し、リリルカに一旦、長槍を預けて現在使っていた。
当たり前の話であるが視界に視力を強化する【ムーン・サイト】と弓の相性は槍よりも抜群である。
モンスターの姿を探す事も出来るし、どう動くかも見る事が出来るので射手としての狙撃能力の強い補助になるからだ。
「うん、大分勘を取り戻せてきた」

「そ、そうですか（これで鈍ってたって事なんですか？）……それは良かったです」

リリルカはベルが弓で矢を射ればそれは絶対必中であり、しかも数本矢筒から一度に取李出しての連射や一度に数本を番えて同時に射ても必中させるという弓においても最高位の技と駆け引きを行なえるベルに驚愕しながら、彼に返答する。

そして、聞いてみれば『狩猟の派閥』として有名な【アルテミス・ファミリア】と交流しており、更には自分が所属する派閥が特に注意すべきこの都市の憲兵的な役割を有する【ガネーシャ・ファミリア】の団員に正義の派閥である【アストレア・ファミリア】とベルが深い交流をしている事を知る事となり……。

「（あ、あっぶなぁぁぁぁっ!?）」

当初の目的通り、ベルを獲物として利用していれば危ないところであったのを悟り、ベルの優しさに救われた事を知ったのであった。

ともかく、弓を使った際は鏃の痛みなどを確認して再利用できるものは矢も回収しつつ、ベルは弓に槍を使いながらダンジョン探索を続けて危機に陥っている冒険者たちを見つければ、迷わず助けたりしたのだが……。

「ありがとうございます、素晴らしき同胞よ」

「ど、同胞!?　すみませんけど種族が違います。僕はヒューマンです、ほら、耳も尻尾も無いでしょうっ!?」

「ぷふ」
　ヒュームバニーの冒険者を助けたのだが、ベルは同胞認定されてしまい急いで訂正しようとすればリリルカに笑われた。
「おお、それはそれで更に素晴らしい。きっと先祖がヒュームバニーだったのだろう。異種族だとしても私にとって貴方は尊敬すべき同胞だ」
「う、うーん……はぁ……ま、まぁ……よ、よろしくお願いします」
　敵意や悪意とかは感じなかったので戸惑いつつも握手を交わしたのであった。
「ん、ふ、んちゅ、はぁ……すみません、折角誘って頂いたのに……今回はこれで許してくださいね、ベル」
「んふ……ふぁ、ん、うん……勿論、許すよ」
「ありがとうございます」
　休憩中、『豊穣の女主人』にリリルカを誘ってみたのだが断られてしまい、その詫びとしてリリルカはベルに深い口づけをして蕩かせ、頭を撫で回して更に可愛がる。
　ベルはそれに対し、浸り甘えていくのであった……。

二

オラリオの西のメインストリートに建てられている石造りの三階建てで小綺麗な宿屋を彷彿とさせるその店はこのオラリオの中でも一番と言っていい程に評判の酒場、『豊穣の女主人』である。

特徴としては女将に店員、全てが女性であり種族も人と亜人、様々にしてドワーフの女将であるミアはともかく、店員の女性たちは美女に美少女と容姿は優れている。

そして、日中は女性を中心にした一般市民を対象としたカフェとなり、夕方以降はダンジョン帰りの冒険者を対象とした酒場として運営されるというやり方で客層を得ていた。

「シルさーん。朝に言った通り、来させていただきました。四人です」

「はい、いらっしゃいませベルさん。ありがとうございます」

ベルは換金を終え、ギルド本部を出てリリルカを昨日と同じように彼女の住処付近まで送り届けると自分の本拠へと戻り、『豊穣の女主人』で食事をしようと誘った。

アーディとアストレアは『豊穣の女主人』を知っていたようで賛成してくれたのである。

こうして、ベルはヘスティアにアーディとアストレアの四人で店へと向かったのである。

「あ、く、う、んふ……」

「わぁ、本当に可愛いですね」

「でしょ、素直に甘えてくれるのが溜まらないんだ」

「改めて思うけど、ベル君はとっても女性に好かれやすいわね」

「うん、こうやってどんどん増えていくんだって事がボクにも良く分かったよ」

シルが礼代わりにベルの頭やら顔やらを愛撫し、弄る事で心地良さげな反応をし、蕩けていくその様子をシルが楽しむとアーディは彼女の言葉に賛同し、アストレアにヘスティアは苦笑しながらも微笑ましい者を見る目でベルを見ていた。

ともかく、そうして店に入り注文をすると……。

「ベル君、お酒飲むの？」

果実酒を迷わず頼んだ事でアーディがベルへと聞く。

「普段は飲みませんけど、こういう場なら嗜む程度ですよ。アフロディーテ様が少しくらいは飲めるようになっといた方が良いとアドバイスされましたし、他にも旅の最中、飲もうと頼んでくる者たちが居たので」

ベルは事実を言った。
「うーん、まぁベル君なら酒に溺れる事は無いか」
「そうね、酒の飲みすぎは良くないし」
「そうそう、何事も程々が一番さ」
そうして、食事に酒を楽しんでいた四人。
「おいおい、随分と羨ましいやつじゃねえか。どれ、俺が試してやるよ。飲みで勝負しろ」
一人の男から酒による勝負を申し込まれた。
「良いですよ、受けましょう。こうした事は割とありましたし」
『ベル君っ!?』
『おお、良いぞ良いぞ』
ベルは酒による勝負を受け、アーディ達は驚いたが周囲は盛り上がった。
そうして酒による勝負が始まり……。
「ぐ……も、もう飲めねぇ……」
「うーん、酒って味は美味しいですが、酔った時の酩酊感はどうしても苦手ですね」
ベルが勝利をした。
しかも十数杯は飲んだのに顔色はほんのりと赤い程度である。

『（兎のような見た目しといて、凄い酒豪（ザル）だったぁぁぁぁっ!?）』

見た目に似合わない酒の強さに周囲の客が驚いた。

実はベルは輝夜とキスをする際、必ず彼女が体内に抱える毒の抗体を飲まされ続けていたのだが、ベルも輝夜もそして、抗体を作った治療師も知らない副作用として酒に対する耐性をベルは手に入れたのである。

「ふふ、まだまだ若いのにやるじゃないか。飲みっぷりも中々だ」

ドワーフの女将であるミアは快活に笑い……。

「うーん、酔ったらもっと可愛がれると思ったけど……まぁ、これはこれで良いかな」

シルは苦笑しながらもベルが勝った事を喜んだ。

「ミャー、あの白髪頭凄いミャー!!」

茶色の毛並みの猫人でグラマーなスタイルの美女の店員であるアーニャ・フローメルが明るく笑った。

「兎の皮を被った何かかな……ギャップが凄すぎるって」

短い栗色の髪の美女であり、スタイルも良いヒューマンの店員、ルノア・ファウストは驚愕の表情で呟く。

「ふふ、なかなか面白いニャ。見た目のニャー好みだし」
黒い毛並みでスレンダーな美女の猫人であるクロエ・ロロは妖艶に笑う。
「べ、ベル君……酒豪だったのかぁ」
「これは予想外過ぎるわ……」
「まあ、普段は飲まないのなら良いか」
アーディにアストレア、ヘスティアもベルが酒豪という意外性に驚いていた。

「さて、勝ったので額に『牛肉(ミノ)』っと」
『(容赦ねぇっ!?)』
そして、酔い倒れた者の額にベルはなかなか消えない筆で牛肉と書いた容赦ない行為にも店内の全ての者が驚愕したのであった……。

十九話

　オラリオの西のメインストリートの路地裏深くにて主に回復薬系の道具を販売している商業系派閥の【ミアハ・ファミリア】はかつては治療と製薬を主とする【ディアンケヒト・ファミリア】と競い合えるほどの勢力を有していたがとある事情によって、零細系派閥となってしまった。

「(絶対、気を使ってくれてるよねぇ……)」

　最近はベル・クラネルという自分たちにとっては幸運の兎と言っていい存在が居て、良く商品を買ってくれているので経営は大分、ましになっていた。

　それに有難いことに本人の【スキル】かどうかは知らないが、レアモンスターである『ブルー・パピリオ』のドロップアイテムで回復薬系の原料に出来る『ブルー・パピリオの翅』をダンジョン探索した日は必ず、持ってきてくれるので非常に助かっている。

「(それに……とっても可愛いがり甲斐もあるしね)」

　更にベル・クラネルは普段においては愛嬌のある兎そのもので頭を撫でたり、くすぐったりと可愛がれば直ぐに浸って更にとねだってくれるのだ。その様子を見るのは

とても癒される。
だからこそ、ナァーザはベルの事を気に入っているし可愛がり続けたい存在と認識しているのだ。
ベルの存在に救われているし、癒されているナァーザには一つだけ、悩みがあった。それは自分の主神であるミアハが外へと出歩けば、道行く冒険者達に無料で商品である回復薬を渡す事である。
まあ、宣伝になる事はなるのだがこうした行為は一つの問題を起こす。
それは……。
「おい、これも無料で良いよな。なんせ、前もミアハ様が無料でくれたんだからよ」
そう言うのは二人の取り巻きを連れた冒険者の男。回復薬を幾つか購入するのかと思えば、いきなりそんなふざけた事を言いだした。
このようにミアハの優しさに付け入る、あるいは踏み躙ろうとしてくる冒険者が出て来るのだ。
「寝言は寝てからにしてよ。商品を買うなら、金を払う……常識でしょう？」
「んだとぉ……姉ちゃん、優しくしてやってるからってあまり俺たちを甘く見ない方が良いぞ」
店の店員、眷属が自分一人であるからか冒険者たちは武器を抜きつつ、威圧してきた。

とはいえ、ナァーザから見て冒険者たちは脅威では無かった。彼女は冒険者を引退しているとはいえ、上級冒険者に属するＬＶ．２なのだから……。
「甘く見てるのは、そっちだよ」
適当にあしらうかと決めたナァーザだったが……。
「その人に手を出すな」
憤怒に塗れた声が男たちにかけられた。
「あ、なんだ……ぐげっ!?」
「ごぼぉっ!!」
そうして一人の男に唸りながら迫る蹴撃が炸裂し、頭を揺らしながら倒れ込み、もう一人も鞭のように撓り、炸裂した足刀によって倒れ込む。
「うっ……」
そして最後の一人の顎に蹴り上げが炸裂する直前で停止する。それをしている者は普段の愛嬌ある姿はどこへやら、義憤に駆られた戦士のそのものな雰囲気を纏うベルであった。
「お仲間は死んではいませんよ、最も貴方を含めて対応次第ですけど……貴方たちの【ファミリア】は？」
「……そ、【ソーマ・ファミリア】だ……」

怯えながらも男はベルの質問に答えた。
「……成程……」
冒険者となって数日であるが、【ソーマ・ファミリア】の冒険者にベルは金を狙われて尾行されたり、この前もギルド本部の換金所で【ソーマ・ファミリア】の冒険者が血走った様子で高値で換金してもらおうと職員と激しく口論しているのを見かけ、武器すら抜こうとしたので止めたばかり。
そうして、今回は自分の知人を狙われた。
「(これはもう……)」
なので、ベルは【ソーマ・ファミリア】に対し、とある事を決定する。
「顔は覚えました。二度とこんな事はしないと誓い、迷惑料に三人の有り金全部を払うなら今回は手打ちにしましょう」

「わ、分かった」
そうして、ベルは脅している男と倒れている男二人から金を受け取ると仲間二人を連れ出させてナァーザへと三人の金を渡したのであった。
「ありがとう、ベル。守ってくれて……とても格好良かったよ」
「いえ、何か起きる前に対処できて良かったです」

「ふふ、それじゃお礼してあげる……んちゅ、ふちゅ、くちゅ、ん……うん、美味し……ほら、もっと……」

ナァーザは照れながら嬉しそうに言うベルを抱き締めると深く口づけしながら、舌を入れて貪り始めた

「う、ん……くちゅ、ん……んん……ふぁ、ナ、ナァーザさ……激し……」

ベルはナァーザに口内を貪られる快楽に蕩けていく。

「うん、今日は今までよりもっと、可愛がってあげるよ……ベルはとっても良い子だからね……」

そうして、ベルを自室へと連れて行き……。

「うゅ、くふ……んあ、ぅ……そ、そこ……くあああああっ!!」

愛撫は勿論、マーキングするかのような甘噛みや本番ではないとはいえ、奉仕と自分が出来る手段、自分が使える部位を使って貪られる、用は責められる事による激しい快楽をナァーザはベルに与えたのであった……。

二

オラリオ中の冒険者が集まるギルド本部――彼とパーティを組んで四日目、リリルカは今日もベルを待っていたのだが……。

「ごめんリリ、聞きたい話があるんだ」

「……はい、何でもお聞きくださいベル様」

ベルが真剣な表情で言ってきたので応じ、面談室に入ると……。

「リリ、君の所属する【ソーマ・ファミリア】の事を聞かせて欲しいんだ。少なくともまともなところじゃないよね。僕が思ったところ、かなり『金』に執着してるみたいだし」

「はい、リリルカの所属する【ソーマ・ファミリア】はまともじゃありません。そもそも、主神であるソーマ様がまともな神様ではないですから」

そうして、リリルカは語りだす。

【ソーマ・ファミリア】の主神であるソーマは酒造りにしか興味が無く、眷属との交流においては自分からはしないし、派閥の経営には関わらず、団長任せであり、その団長もソーマが任せているのを良い事に派閥を私物化しているとの事。

性質が悪いのはソーマの酒造りの腕は神としての能力を封じた上でこの下界の人や亜人が敵わない程の『神業』の域であり、それによって製造された『神酒（ソーマ）』の味は正し

く心を酔わせるもの。
依存や禁断症状を与えるものではないが、それでも何度も味わいたくなる至高の酒なのだ。『神酒』は……。
そして、『神酒』は派閥に利益を与えた団員に与えられる賞品であるため、団員たちは利益、ようは稼ぎを多く得ようと躍起になっているのだという。
そんな派閥の内情は味方同士で争っているようなものであるため、利用し利用され……弱肉強食染みたものとなっており、そうした派閥で生きてきたリリルカは脱退金を稼ぐためにサポーターをしながらも泥棒をして来たのだとまで言い、ベルもその獲物として狙った事まで言った。
「ベル様、本当にすみませんでした。リリはベル様からの罰ならなんでもお受けします」
「ううん、罰なんて与えないよ。とっても分かりやすく話してくれたし、それにリリを助けたいって強く思ってる。ねぇ、リリ……僕に全てを任せて君を助けさせてくれないかな……僕が【ソーマ・ファミリア】を潰すから」
「願ってもない事です……よろしくお願いします、代わりにリリは全てをベル様に捧げる事を誓います」
そうして、ベルとリリルカは誓いと話を交わしたのであった……。

三

オラリオの東南、スラム街として有名な『ダイダロス通り』の近くには酒蔵が左右五戸前ずつ並んでいる管理棟、側に見張り塔も建てられた大規模な施設が建てられている。

それは【ソーマ・ファミリア】にとって重要な酒である『神酒』を貯蔵している倉庫である。その警備は本拠よりも厳重であるがそうした『倉庫』を周囲の建物に隠れるなどして監視している派閥があった。

今のところ、証拠などは無いが【ソーマ・ファミリア】が裏で悪辣な取引や不正など犯罪行為にかなり手を染めていたりしているのを感じ取っていて取り締まろうと様子を監視している【ガネーシャ・ファミリア】の団員たちであり、更に今は遠征中で居ないが、【アストレア・ファミリア】も又、【ソーマ・ファミリア】を要監視対象にしていたりする。

二つの治安維持行為に徹する派閥に睨まれながらも尻尾を出さない【ソーマ・ファミリア】の手口は見事と言っても良いだろう。しかし……。

「ん、おいおい……まさか、あいつ……」

「どうしたの、ハシャーナ？」

【ガネーシャ・ファミリア】の団員で幹部に属している無精髭を生やした無骨な男でＬＶ．４のハシャーナ・ドルリアは彼の眼下では監視対象の『倉庫』へとローブで姿を隠した者が短槍を持って歩いているのを見て、その者の行動を予期し、呟くと傍に居たアーディが問いかけながら様子を見ようと近づき……次の瞬間、爆発的な動きで駆け跳ね、門番に対し槍による轟閃を繰り出し、蹴散らしながらその勢いのままに門を破壊した。

そして、門を破壊した者はまるでハシャーナ達が見ているのが分かっているかのように手招きするような仕草をした。

「……もう、ベル君ってば……ハシャーナ、あれベル君だよ。ほら、この状況だと騒ぎを鎮圧するために私達、入らなきゃいけないしその最中、倉庫で【ソーマ・ファミリア】の内情探って不正とかの証拠見つけたら、取り締まらないとね」

「……ああ、そうだな。俺たちの役割としては必要な事だ……ベルって奴は結構知恵が回るんだな」

「ふふ、私たちの自慢の子だからね」

ベルの仕草が昔、遊びの時に決めた合図であったためにアーディは意味を理解し、ハシャーナと建前が出来ているのを確認すると……。

「ようし、皆……騒ぎを鎮圧するよ。でも、その最中に不可抗力で倉庫内を探っても文句言われないからね」

「騒動の原因は探らないといけないしな、さあ、鎮圧に行くぞー」

白々しく言いながら、憲兵隊は出撃する。

そうして、【ガネーシャ・ファミリア】が突撃する間にもベルは【ムーン・サイト】によって戦況把握や空間把握、敵の動きや致命的な部位に致命的な瞬間を事前に見透かしながら、空間中を己の庭の如く縦横無尽に駆け跳ね、舞い踊る事で相手を翻弄し機先を制する立ち回りのもと、槍を唸らせ、閃舞を披露し相手に炸裂させる事で戦闘不能にしていく。

大体は回避や槍で捌く事で相手の反撃を無力化し、魔法や魔剣による砲撃においては……。

「【福音（ゴスペル）】」

アルフィアの遺産による魔法を鎧替わりとし、その効果によってベルに魔法や魔剣の砲撃が炸裂したのと同時に生じる音波が『魔力』を無効化する事で消失させる。

『んなっ!?』

そうして隙を晒した者たちを叩き伏せていき……。

「武器を変えたのもそうだけど、ローブ着たり、仮面までつけちゃって……でも、私達を頼ってくれるのは嬉しいよ」

「お前、中々大胆不敵で勇猛な奴だな。あいつが気に入るだけはある。ともかく、お前のお陰で退屈な監視を終えることが出来た。礼を言うぜ」

　自分の一定範囲内に存在する全眷属の能力加算、器力共鳴という戦力を組んでの戦闘において強力な【正義巡継（ダルマス・アルゴ）】というスキルを有し、ベルに合流すると同時、回復魔法でありながら効果対象の能力も上昇させる【ディア・カウムディ】という魔法を使ったアーディ、ハシャーナ達がベルの味方となって【ソーマ・ファミリア】の団員たちを次々と戦闘不能にして捕らえ……。

「ぐぶぁぁぁぁっ!?」

　【ソーマ・ファミリア】の団長で彫りが深い細面、眼鏡をかけたりして理知人を気取っているが隠しきれない嫌らしさを口元から滲みださせているザニス・ルストラをベルの槍が空間を歪ませながら九つに分裂し、九つの方向から一度に叩きのめしたのであった。

　九つの連撃というよりは九つの同時攻撃。冒険者としての能力まで活かしたベルの秘技である。

そうして、捕らえられた【ソーマ・ファミリア】であるが、こんな事になっても中肉中背の男神のソーマは『酒が……』とソーマを連行させる前にリリルカの『恩恵』を他の神の者へと書き換える『改宗（コンバージョン）』出来る処置をしながらも酒の製造にしか興味を示しておらず……。

「……はぁ」

ベルは溜息を吐きながら、首を振ると……。

「ふっ!!」

「ぐあっ!!　ぅ……あ」

最大限、加減しながらもソーマを蹴り飛ばした。

「少しは貴方の酔いが醒めるのを期待します」

「……」

それだけをソーマにベルは言い、ソーマはベルに蹴られた箇所を押さえながらも何か、真剣な表情で考え始めたのだった。

その後、ベルはと言えば……。

「ベル君はやっぱり、良い子だね……それに一緒に仕事ができて楽しかったよ」

「ふふ、貴方も正義を行ってくれて私は嬉しいわ。アリーゼたちも喜ぶわよ。嫉妬もしそうだけど」

「ベル君、君はどこまで良い子なんだい……君が他人に尽くす分、ボクはたっぷり君に尽くしてあげるよ」
「ベル、私は貴方に全てを捧げ、尽くします」
「う、く……ふぁぁ、く、あああああっ!!」
ベルはアーディにアストレア、ヘスティアにそして、新しく【ヘスティア・ファミリア】の団員となったリリルカに愛撫や奉仕などとことん甘やかされ、可愛がられて蕩かされていったのだった……。

二十話

ベル・クラネルはギルドの職員に詰め寄ったり、知人である【ミアハ・ファミリア】のナァーザにも商品を力づくで奪いとろうとし、手を出そうとしていた【ソーマ・ファミリア】を許す事は出来ずに対処をする事にした。

【ソーマ・ファミリア】の詳しい情報をサポーターとして雇いダンジョン探索を共にしていたリリルカから得つつ、本拠よりも重要だという『神酒』の酒蔵へと向かった。

その際、様子を探れば団員たちが問題ばかり起こしている事から前より【アストレア・ファミリア】と共に行動を監視し、【アストレア・ファミリア】のダンジョンへの遠征中にも当然、【ガネーシャ・ファミリア】所属でベルと親密な関係にあるアーディ他複数の者たちが監視をしていたのを見たので利用させてもらう事にした。

そうして、【ソーマ・ファミリア】の取り締まりを自分の合図を察して行動してくれたアーディ達と行い、主神であるソーマも含めて派閥の重要な者たちを一旦、裁きを下すまで連行したのである。

こうして、ベルは元から派閥への脱退を望んでいたリリルカの望みも叶え、リリルカ

は新たに【ヘスティア・ファミリア】の団員へと『改宗』したのである。
翌日、【ヘスティア・ファミリア】の団長と団員のサポーターとしてダンジョン探索をベルとリリルカはしようと『バベル』へと向かっていれば……。
「ベルーーーー!!」
バベルの方かまるで超莫大な燃料によって動いているかのと思えるほどの速度で驀進する者がいた。
「リリ、持ってて……あ、アリーゼさん」
ベルは長槍をリリルカに渡す事で両腕を空けて、前に出ると……。
「ずっと、会いたかったわ。んむっ」
「わ、くふ……む、ふ、あ……」
飛び上がる事で一気に距離を詰め、抱き締めてきたアリーゼをベルは受け止めるとそのまま、アリーゼはベルへと深い口づけをする。
「ふむ、んちゅ、く……ふ、ん……んん」
「ぷは、く……んちゅあ、く……あ、アリーゼさ……」
「まだよ……くふ、んちゅ……くちゅ……」
そうしてアリーゼはベルの口内、唇を味わい続けながら、制止しようとするベルを逃がさないように動きつつ、更に口づけを続ける。

「ぷは……とりあえずはこれくらいにしてあげるわ。お帰りなさい、ベル」
「ぅ……んああ、は……い……ありがとうございます、そしてごめんなさい。勝手に旅立って」
「うん、やっぱりそうやって素直に謝れるのは偉いわ、ベル。でも次又、同じような事やったら、追いかけて行って捕まえて一生、外に出ないように飼うからね」
「……ぁうう、も、もうしません」
蕩け、悶絶しながらのベルの謝罪を受け取りながら、アリーゼは一瞬、身震いをさせるような熱と色の籠った表情と声で言い、ベルは怯えながら答えた。
「そうだ、もう二度とするんじゃないぞ……ずっと我儘言わなかったからこそ、一度だけはと許して差し上げましたので」
「ふむ、んちゅ、くぅ……んんん」
次に輝夜が近づき、言い含めながらもアリーゼのよりもさらに激しい口づけをベルに行う。
「ふぁ、か、輝夜さん……」
「ふふ、お帰りなさいませ」
自分に対し、潤んだ瞳で答えるベルの頭を輝夜は撫で回しながら微笑んだ。
「ベル、旅での話は聞いていましたよ。【白兎の槍士】という二つ名を手に入れるなんて

凄いじゃないですか」
「あ、あまりその二つ名は言わないでくださいリューさん。恥ずかしいので……」
「そうですか、私は良いと思うのですが……んちゅ」
「んむ」
　リューはベルに微笑むと軽く口づけする。
「相変わらず、可愛らしい奴だなベル」
「ん、う、あうう……僕としてはもっと格好良くなりたいんですけどね……」
　次にライラがベルの頭を撫で回し、顔を弄ると最後に頬へと口づけした。
　そうしてダンジョンの遠征から帰ってきた【アストレア・ファミリア】の者たちに再会を喜ばれつつ、それぞれに可愛がられ、甘やかされ、ベルは愛を与えられる。
　当然、冒険者になった事も喜ばれたが……。
「皆、疲れているけどもう踏ん張りよ。今から【ロキ・ファミリア】に裁きを与えに行くわ。正義の剣と翼に誓って」
『正義の剣と翼に誓って!!』
「いや、そんな誓いしながら行かなくて良いですからっ!!」
　ベル自身が所属しようとしていた【ロキ・ファミリア】の入団試験を受けさせられず、しかも追い出された事を聞けばアリーゼたちは怒り心頭となって現在、主力陣は【アス

トレア・ファミリア】の後に遠征を行っている【ロキ・ファミリア】へと攻め入ろうとしたのでベルは必死に止めた。

　ともかく、そうしてベルはリリには前もって伝え、決めていた通りにアリーゼたちと会った事で彼女たちの遠征の後処理を手伝い、彼女たちの主神であるアストレア、ヘスティアにリリ、アーディと共にオラリオ北にある本拠、瀟洒な白い館の『星屑の庭』へと泊まりに行き……。

「ふむ、くふ、く……んあ、く……アリー……ゼ……さ……輝……夜……さ……っむ、く、ふ、う、うう……も、もう……や……」

「くちゅ、ふちゅ、む……ふふ、それは駄目よベル。今まで会えなかった分、私は貴方を愛したいもの。こればっかりはちゃんと受け入れてもらうわ」

「ええ、それ色々と厄介だった【ソーマ・ファミリア】への対処を代わりにやってくれたのですから、そのお礼もしたいしな」

　夜中、アリーゼの部屋にてベルは寝台の上でアリーゼと輝夜に交代で深い口づけに愛撫やらで蕩けに蕩かされ続けていた。

「偉い、偉いわベル。そして、良い子、良い子……ふふ、大好き……」

「可愛い、好き、愛してる、大好き……愛してるぞ、ベル……」

「ふくっ!?　あ、ああ……そ、それ止めぇぇぇっ!!」

「ん、お姉ちゃんたちに甘やかされるのが好きなんでしょ？　もっともっと甘やかしてあげる。ほら、頑張れ頑張れ、甘えるの頑張れ」
「今は只、お前の可愛い姿を見せてくれ……ほら、甘えろ甘えろ、駄目駄目になってしまえ」

更にアリーゼたちはベルを悶えさせるべく艶のある声であり、甘さと優しさのある言葉を贈り続けてベルの精神を溶かし揺さぶる。

「ぅあ、く……ひゅ、んん……」
そうして、ベルは蕩けきってしまい……。

「ふふ、それじゃあ、そろそろ本番行くわよ」
「今日は加減無しで行くからな、ベル」
「う、く、ふあああああっ!!」
アリーゼと輝夜は悶えたベルを更に徹底的に可愛がり、甘やかし、愛するとそうして深い愛の繋がりまでも行い、ベルを終始幸福と快楽の極致に浸らせたのであった……。

二十一話

昨日、ダンジョンに遠征に行っていたアリーゼ達、【アストレア・ファミリア】の皆とバベルにて再会し、彼女たちの遠征での後処理を手伝ったベルはその後、自分の主神であるヘスティアに団員でサポーターのリリルカ、そして眷属であるアリーゼ達が帰還するまで【ヘスティア・ファミリア】の本拠である廃教会に泊まりに来ていたアストレアに【ガネーシャ・ファミリア】のアーディと共に【アストレア・ファミリア】の本拠である『星屑の庭』で再会とアリーゼたちの遠征の帰還を祝う宴を行なった。

その後、ベルは一年、旅立っていた事でその分と十四才になった祝いとしてアスフィにローリエの二人のように深い関係として繋がり、たっぷりと愛情を与えられたのである。

そうして、翌朝……。

「う、ふ、ぁぅぅ……も、もう良いから、や、止めてぇ……アリーゼ姉ちゃん、輝夜姉ちゃん……」

ベットで眠っていたベルは早朝に彼へと自分が抱く気持ちを与えられ、念願叶ってご

機嫌かったっぷりと愛と快楽を堪能した事で艶を纏うアリーゼに同じく、真に繋がった事でご機嫌であり、やはり愛と快楽を堪能した事で艶を纏った輝夜の二人によって頭や顔、体全体と愛撫されている事で身も心も蕩けていた。
「うぅん、止めないわ。蕩けて甘えてくるベルが可愛いんだもん。ふふ、これからもまだまだ、可愛がってあげるし、甘やかしてあげるし、愛してあげるわ」
「ふふふ、このまま私達の飼い兎になりたいと思うくらいにとことん蕩かせてあげましょう」
「そ、そんな事されたら僕、駄目になっちゃう……」
「良いじゃない、そうなったらそうなったで私達が養ってあげるんだから……ほら、駄目になれ、駄目になれ、もっともっと甘えちゃえ」
「駄目になれ、駄目になれ、どろどろに蕩けてしまえ……」
「うあ、さ、囁くの駄目ぇぇぇっ!!」
　ベルは更に抱き締められたり、愛撫されたりしながら朝食の時間まで艶のある声で囁かれ、身も心も揺さぶられ続けたのだった……。

　そうして、朝食後は……。

「皆さん、おはようございまーす」
『おはよう』
ベルにリリルカ、アーディとリューの四人で【ガネーシャ・ファミリア】と【アストレア・ファミリア】が派閥の活動として行っている都市内の巡回と都市内の人々への奉仕活動を始めた。
既にベルは三日に一回の割合でダンジョン探索を休んでいる時にはリリルカとアーディと共に巡回と奉仕活動を始めていて、今日はアリーゼたちが帰って来たのもあって早めにしたがこれで三回目になる。
そして、彼の挨拶に皆が笑顔を浮かべつつ、女性や女神たちはベルの頭を撫でたりして可愛がる。
『(これ、神々で言う愛嬌兎(マスコット)だ……でも、可愛い)』
可愛がられて心地良さげにしているベルに対し、リリルカたちはそうした感想を抱いたし様子を見る者たちも又、同じような感想を抱くと共に癒される。
因みにベルの巡回及び奉仕活動は的確である。【ムーン・サイト】によって都市内の広範囲を探って、起きている騒ぎや困っている者の元へと行く事が出来るからだ。
つまり、そうした活動を行う者としても向いているのだ。ベルは……。

そうして……。

「ベルさん、ご苦労様です……」

リューと個人的にも親しい関係にある『豊穣の女主人』の店員、シルが店の前から挨拶したり……。

「ベル、今日は巡回？　ふふ、偉いね」

たまたま、買い出しに出ていたナァーザに会って微笑まれながら、可愛がられたり……。

「おや、久しぶりですねベルさん」

「はい、アミッドさん。この前はありがとうございました」

北西のメインストリートで治療院を構えている【ディアンケヒト・ファミリア】の団長であり、長い白銀の髪に美しく精緻な人形染みた美貌にスタイルも良いが、一四九？と小柄なヒューマンにして輝夜の毒に対する抗体薬を作り出せる程の凄腕の治療師であるアミッド・テアサナーレと治療院の入り口前にて遭遇し、挨拶を交わす。

以前、ダンジョン探索の際に重傷を負った冒険者を見つけたので大量の回復薬にて応急処置をしてバベルにある治療施設に運ぶと派閥の活動として、そこで待機していたア

ミッドに出会い、治療を頼んだのである。
「いえいえ、むしろ治療施設の方まで迅速に運んでくださって感謝しています。やはり、助けられる者は多い方が良いですから」
「ですね、僕もそう思います」
「ふふ……可愛らしい笑顔です」
「うあ……」
「なるほど、輝夜さんやアリーゼさん達が夢中になるのも良く分かります。貴方はとても愛らしいし、癒される」
「はう、ふぁぁ」
笑顔を浮かべ合った二人だが、アミッドはベルの頭に手を伸ばすとやはり、撫で回す事で可愛がり、ベルの心地良さげな様子に微笑む。

「でしょ、本当どれだけ可愛がっても飽きないよ。ベル君は」
「はい、まったく」
「ベル様も特に年上の方に甘やかされたり、可愛がられたりするのはお好きな様子ですしね」

「あ、アーディさん達まで……ま、待って……あうぅぅ」
そうして、アーディ達も加わり、ベルはやはり、意識を蕩かされてしまう。その後、別の地区では……。

「わぁ、ベル君じゃない。この前は畑仕事手伝ってくれてありがとう」
「とても助かりました」
このオラリオで野菜の栽培など農業を行っての商業活動をしている派閥の【デメテル・ファミリア】の主神とその眷属に出会った。
デメテルは蜂蜜色の長髪に優し気な目つき、美しくスタイルも抜群な女神であり、ヘスティアの神友でもある。
ペルセフォネはデメテルの眷属である女性だ。
ちょっと前に野菜を運んでいるデメテル達の仕事を手伝うという縁があったのだ。
「ど、どういたしまして……ふぁう」
「ふふ、畑を荒らす兎なら退治しないといけないけど、ベル君みたいな愛らしい兎なら大歓迎よ」
「そうですね」
デメテルはベルを抱き締め、ペルセフォネも又、ベルの頭を撫でて可愛がるのだった

……。

そうして……。

「ん、あ……や、やっぱり、じゅ、順番ってこういう事……くはあ、だったんですねぇ」

「それだけ、君は皆に好かれてるんだよ。勿論、私も愛してるよベル君」

「ええ、私も愛していますよベル……そして、誰にも負けるつもりはありません」

「あ、んぅや……ふあああああっ!!」

アリーゼと輝夜の次となっていたアーディにリューが宿泊施設にてベルに愛と快楽を与え、深く繋がったのであった……。

二十二話

ベル・クラネルがオラリオに来て半月を過ぎた。幼いころから世話され、可愛がられたアスフィにローリエ、輝夜にアリーゼとリューにアストレア達、【アストレア・ファミリア】にアーディと一年間、離れていたというのもあってか彼女たちに今までより更に愛され、可愛がられた上に肉体的な意味でも繋がった。

更に同じ【ファミリア】でサポーターのリリルカとも関係を築いているし、主神であるヘスティアは処女神というのもあってか躊躇いはしているが、『待ってて、いずれがボクも……』と予約はされていたりする。

更にナァーザからもベルは積極的に愛され、可愛がられているしシルにアミッド、デメテルなどオラリオに来てから沢山の女性たちに可愛がられ、愛されている。

それは正直、とても嬉しいし気持ち良いし、心地良くて堪らないし、ずっと浸っていたい程である。

とはいえ……。

「(でも、英雄にならなきゃ)」

ベルは駄目になりそうな気持ちに活を入れる事にする。ダンジョンにソロで挑むことによる武者修行を開始する事にしたのだ。

勿論、今回は前からちゃんと相談して皆、受け入れてくれたのだが……。

「（絶対、後で凄く甘やかしたり、愛してくるんだろうな……）」

武者修行を終えたら、更にいつもより自分を愛し、可愛がって来るんだろうなとベルは分かっていたのだった。

ともかく、ベルはソロにてダンジョンへと挑みに行った……。

二

このオラリオには迷宮都市であるが故の特有の派閥形態がある。

それは未だ、深奥であり、本当の意味での最下層が判明していないダンジョンの全てを開拓し、突き止める事やダンジョンにある未知であり、新たな資源の発見などをする『探索（ダンジョン）系派閥』。

その等級に応じて探索系派閥はギルドからノルマが課せられたりするが、冒険者登録に際しての便宜や収める税の優遇といったメリットもあったりする。

そんなオラリオの『探索系派閥』の大手の一つはアーディの所属する【ガネーシャ・ファミリア】であり、それよりもさらに大手の派閥こそ【ロキ・ファミリア】であるが……。

『(ま、まずいっ!!)』

遠征を行い、現在は帰還をするためにダンジョンの中層を進んでいる【ロキ・ファミリア】の派閥は焦っていた。

何故なら、帰還の際に遭遇した牛頭人体のモンスターであり、筋骨逞しい肉体を有しながらその咆哮はＬＶ．１の冒険者たちの動きを恐怖で止める力を有すると中層で産出されるモンスターの中ではトップに近い能力を有するミノタウロスの集団と戦い、半数ほど片付けた瞬間、凄まじい勢いで逃走を開始したのである。

モンスターが逃走するという前代未聞の事態に呆気に取られ、機先を制され、【ロキ・ファミリア】は逃走を許してしまう。

そして、遭遇した１７階層から１６階層へと上がる道を進んでいき、そうして、遂には階段すらも上がっていき、ミノタウロスの群れは１６階層へと上層を成功。

しかし、勢いは止まらずこのままだと更に階層を上がっていくという最悪な事態を実

現しかねなかったが……。

「(させないっ!!)」

そんなミノタウロス達に対し、月の視界と同調した瞳の力により、ミノタウロス達の致命的な部位や致命的な瞬間を見抜くどころか無理やり生み出していて、更には空間の『間隙』すらも見抜き、生み出しながら虚空を駆け跳ねる白き影。

それは空間の間隙に滑り込んでいるからであり、当然、その動きは異次元的な動きであり、そして、何よりミノタウロス達の間隙を衝くための動きである。

更に白き影は月の視界と同調した瞳を持っているだけでなく……。

「ふっ!!」

手に持っている長槍を唸らせ、振るいながらの舞踏を行うとともに鳴り響くは鐘の音。

槍による轟閃が炸裂する度に鳴り響く轟音はミノタウロス達を呑み込み、消滅させる。

まるで鎮魂歌のようですらある。

そして、ある程度ミノタウロスの数が減らしつつ、中心に到達すると……。

「【炸響(ルギオ)】!!」
爆散鍵(スペルキー)を唱える事で纏っていた音波を爆散させ、ミノタウロス達の群れをベル・クラネルは音の爆発によって消滅させた。
「(す、凄い……あの子……)」
【ロキ・ファミリア】の主力陣の一人であり、美しい金の長髪に美麗な容姿の女性剣士であるアイズ・ヴァレンシュタインはベルの動きや槍の腕、魔法の威力と彼の強さに夢中になった。
「(ま、まさか……しかし……)」
【ロキ・ファミリア】の副首領であり、翡翠色の長髪を後ろで結い、容姿は美麗であり、成熟しているエルフの女性でありながら、更にエルフの中では王族にしてオラリオの魔導士の中では最強と呼んでも良いくらいの実力を有しているリヴェリア・リヨス・アールヴはベルの容姿や鐘の魔法にあまりにも見覚えがあったため、驚きながらベルへの洞察を続ける。
無論、他の者たちもベルへの洞察はするが……。

「困ったときはお互い様ですし、借りとか気にしなくて良いですからね」
笑みを浮かべながら、頭を下げるとベルはその場を去っていく。

『可愛くて良い子だなぁ……って違うっ!?』

微笑ましく愛らしかったのもあり、主神の趣味もあって、女性が構成員の数の多くを占める【ロキ・ファミリア】の者たちはつい、ベルが立ち去るのを手を振ったりして、見送ってしまった。

ともかく、明日にでも自分たちの後始末をしてくれたベルを探し、礼や謝罪をする事に決めたのだった……。

二十三話

オラリオの北西のメインストリートと西のメインストリートに挟まれた区画にあるうらぶれた廃教会こそがベル・クラネルの所属する【ヘスティア・ファミリア】の本拠である。

しかし、その廃教会は【ヘルメス・ファミリア】からの依頼により、このオラリオにおいて鍛冶と共に建築もやっている【ゴブニュ・ファミリア】が急ピッチで半月間の改修作業を行った事で新築そのものと化しており……。

「ただいま」

『お帰り』

自分の本拠へと帰ったベルが教会の中へと入れば、主神であるヘスティアや同じ眷属でサポーターのリリルカだけでなくアスフィにローリエ、輝夜にアリーゼにリュー、アーディたちが出迎える。

ベルの面倒を見てきたアスフィとローリエ、アーディは時間に予定が自由ならば【ヘスティア・ファミリア】の本拠に泊まりに来る（因みに修復された二階の部屋や聖堂を使う）し、【アストレア・ファミリア】においては交代制で眷属たちやアストレアも泊まりに来たりしているのである。

「ヘスティア様……とりあえず更新お願いできますか？」

「うん、良いよ。それにしても随分とダンジョンでの修行頑張ったようだね」

ヘスティアはベルからの要望に応えつつ、ぼろぼろな服装の彼に言う。

「はい、中層域の２０階層まで行ってきました」

そうして、地下室にて上着を脱ぎ、ベットにうつ伏せになって更新を行うと……。

「おめでとう、【ランクアップ】と【スキル】が発現したよ」

ベルはＬＶ．２へと【ランクアップ】を果たし、それによって発現出来るようになった発展アビリティの中から縁起良さそうのもあって、『幸運』を選び発現させた。

そして、スキルは新たに２つ発現し……。

【駿兎健脚（ラビット・フット）】

・脚力強化

・速度域に応じて効果上昇

【魔鐘奏術（チャイム・アーツ）】
・魔法効果増幅
・魔法併用化
・精神力消費の効率化
新たに発現した【スキル】はどちらも強力な【スキル】であったが……。

「うう……【スキル】まで僕の事、兎って……」
「でも、ベル君は兎だしねぇ」
「良いじゃないですか、兎で」
「そこは受け入れないと駄目ですよ、ベル」
「うん、ベル君は兎のようだから良いんだ」
「そんなにショックなら、たっぷりと愛でてやろう」
「ええ、兎って印象が気にならないくらいにね」
「今日も愛をたっぷり注いであげます」
「ちゃんと受け止めてね、ベル君」
ヘスティアたちは兎の名を冠したスキルが発現した事にショックを受けるベルに対

し、苦笑したりしながら……。

「あ、あう……」

ベルをいつもの如く、可愛がり甘やかしてその意識を蕩かせていったのだった……。

二

オラリオにある【ファミリア】の中でも最大派閥の権威を有する【ロキ・ファミリア】の主力陣は昨日までダンジョン探索における『遠征』を行なっており、今日はその遠征にて獲得した魔石や『ドロップアイテム』の換金など後処理をする日である。

そして、ギルド本部にて魔石の換金を担当するのは【ロキ・ファミリア】の団長である黄金色の短髪に碧眼を有し、凄腕の槍士であるパルゥムの男、フィン・ディムナと副団長のリヴェリア・リヨス・アールヴに筋骨逞しい肉体など歴戦の戦士そのものの風貌をした老年のドワーフの男であるガレス・ランドロックという【ロキ・ファミリア】における三首領である。

「(こういうのは気が進まないが……)」

リヴェリアは昨日、自分たちが逃がしたミノタウロスの群れを倒してくれた兎のよう

な雰囲気を持ちつつ、自分の知る女性の魔導士に似た風貌の少年の事をある受付嬢に聞こうとしていた。

その受付嬢とはエイナ・チュールであり、彼女の母親であるアイナはリヴェリアの幼馴染でありながら、従者でありリヴェリアが里を出るのに同行し、一緒に旅もしたがハイエルフ特有の病気を発症してしまい、とある都市にて別れたという経緯がある。

しかし、交友は続いていてエイナとも幼い頃ではあるが、交流している、もっとも現在、受付嬢として働いている事は聞きつつも仕事の邪魔をする訳にも行かないので敢えて控えていた。

だが、今回は自分たちの尻拭いに後始末をしてくれたあの少年にお礼をするためにもエイナに少年の事を聞くと決めた。

しかし、リヴェリアはエイナに聞かずに済んだ。

何故なら……。

「おはようございます、エイナさん」

「うん、おはようベル君」

エイナの元へと【ランクアップ】した事を報告するために訪れたベルに会えたからだ。

「すまない、少し割って入らせて貰っても良いだろうか？」

「り、リヴェリア様っ!?」

「あ、昨日の……」
　エイナはリヴェリアの登場に驚き、ベルは昨日、少しとはいえ声をかけたのでそう反応する。
「久しぶりだな、エイナ。随分と綺麗になった……そして、君……昨日は私達が逃がしたミノタウロスを倒してくれてありがとう、そしてすまない、尻拭いをさせて。私の名はリヴェリア・リヨス・アールヴ。【ロキ・ファミリア】で副団長をしている。どうか、君の名を聞かせてくれないか？」
「僕はこのオラリオでは新興派閥の【ヘスティア・ファミリア】の団長をしているベル・クラネルです。礼儀を尽くしていただき恐縮です」
「いや、当然の事をしただけだ。本当に感謝しているし申し訳なく思っている」
「あ、ふぅ……んん……」
　リヴェリアは笑顔を浮かべて言うベルを愛らしく思い、思わず頭を撫でてみればまるで飼い兎が撫でられるのを受け入れるが如く、ベルは心地良さそうに目を細め、身を任せ始めたので……。
「……本当に愛らしいな、ベル・クラネル……ん？」
　リヴェリアは表情を綻ばせながら、撫でるのを続けるがふとベルの名が引っ掛かった。

「少し、待っていてくれ」
　そうして、リヴェリアはフィンの元へと行き、以前彼がベルというものが自分たちの派閥に試験を受けに来ると言っていたのを改めて聞いた。
　というのも彼が数年前まで槍術の鍛錬を付けていた【ヘルメス・ファミリア】の副団長であるファルガーからそれとなく、よろしくしてもらう様に頼まれたとロキにリヴェリア、ガレスは聞いていたのである。
　更に実はフィンは依怙贔屓のようなことにならないようにしかし、ベルが入団試験を受けられるようにフィンも含めて主力陣が遠征に行っている間、入団試験を受けに来た者が居れば一先ず、仮の試験を受けるように準備はしつつ、団員全員に言い含めたりもしていたが……。
「すまない、ベル・クラネル……これは僕たちの落ち度だ」
「知らなかったで済ませる事ではない……この件に関しては昨日の事も含めてしっかりと相応の事をさせてもらうと約束しよう」
「まずは謝罪をさせてほしい」
　こうしてリヴェリアを通じて三首領はベルが【ロキ・ファミリア】が遠征中に自分たちの派閥に入団試験を受けに行った際、仮試験すら受けさせてもらえず、門番によって拒絶された事を知り、とにもかくにも三首領は謝った。

「い、いえそんな……何もそこまで」
「君は優しいな、ベル・クラネル……だが、これは私達がしなければならない事なんだ」
ベルは申し訳なさから止めさえようとしたが、リヴェリアは真剣な表情で告げて必ず、ベルに対する謝罪とミノタウロスの件に関する恩に対して報いる事を誓った。
そうして……。
「おんどれェェェっ、なに、うちらの面子潰してくれんてんのや、あぁんっ!?」
全員が後処理を終えて本拠へと戻った【ロキ・ファミリア】だが三首領が報告するまでもなく、朝から【ロキ・ファミリア】の本拠を訪れたヘルメスとアスフィとファルガーにアストレアにアリーゼと輝夜という両【ファミリア】の主神と眷属からの話を聞いたロキは事態を知っており、そして怒り狂って門番をしばきまくっていた。
実は彼女はアストレアからベルの入団試験についてよろしくするよう頼まれていたのだ。
なので彼女が言うようにベルを追いだした門番は派閥の面子を潰した形となる。
「皆、改めて勝手な判断で勝手な行動をしないように」
フィンは全団員を集めつつ、ベルを追い出した門番がロキによってしばかれる間、注意をした。

そして、門番に対しては徹底的で厳しい教育を行うという罰を課したのであった……。

二十四話

迷宮都市オラリオはこの世界において重要な資源である『魔石』を有するモンスターが住む魔窟であるダンジョンを有している事もあって、魔石製品の分野においてはほかのどの国や都市の中でも群を抜いている。

そして、世界中との交易においては魔石製品を主産業ともしていた。だからこそ、製品製造を担う労働者をもオラリオは抱えていて、そうした【ファミリア】に加入していない無所属の労働者やその家族の多くが住居を構えているのが一般市民の多い地区である西地区。

この西地区で経営をしている酒場や宿屋などの店の中でも一番評判が良く建物自体も大きな店と言えばそれは『豊穣の女主人』というカフェ兼酒場である。

今夜も多くの客で賑わっている『豊穣の女主人』だが今日はより一層の賑わいだ。何故なら、ダンジョンでの遠征を終えた際の恒例行事として【ロキ・ファミリア】が店内で宴をしているからである。

この都市でも最大派閥が宴をしている事もあって、遠慮しているのか居辛いのか冒険

者だろう客たちは食事を軽く済ませて、早々と店を去ったりする中……。
「こんばんは」
　本拠である教会でＬＶ．２に【ランクアップ】した記念による宴会をリリルカにヘスティア、アスフィにローリエとファルガーにヘルメス、輝夜にアリーゼにリューとアストレア、アーディにナァーザとミアハ達と共に行ったベルはその後、輝夜の誘いによって『豊穣の女主人』で飲み交わしに来た。
　因みにベルがアフロディーテにより、酒を嗜んでいた事については自分が教える気満々だったが故に輝夜は凄く不機嫌となり、そうした念をアフロディーテに送っており、『なんだか凄く理不尽な念を送られた気がするわ……』と輝夜からの念を受信したアフロディーテは身を竦ませながら言ったりしていたのだった。
「はぁい、あ……ベルさん、いらっしゃいませ。来てくれて嬉しいです」
「わわ、あ、あの……こういう事は店員なら控えた方が……客に対する対応は平等じゃないと」
　ベルの言葉に店員であるシルが店から駆け寄り、ベルの姿を見ると抱き締めながら頭を撫でていく。
　ベルは心地良くなりながらもシルに注意するかのように言ったのだが……。
「私に可愛がられるのは嫌なんですか、ベルさん？」

「それは嫌じゃないですよ「ふふ、それなら良かったです。それに私はベルさんの事が大好きだから、ちょっとくらい特別扱いしたいんですよ」う、んん……」

悲しげな顔をシルは浮かべてベルを戸惑わせた次の瞬間にはベルの顔をマッサージするかのように弄って蕩けさせていく。

「やっぱり、毎日こうしてベルさんを可愛がれる輝夜さん達が羨ましいです」

「ああ、そうだろう。それで飲みに来たのだが、席は空いてるか？」

「はい、空いていますよ。では、こちらへどうぞ」

「ちょ、手を引かないで……」

輝夜の問いに答えながら、ベルの手を取って店の中へと誘導するシル。

すると……。

「あっ、おいベル・クラネル。今日こそ飲み勝ってやるぞ」

何度か来ているこの店にて会うたびに飲み勝負を挑まれている男に声を掛けられた。

因みに男の顔や体には負けた事による落書きが数多くあった。

「またですか……」

「飲み勝負なら混ぜてもらおうかのうって……ベル・クラネルではないか」

「おお、自分がベル・クラネルか。会いたかったでぇ」

飲み勝負を挑まれたベルだったがガレスとロキがそれに混ざろうとやってきて、そうしてロキは自分のところの門番がやらかした事を謝り、門番にはしっかりと罰を与えた事を言う。
「そんな、別に良いのに……でも誠意ある対応に感謝しますロキ様。それと僕は恨んだり、怒ったりしていないので安心してください」
「くー、あのドチビには勿体ないくらい可愛いし滅茶苦茶良い子やんけ」
ベルの善良振りに軽く感激しながら、感想をロキは言った。
ともかく、そうしてベルへと勝負を挑んだ男とその仲間、ガレスにロキと『俺も混ぜろ』とやってきたベート、そうしてベルらにより飲み勝負が始まると果実酒や蒸留酒など段々と強い酒が振る舞われていき、最終的には酒に強いドワーフのための度数が滅茶苦茶高い『火酒』まで振る舞われるようになり……。
「無念……」
「ふう、あー……流石にここまで飲むと大分、効きますね」
最後に争っていたガレスが倒れ、最終的にベルが勝ったが数十杯も飲み、火酒まで数樽を飲んだのでベルの顔はそれなりに赤く、酩酊している様子もあった。
『(いやいやいやいや、どんだけ酒豪ううううううっ!?)』
ベルの酒豪振りに多くの客や【ロキ・ファミリア】の眷属たちが恐怖すらしていたが

……。

「さぁてと……ふんふんふんふーん♪」

ベルは酔いもあって、陽気に鼻歌を歌いながら敗北者たちに罰を与えていく。

ベートの額には負け犬ならぬ『負狼』、ロキの額には『駄女』、ガレスの額に『酒豪（笑）』と書いた事で『（この兎、エグッ!?）』と更に周囲の者たちを驚愕させ、恐怖させた。

「ほら、ベル……酔い覚ましだ」

「ありがとうございます、輝夜さん」

輝夜はベルに対し、飲み物を入れたコップを渡す。それをベルは普通に受け取って飲んだが……実はそれは果実酒であり、更なる酒の提供。

「ふぅ……んふふ……輝夜お姉ちゃん、僕勝負に勝ったよ。だから、頭撫でて欲しいなぁ」

酔いが回りきったベルは積極的に輝夜へと甘え始めていく。彼は甘え上戸だったのだ。

「ふふ、なら本拠の方でたっぷりやってあげますよ。皆でたっぷりと甘やかしてあげます」

「やったー、お姉ちゃんたちに甘やかしてもらうの大好きです」

そうしてベルは豊穣の女主人から本拠の教会へと連れられると女性陣は『甘え上戸のベル、可愛いいいいっ!!』といつもとは違い、積極的に甘えてくるベルを喜んで受け入れ、たっぷりと甘やかし、可愛がり、愛していく。

「き、気持ち良い……もっと、してほしいです」

ベルは快楽さえ得ながら、更に女性陣からの甘やかしを求め、そうして極楽の気分のままに眠りに就くのであった……。

二十五話

それはベル・クラネルが輝夜と飲みに『豊穣の女主人』へと行って、彼が所属する【ヘスティア・ファミリア】の本拠へと戻って来た時の事。

ベル・クラネル――十四才のヒューマンの才能は下界の中でも『才能の権化』。あるいは『才禍の怪物』と呼ばれる程の超絶的な才能であり、天才と呼ぶのですら侮辱となる程の女傑である魔導士が彼の血筋で言えば叔母になるが故なのかその叔母を超えた域にある傑物だ。

しかし、その才能に反して彼自身はとんでもなく優しく、明るく、人懐っこい。

更に元々、両親はおらず育ての親となっていた祖父との二人暮らしを七才のころまでしていたが故か特に女性からの愛や温もりを求めているし、女性に甘えたがっている気質を持っている。

もっとも彼自身は普段、『英雄』を目指しているからなのか自分を律するために自から女性に甘えたがったりはしない。それを分かっているからアスフィやローリエ、輝夜に

アリーゼ、リューにアストレアと他の【アストレア・ファミリア】の眷属たち、アーディ、そしてヘスティアにリリルカ、ナァーザと彼に関わる女性陣たちはあくまで彼に甘やかせて欲しいと頼むような形で彼の意地が傷つかないようにしつつ、甘やかし、可愛がり、愛している。

ベルはベルで甘やかせ場、可愛がれば、愛すればすぐに蕩けていき、受け身となり、甘えたがりの本性を出す。

それは女性陣にとってはとても好ましく、愛らしいものであり、母性を疼かせられるものであったが……。

『(自分から求めてくれたらなぁ……)』

やはり、女としては男の方から求めて欲しい気持ちもある。だからこそ……。

「えへへ、お姉ちゃんたち可愛がってくれるから大好きぃ」

『豊穣の女主人』から輝夜に背負われて教会へと戻ってきたベルは普段の彼は何処柄やら帰ってくるなり、アスフィたちに甘えだしたのだ。

「ふふ、私も素直に甘えてくるベルの事が大好きですよ」

「ふぁぁ……酔ってるとはいえ、甘えたがりのベル君凄く可愛い」

「まぁ、甘え上戸になるまで十は超える酒やドワーフの火酒やらかなり飲ませなきゃな

らないという問題はあるがな」
「うーん、度を越えた酒豪というのも問題ね。甘え上戸なのはとっても良いのに」
「ですね、しかし自分から甘えてくるベルはとても好ましい」
「だよねー、今のうちにしっかりと普段の時でも甘えてくるように癖付けちゃおう」
「それ、賛成」
「私も精一杯、お手伝いします」
「んふふ、母性ならボクだって負けないぞー」
「私も負ける気は無いわよ」
甘え上戸と化したベルに対し、快くというか『理想の展開キタァァァ』とばかりに彼の求めに応じて思う存分甘やかしながら会話をする女性陣であり、女神陣。
ベルが求めるからこそ、リューやローリエは彼がエルフとしての長く尖った耳を優しく触ったり、摘まんだり、甘噛みしたりして感触を楽しむのを許すし、ナァーザは犬の耳を触る事や尻尾をモフモフして感触を楽しむのを許し、それにありがとうと言いながら幸せそうにするベルの様子に満足げな笑みを浮かべた。
そうして、ベルが眠りについてもしばらく、温もりに愛をたっぷりと与える。
『目が覚めたら、ベルは羞恥に悶えるだろうなぁ……』とヘルメスとミアハとファルガーは確信し、しかしこれも酒を飲む男が抱える試練だからこそ乗り越えろと二人の男神と

一人の男はベルを心の中で応援したのだった……。

因みに所変わって【ロキ・ファミリア】の本拠では……。

「あ、あんの兎やろぉぉぉぉぉぉうがぁっ、舐めた真似してくれやがって、ちくしょう。全然、消えねぇじゃねえかああっって、頭痛てぇぇっ!!」

「まぁまぁ、落ち着かんかいベート。っていうか声がこっちの頭にも響くねん。それにうちなんか『駄女』やぞ。女神以前に女としても駄目ってことやん。見た目に似合わず、エゲつない事、書いてくれたもんや。ベルたん」

「まさか、わしを超える酒豪がおったとはなぁ……ザルドを思い出すわい」

ベルとの酒飲みで負け、それぞれ酒飲みで負けたが故の罰として『負狼』、『駄女』、『酒豪（笑）』と中々消えない筆のそれで額に書かれたベート、ロキ、ガレスはそもそもベルに対しては試験を受けさせずに追い払ったという負い目があるし、そもそも酒飲みに負けた結果なので受け入れ、しばらく文字が消えるまで額に布を巻き付けて隠す事となったのだった……。

二十六話

暖かく、優しく、柔らかく、心地良く、どんな言葉で表現しようとも表現しきれない何かはしかし、自分の身を包んでくれている。

それは抗いがたく、包まれていると幸せが溢れてくる。

『もっと委ねて、甘えて……頑張れ、頑張れ、甘えるの頑張れ』

優しく甘い囁き声と共に擽るように、掻くように自分の体を触る何か……言葉も触ってくる感触もやはり、気持ち良い。

出来る事ならずっと委ねていたくなるが……そうもいかない。自分には果たさなければならない誓いがあるのだから……。

「(あれ……っていうか僕はいつ……)」

意識を覚醒させながら、ベルはいつの間に寝ていたんだろうかと思い返し……。

『(えへへ、もっと撫でて、抱き締めてぇ……皆、優しくて大好きぃ)』

思い返すはアスフィたち、女性陣に対して甘えに甘える自分の姿……。

「ひやあああああああっ!?」

絶対に自分からは甘えたりしないと決めていたのに思いっきり甘えまくった恥ずかしさやら情けなさからベルは意識を一気に覚醒、それと共に苦悶に悶えながらの叫びを上げる。

その様子に対し、甘えてくるベルに応えながら彼が普段見せない愛嬌を堪能した事で早朝から気分爽快な女性陣は……。

『おはよう、今日も可愛いわねベル』

本当に可愛いな白兎だなと思いながら、そう声をかけた。

「んもぉぉぉっ!!」

優しい彼女たちの微笑みや口調は今のベルにとって余計に羞恥と苦悶を煽るものであった。

「僕が悪いとはいえ、酷いですよ輝夜さん。酔い覚ましって言ったのに……輝夜さん信じてるのに、騙すなんて」

「ふふふ、ごめんなさいませ。ちょっと酔ったら、どうなるか興味が出たので……本当、甘えてくる貴方は可愛かったですよ」

「ぁ、んふぅ……んん、ふ……」

輝夜は申し訳なさそうな態度を取りながら、ベルを引き寄せ深い口づけをしてベルの意識を甘え兎に切替させながら、蕩かせていく。

「後でお詫びはたっぷりさせていただきます」
「んんぅ、そ、そういうつもりじゃ……あ、ちょ、な、なにを……」

「吸わせていただきます。すうぅ……」
輝夜はベルの胸元に顔を埋めるとそのまま、吸った。
『私達も吸うわ』
そして、アスフィたちも又、最近になって増えたベルへのコミュニケーションで新しい女性陣にとっての健康方法。
『兎吸い』を行った。

「ふくぅぅん、ちょ、も、もう何でいつも吸うんですかぁ、ち、力抜けちゃうぅぅ……」
ベルは蕩けさせられ、悶えさせられ続けたのであった……。

二

ベルは今回、サポーターであるリリルカに【ヘルメス・ファミリア】のアスフィとファルガー、ローリエと共にダンジョン探索を始める事になり……。

「えへへ、今日はよろしくお願いします。アスフィさん、ファルガーさん、ローリエさん」

「ええ、こちらこそ。ふふ、貴方とダンジョンを探索するの楽しみにしていたんですよ、ベル」

「勿論、俺もだ」

「私も」

嬉しそうに言うベルに対し、アスフィたちも又嬉しそうに言う。

ダンジョン探索の前にギルド本部へ行くと……。

『あ』

だいぶ前にエイナの前で醜い争いをしていたところを仕方なかったが故に二人を倒して争いを止めたドルムルとルヴィスにばったり会う。

二人はその後、【ガネーシャ・ファミリア】に一旦拘束されてしまい、反省させられたのである。

そして、よくよく思い返せば年下の少年に対してみっともなさすぎる真似をしたので二人は恥ずかしい。

交流自体は普通ではあるのだが、今も情けなさがあるのだ。

自業自得だが……。

二人と挨拶を交わしてベルは受付嬢であるエイナへと挨拶する。

「本当、ベル君って中々、凄い交流してるよね。それだけベル君の人柄が良くて、可愛いからなんだろうけど」

「可愛いは関係ないかと……」

エイナは【ヘルメス・ファミリア】の第一級冒険者であり、魔道具製造者として名高いアスフィに第一級冒険者であり、オラリオでも強者と呼ぶにふさわしい武人であるファルガーとも交流が深いことが分かるベルに対し、頭を撫でながら改めて言葉をかけた。

ともかく、エイナに見送られながらダンジョン探索しようとしたところで……。

「あの、せっかくですしご一緒させてもらっても良いですか?」

「アミッドさん。ええ、良いですよ」

制服では無く、治療師としての冒険者衣装と杖に回復アイテムを装備した【ディアンケヒト・ファミリア】の団長にして凄腕の治療師であるアミッドが声をかけ、探索したいと言ったのでベルは要求を受け入れた。

なんでも回復アイテムの素材調達と自身のアビリティを上げるためにダンジョン探

索をするところであり、冒険者依頼を出そうとしたところ、ベル達を見かけたからとの事であった……。

二十七話

いつもの如く、地下にダンジョンを有していて、他に幾つも施設や商店のある摩天楼施設であるバベルが建設されている中央広場をオラリオの冒険者たちは行き交っていた。

「皆さん、おはようございまーす」

そしてこれまた、いつもの如くベル・クラネルは出会った冒険者達、それぞれに挨拶をした。

『おはよう』

愛嬌があり、親しみが湧くベルの笑顔と挨拶は冒険者（特に女性）にとっては日々の癒しであり、ダンジョン探索の活力に繋がっている。

『（本当、可愛いなぁ子の兎は）』

兎の耳や尻尾を動かしてさえいるのを幻視させる程の兎っぷりにアスフィにローリエ、リリルカにアミッドは共通の思考をした。

「おぉう、何だこの可愛い兎は……はぁぁ、ちょうど人肌恋しいところだったから良く効

くぞ」
「はうッ!!　んんんぅ……」
すると突如、ベルへと迫りそのまま彼の体を抱え上げつつ自分の胸深くへと抱き締める女性が現れた。
一七〇?程の身の丈であり、ハーフドワーフながら長い手足、秀麗な顔立ちで黒髪に赤眼だが左目には眼帯をしていた。
格好としては下半身は極東の和装、袴で上半身は大陸式の戦闘衣で武器としては漆黒の鞘に納められた太刀。
彼女こそオラリオにおいて鍛冶の分野においては最大派閥である【ヘファイストス・ファミリア】の団長にして鍛冶師としても最上級の腕を有する椿・コルブランドである。
「んむううっ、は、放してくださいぃ……」
ベルは何とか押しつぶされていた状態から上手く顔を逃がすと呼吸しつつ、解放するように頼む。
「悪いが……『独占は駄目』。む、わ、分かった。だが、これくらいならば良かろう……おお、良い撫で心地だな」
「ん……」
ベルの抱き心地を堪能し、更に堪能しようとした椿は中央広場に居る女性冒険者とア

スフィにローリエ、リリルカにアミッドたちが威圧してきたので解放すると彼の頭を撫で始めた。

「なんかバベルに癒し兎が現れたとか聞いた事はあるが、本当だったんだな」

椿に無理やり連れてこられた炎を連想させるような赤い髪に意志の強さを感じさせる瞳で整った顔つき、中肉中背で武器としては大刀を装備している【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶師見習いであるヴェルフ・クロッゾは呟いた。

「やはり、偶にはダンジョンに行こうとしてみるものだな。こんな愛らしい兎に出会えるとは……手前は椿・コルブランドという」

「ぼ、僕はベル・クラネルです。因みに僕は男ですからね」

『え!?』

「いや皆さんどころかアスフィさん達まで驚かないでよ、もおおおおおおっ!!」

椿とヴェルフだけでなく、周囲の冒険者とアスフィたちまで驚いた事でベルは今にも撫でるのを止められた事で地団太を踏むが如く、抗議の声を上げるのであった……。

二

ベル・クラネル一同は椿とヴェルフも加えてダンジョン探索へと向かい……。

「やあああっ!!」

向かってくるモンスターの群れに対し、変身魔法にて栗色の長髪であり、騎士の鎧姿となったリリルカが長槍を振るい、モンスターを屠っていく。

リリルカはベルによって地獄であった【ソーマ・ファミリア】から救われた。一度は騙し、自分の餌食にしようとしたのであった。

だからこそ、リリルカはベルの助けになりたいと誓っているし、願っている。

彼に必要とされたいし、彼の傍に居られる資格を得たいとも願っている彼女……その願いは形となった。

まるで遥か昔の自分を思い出すかのように槍を振るい、モンスターを倒す自分の夢を見た。その日より、変身魔法で夢見た自分の姿になれば遥かに能力が向上したのである。

そして、ちゃんと【スキル】にもそれ関係の者が現れたのだ。強くなれたしこれからも強くなれる能力を手に入れた事でリリルカはベルを支える者としての道を歩み始めたのだ。

「僕も負けてられないな、ふっ!!」

そんなリリルカを見ながら、ベルは右手の長槍と左手の短槍を振るい、空間に軌跡を

刻みながらモンスターに対し、踊らせる。
長さも重さも全く違い、故に扱いづらい二つの槍は流麗であり、壮絶な閃舞を披露しながらモンスターを貫き、切り裂き、打ち砕いていく。
自分のＬＶ．２としての能力をしっかりと試す事、戦法を増やす事と向上心を燃やしながらベルはモンスターと戦っていた。
更に試すのは槍の技だけでなく、【スキル】によって速度を上げれば上げる程に強くなる脚力、蹴りつける力が強くなるので当然、瞬間的な加速力や跳躍力は上がるし、その勢いのままにモンスターを撥ね飛ばすが如く、蹴り殺せる。
それを槍の舞と組み合わせながら、更に魔法も【スキル】の効果で二つ重ね合わせる事だって出来るようになっているのを確かめる。
そんな中、ベルの愛嬌から想像できない戦い振りと強さに……。

「人は見た目に寄らないというが……」
「いくら何でも限度があるだろ、これは……」
「ふふ、これはまたとんでもない英雄が出てきましたか」
椿にヴェルフは唖然と驚愕、アミッドも驚愕しながらも見惚れ、微笑む。

そうして……。
「お疲れ様です、ベル」
「やっぱり、可愛い君も強く格好良い君も私は好きだ」
「私も大好きですよ」
「何とも興味が尽きない兎だな……」
「ふぁ、んん……」
１９階層からなる『大樹の迷宮』、回復薬を製造するのにおいて高性能な薬草などがあるのが特徴的な階層、いろんな植物や木々が生い茂る場で休憩しながらアスフィたちはベルを愛でていき、椿も又、アスフィたちのそれを参考に愛でて、ベルが蕩けるのを楽しむのだった……。
そうして、今日の探索を終えて本拠へと戻れば……。
「では、奉仕させていただきます。旦那様」
「あ、ほ、本当に……っあああぁ、ぅう、んくううっ!!」
「ふふ、快楽に身を委ねていく貴方を見るのはやはり、楽しい」
浴室にて輝夜が自らの体を利用して洗いながらという性的な奉仕を始めると共に徹

底的な奉仕を一晩行い、ベルを快楽によって蕩かせ、欲を満たしていく。

ベルを愛する女性陣はベルの管理ですら自ら望んで行っているのであった……。

二十八話

自分は下界で一番の幸せ者な男だと自覚している。
だって、そうだろう……アスフィにローリエ、輝夜にアリーゼにリュー、アストレアにライラとノインにネーゼ、アスタにセルティにリャーナにイスカとマリューにアーディ、リリルカ、ヘスティア、ナァーザ達、一人一人が美女であり、美少女であり、魅力的な女神たちと深く愛を交わしているのだから。
もっともヘスティアは『処女神』であり、それはかなり重要なものなのでいずれ、もっと覚悟が出来てからと本番には至ってないし、ライラも又、『本命』が居るのであくまで練習と彼女とも又、真に繋がってはいない。
それでもやはり、自分は幸せ者だ。『管理』と称して世話されながら、男としての欲を満たしてもらっているのだから……。
「うっ、っ……あ、ありが……とうござい……ます。輝夜……さん」
「ちゅぷ、んちゅ、ふふ……どういたしまして……」
彼が女性陣と深く愛を交わした時、必ず女性の方がベルより早く起き、そうすると女

性たちは寝ているベルに対して弄ったりしながら、起きるのを待って又、愛を交わすのである。

「今回の私の奉仕はどうでしたか、旦那様？」

「と、とっても気持ち良かったです」

快楽に蕩け、腰も抜けて起き上がれないベルを抱き締めて頭を撫でながら質問をし、ベルからの答えを聞く。

輝夜は性的な書物から知識を得て、それをベルへと試しながら彼が気に入ったものはより深く行うようになっていく。アスフィも又、同じであるが更にそれ用に造った魔道具をも使ったりするのだ。

「満足いただけて良かったです」

「んちゅう……あ、も、もう本当に……ふあああああっ!!」

輝夜は満足気にベルに深い口づけをし、そのまま止められない愛をベルへとぶつけたのであった……。

二

　オラリオの北部――その区域は服飾関係の店に溢れている。様々な種族集まり、暮らすオラリオにおいて生活する上でそれぞれの種族専用の衣服店がある此処は非常にありがたいものとなっている。
　そして、そのオラリオ北部にヘスティアとリリルカと共にベルは訪れていた。今日は【ヘスティア・ファミリア】だけでの交流日としており、又、ある目的のためにこの区域に用があったのだ。
「その……本当にこういうの、初めてなんだけど……どうかな？」
　普段はツインテールとしている長く艶のある髪を後ろで一本に束ね、衣服は青と白による清楚にして美しいドレス、踵の高いパンプスとどこかの夜会に参加するための格好になっているヘスティアが顔を赤に染めながら、初々しい様子で問う。
　今日の夜……アーディが所属する【ガネーシャ・ファミリア】の本拠にてオラリオに住む神々だけが開き、参加する『神の宴』が行われる。
　それに参加するヘスティアのために必要な物を買いに来たのだ。
「大変、良くお似合いです女神様……」
「ええ、大変綺麗ですよ。ヘスティア様」
「はい、とっても似合っていて格好もあって、いつもより綺麗です」

「えへへ、ありがとう」
店の店主、リリルカ、ベルが本心からの言葉を送ってヘスティアを賞賛し、ヘスティアは微笑んだ。
そうして試着したそれらを買うとせっかくだからと普段着を買おうと他の衣服店へと向かったのだが……。
「そ、そうか、君か……君があの……すまない、ちょっと……」
「ん？」
とある衣服店を訪れると店主が少し驚愕すると共にベルの手を引き……。
「おお、やっぱり君こそ逸材だぁぁっ、何を着ても似合うそんな子が居た事に私は感動しているぅぅぅぅっ!!」
「いや、いやいやいや……こ、これは恥ずかし過ぎますってぇっ!!」
実はベルが訪れた衣服店はアスフィに輝夜がベルが小さい時から、ベルのために中性的な服を買っていた店であった。そうして、今回、かなり露出的だが男か女……どっちでも不自然でない中性的な服や女装に近い服に着せ替えられたりしたのだ。
「いや、良い……良すぎるよ、ベル君っ!!」
「はい、大変素晴らしいです。ベル様」
『きゃあああっ、可愛いっ!!』

良く言えばファッションモデル、悪く言えば着せ替え人形にされているベルに対しヘスティアにリリルカ、この店を訪れた女性客は興奮しながら絶賛した。

「本当に可愛いよ、ベル」
「いやぁ、あんなに着こなすなんて羨ましいなぁ」
「ふふ、そうね。あれは堪らないわ」
「はい、良いですねぇ……」

店を訪れた客の中には北部に本拠を置いている【ロキ・ファミリア】の団員であるアイズにティオナ、ティオネ、レフィーヤも居て彼女達も又、次々と着替えるベルの姿を楽しむのだった……。

その後、ヘスティアはアストレアと『神の宴』へと出かけ……。

「アリーゼ達から聞いたぞ。甘え兎になって甘えまくったって」
「だったら、私達にも甘えてくれなきゃ不公平だよ、ベル」
「遠慮なく、甘えな」
「ふふ、アリーゼたちに負けないくらい甘やかしてあげる」
「ベルの可愛さは堪らないですからね」
「ほらほら、男だったら早くしな」

「ふふ、こういう事は滅多にないから楽しまないとね」
「思う存分、甘やかしてあげるんだから」
「……ん、う、うう……お、お願いします」
ライラとノインにネーゼ、アスタにセルティにリャーナにイスカとマリューがアリーゼ達と交代でベルの本拠である教会に宿泊し、ベルへと甘え兎になることを要求。
ベルは酔っていない状態で甘え兎にならなければいけないため、強烈なに恥ずかしがりながら甘え、蕩けていくのであった……。

二十九話

オラリオの南西、交易所付近には高く白い塀に囲まれた広大な敷地がある。そして、その中央には腕を組んで胡坐をかく頭部が象になっている巨人像が威風を放って存在していた。

三〇Mはくだらない大きさで見晒せとばかりに胸を張っていると中々に見る者に強烈な印象を与えるこの像はなんと、オラリオにおいて最大派閥の権威を有するとある【ファミリア】の『本拠』。

アーディの所属する【ガネーシャ・ファミリア】の本拠こと『アイアム・ガネーシャ』である。唯一の入り口はなんと、胡坐をかいた股間の中心だ。

そんな『アイアム・ガネーシャ』は無数の大型の魔石灯によってライトアップされていて、しかもオラリオ中の神々が次々に訪れていた。

その理由は三日後に行われるオラリオの特別的な祭りで【ガネーシャ・ファミリア】が主催し、この派閥と密接的な関係にあるギルド本部が協力して行われる『怪物祭（モンスターフィリア）』の理解と協力のための『神の宴』を【ガネーシャ・ファミリア】の主神であるガネーシャ

が開催したからであった。
「んなっ、な、なんやその……ど、ドレスは……」
酒飲み勝負でベルに負け、額に『駄女』と書かれてしまったロキは額に布を巻いて隠している。ヘスティアが『神の宴』に出ると聞いたのでどうせ、ドレスも着れないだろうから、揶揄ってやろうと神の宴に参加したのだが、目論見は外れ、彼女は立派なドレスを着たヘスティアの姿に驚いたのであった。
「へへーん、ボクの愛するベル君がプレゼントしてくれたんだよ。本当、神想いの良い子だよ」
「ぐ……ぬぬぬ、ウチかてアイズたんにプレゼントされた事無いのにいいいい……覚えとれよぉぉぉ」
ドヤっという感情をそのままに表し、勝ち誇りながらロキへと言えば悔し涙を流しながら、ロキはその場から逃げ去ったのであった。
「良し、勝った」
「あはは、相変わらずね。貴女達も……」
「まったくよ、その調子じゃ折角のドレスの雰囲気まで乱れるわよ」
勝ち誇るヘスティアの様子にアストレアが苦笑し、燃えている炎を連想させるような赤髪を後ろで結い、美麗な顔立ちだが右目に眼帯をした女神、ヘファイストスが呆れた

のだった……。

二

翌朝、【ヘスティア・ファミリア】の本拠へと女性が訪れ、扉を叩く。
「おはよう、アーディ君。ベル君ならライラ君たちに可愛がられちゃってるよ」
「おはようございます、ヘスティア様……それじゃ中に入りますね」
二日後に開催される『怪物祭』に向けてそれ用のモンスターをダンジョンへと【ガネーシャ・ファミリア】は捕獲しに行くのだが、アーディはその手伝いをしてもらう約束をベルとしていたのだ。
「ふぁぁ……あ、アーディさん。おはようございます」
「うん、おはよう。今回はよろしくね」
「此方こそ、あの皆さん……そろそろ……」
『それじゃ最後に……すううぅ』

「ふにゃあああああっ!!」
　ベルは迎えに来たアーディやリリルカも含めた女性陣に抱き締められ吸われてしまった。

「ベル、聞いたよ。アミッドと一緒にダンジョン行ったって……あれほど関わらないようにって言ったよね？」
「で、でもアミッドさん……良い人で「問答無用」うにゅあ、んくぅはっ、あ……」
　回復薬の調達のために【ミアハ・ファミリア】へと行けばナァーザに耳や首元を舐められたり、甘噛みされたり、結構な頻度で擽られるなどたっぷりと弄られ、悶えさせられ蕩かされてしまった。
「なるべく、近いうちに店に顔を出してくださいね」
「んむ、は、はいぃ……」
「すうぅ」
「くあぁぁっ!!」
「ふふ、これは確かに元気になりますね」
『豊穣の女主人』近くを通ればベルはシルに話しかけられ、頭を撫でられ抱き締められ

るなど可愛がられながら最後には吸われた。

「ほら、気合入れて手入れしといたぞ」

「ありがとう、ヴェルフ」

前のダンジョン探索の時に一緒にパーティを組んだヴェルフの工房へとベルは行った。

パーティを組んだ際に鍛冶師としての契約を持ち掛けられ、ベルは承諾。試しとばかりに長槍の手入れを頼んだのである。

【ガネーシャ・ファミリア】の手伝いなんてベル君は本当に偉いね。でもダンジョンでは油断は禁物だからね」

「あふぅ……は、はい」

ギルド本部ではエイナに頭を撫で回されながら、暖かい言葉と笑みで送り出されたのであった……。

三十話

迷宮都市オラリオはこの下界におけるあらゆる国や都市の中でも一番の人口及び神口を有している。そんな大都市だからこそ、数多くの祭りも開催される。

その一つが明後日に開催される『怪物祭（モンスターフィリア）』である。この祭りの主催派閥となるのが【ガネーシャ・ファミリア】である。

なんと【ガネーシャ・ファミリア】はその本拠内にてモンスターを調教し、飼育している唯一の大派閥。

その調教の様子をオラリオの東区域の端にある円形闘技場にて披露するのが『怪物祭』だ。

怪物祭にて調教するモンスターは都市外、そしてダンジョンのモンスターを捕らえたものを使うのだが、そのダンジョンでのモンスターの捕獲を今回、ベルはアーディから頼まれて手伝う事となった。

「アーディさんにはいつもお世話になっている【ヘスティア・ファミリア】の団長、ベル・クラネルです。よろしくお願いします」

『わぁぁ、可愛いっ!!』

ダンジョンへと行く準備をバベルのある中央広場とバベルの中でギルド本部の者たちと打ち合わせをしている【ガネーシャ・ファミリア】の団員たちへアーディに連れられたベルは自己紹介をする。

すると、【ガネーシャ・ファミリア】の女性団員の多くがベルへと駆け寄り、抱き締め始め、撫で回すなど可愛がり始める。

「ふぁ、んくぅ……」

「本当にアーディの言う通り、子兎の可愛さを持ってるわね」

「でしょ、自慢の子だよ。皆も可愛がってあげてね」

「うん、頼まれるまでもないよ。いやー、本当に可愛いね」

「あ、あの……くはぁう……」

アーディは自慢げにしながら、可愛がる事を自派閥の女性団員たちに勧め、女性団員たちは次々と抱き締め、撫で回し、弄る事で可愛がっていった。

「お前たち……さっさと準備をしろ。君がアーディが世話になっているベル・クラネルだな。私は【ガネーシャ・ファミリア】の団長であるシャクティ・ヴァルマでアーディ

の姉だ。聞けば【ソーマ・ファミリア】の件では協力してくれたそうだな。ありがとう」
うなじの位置で切った藍色の髪に整った怜悧な顔立ち、一七〇?を優に超えようかという長身にそれに伴う長い手足の女性ことシャクティが団員たちを注意しながら、ベルへと近づき、軽く頭を撫でて微笑んだ。
「い、言え。僕のほうこそアーディさんには僕が小さい時から世話になっているので……手伝うのは当然の事です」
「ふふ、見た目は随分と可愛らしいが中々立派な雄じゃないか。気に入った、私は副団長をしているイルタだ。よろしくな」
「あう、は、はい」
次にベルへと快活に笑いながら力強く彼の頭を【ガネーシャ・ファミリア】の副団長である褐色の肌に赤髪を伸ばすアマゾネスことイルタ・ファーナが言う。
因みにイルタは勝手にシャクティを姉貴分にし、自身をシャクティのもう一人の妹だと公言したりしていた。
「いやいや、相変わらず女性にモテモテだなベル。ともかく、今回もよろしく頼むぜ」
「こちらこそです。ハシャーナさん」
ハシャーナにも頭を撫でられながら笑いかけられ、それにベルは応える。
そうして、シャクティにイルタはダンジョンには同行せず、ベルはアーディにハ

シャーナ達と共にダンジョンへと向かうのだった……。
「リリ、行くよっ!!」
「はい、ベル様っ!!」
ダンジョン内にてベルはヴェルフに手入れしてもらったばかりの長槍を持ってリリと共に上層域のモンスターへと向かっていた。
駆け跳ねるための踏み込み、蹴りつける足が加速する度にその力を増すそうして際限無く速度を上げながら縦横無尽にダンジョン内のモンスターを槍による戦舞により、貫き穿ち、断裂し、粉砕していく。
そして、ベルの強襲に戸惑うモンスター達をリリルカの槍による戦舞が追撃を仕掛けて止めを刺す。
そうして戦いが終わると……。
『かっこいいよ、【白兎の槍士】!!』
「ちょ、も、もうその二つ名で呼ばないでくださいよー」
旅をしていた時の二つ名で呼ばれ、ベルは悶えながらその昂ぶる感情のままにまさに兎の如く飛び跳ねてしまう。
『(可愛い)』
傍に居るリリルカもアーディも【ガネーシャ・ファミリア】の他の女性団員達も微笑

ましく思いながら、見るのであった……。

三十一話

自派閥の本拠内で普段行っているモンスターの調教を披露する舞台である『怪物祭』に向けて、【ガネーシャ・ファミリア】の眷属はダンジョンへとモンスターを捕獲へと向かった。

「やあっ!!」

自分にとっての英雄が所属していた派閥であり、幼い頃から世話になり、今でも可愛がってもらい、愛してもらっているアーディが所属する【ガネーシャ・ファミリア】の手伝いをしていた。

縦横無尽に駆け跳ねながら、速度に応じて強化される脚力を活かして更なる加速を行う走法であり、跳躍法に軽業を加えてモンスターを翻弄しながら槍術を繰り出し、仕留めていく。

その中で捕獲対象のモンスターは槍の柄、或いは速度で強化される脚力をそのまま利用しての蹴りを炸裂させる事で気絶させて捕らえさせた。

そうして『中層域』の最奥である２４階層まで進み……。

「【ムーン・サイト】――【クリロノミア・チャイム】」

自分が所有する【スキル】によって魔法を併用する事で立ちはだかった大量の『デッドリー・ホーネット』のあらゆる間隙を縫って、駆け跳ねて進み標的である『デッドリー・ホーネット』の巣で蜂のモンスターを大量産出する希少種である『ブラッディー・ハイヴ』へと鐘の轟振纏う槍を放ち、炸裂させることで破壊するとそのまま、『デッドリー・ホーネット』を槍による戦舞で葬った。

「いくぞぉぉっ!!」

更に２４階層にて価値の高い宝石の実を宿す『宝石樹』の守護者であるグリーンドラゴンと魔法無しで戦い、激闘の果てに倒して宝石樹の実を勝ち取った。

「やっぱり、格好良いベル君も良いね」

「はい、まったく」

『うん、最高』

「ど、どうも」

アーディらに褒められて恥ずかしがるものの、時間の関係もあって一度、『安全階層』である18階層に戻り、野営を始めたのであった。

そうして、食事中の出来事……。

「そう言えば、僕が旅している時にいつものモンスターと違ってたどたどしくても言「そうだ、ベル君に手伝って貰いたいことがあったんだった。ちょっとこっち来てくれるかな」むーっ!!!!」

一年前、ベルが一人旅の途中、移動する馬車から「タ、タスケテ」と声が聞こえたので助けに向かい、馬車を使っていた見るからに凶悪そうな男たちを倒したその結果、馬車で喋るハーピィをベルは助けた。

「アリガトウゴザイマス」

礼を言われ、そのハーピィはどこかへと飛び去って行ったという出来事があった。

それを『ベル君、異端児(ゼノス)と出会ってたの!?』とアーディに驚かれながらもハーピィの『異端児』の事を話す。

「モンスターでも助けたんだね」

「助けを求められましたから……それにいつものモンスターと違って友好的そうでした

し」
「ふふ、ベル君はやっぱり優しいね……だから、大好きなんだよ」
「それはアーディさん達にそう、育て「もう、そうやって上手い事言っちゃって」んん、くちゅ、んちゅ、む……あ、アーディさ……ダンジョ……んむぅぅぅっ!!」
ベルはアーディに抱き締められながら、何度も深い口づけをされる。
『異端児』の事はまだアスフィたちや冒険者の皆には内緒にしておいて。パニックになっちゃうからさ」
「はい、分かりました」
「ありがとう」
そうして、【ガネーシャ・ファミリア】の野営地に戻るとアーディの天幕にて……。
「うや、くむ、ふ、くふ、あうぅ」
「やっぱり、ベル君の癒し力は最高だね」
「本当に天然で最高の癒し力を持つんですから、たまりません」
『私達も癒してね』
ベルはアーディにリリルカ、【ガネーシャ・ファミリア】の女性団員に可愛がられまくったのであった……。

三十二話

『怪物祭』が明日に迫る今日、ダンジョンの２０階層にて四人の一党が居た。
「やっ!!」
　本来の得物とは違う代用のレイピアでありながら、華麗な剣舞を披露してモンスターを切り裂くのは【ロキ・ファミリア】の【剣姫】ことアイズ・ヴァレンシュタインである。
「えいさーっ!!」
　対して壮絶な徒手空拳による舞踏にてモンスターを破砕するのはロキ・ファミリアのアマゾネスである【大切断】のティオナ・ヒリュテだ。
「やっぱり、お二人とも凄いですね。アイズさんは代剣でティオナさんは素手なのに」
「二人とも、遠征したばかりだというのに……」
　【ロキ・ファミリア】のエルフの魔導士であるレフィーヤは第一級冒険者であるアイズとティオナがそれぞれ、いつもとは違う装備や状態でありながらも遜色無く実力を発揮する二人に賞賛の声を送り、レフィーヤの師匠である魔導士のエルフであるリヴェリア

は呆れる。
「(とはいえ、アイズが事前に言ってきただけましか)」
いつもなら、遠征の後など私用の時間を使っても単独でダンジョン探索に行き続けるアイズがリヴェリアに事前に言うようになった。今回はそういう事で『中層域』までの探索を条件にレフィーヤと自分、そして、話を聞いてついてきたティオナと共にダンジョンへとやってきたのである。

「(多分、あの子のお陰かな)」
ふと、ベルの姿を思い返すと……。
「おーい、アイズさん、ティオナさん、レフィーヤさん、リヴェリアさーん!!」
『ベル!?』
ベルが笑顔で呼びかけ、まるで遠くから帰って来た飼い主に出会った兎を幻視させるような振る舞いで近づいてきた。
『(か、可愛い!!)』
そんな愛嬌たっぷりのベルの様子にアイズ達は癒される。
話を聞けば、【ガネーシャ・ファミリア】の怪物祭に向けてのモンスターの捕獲を手伝っていたとの事だ。

「ベルは偉いね……」
「うん、偉い偉い」
「優しいんですね、ベルは……」
「ふふ、本当に良い子なんだなベルは……なにより、可愛らしい」
「あ、あふぅぅ……」
　アイズ達はそれぞれ、ベルの頭を撫でたり、顔を撫でたりなど可愛がっていく。

「ふふ、【ロキ・ファミリア】の皆に可愛がられて良かったね」
「人気者で何よりです」
　アーディにリリルカも合流し、そのまま可愛がりに加わる。
　そうして、話は着せ替えショーの事になり……。
「懐かしいなぁ、私達も良くやったよ。ベル君、普通に女装が似合うから楽しくなっちゃうんだよね」
「も、もうそういう事言わないで、アーディさん」
　アーディは幼い頃、女性陣でベルを着せ替え人形にした事を思い返し、ベルは恥ずかしさで顔を赤くした。

「ほう、ならば次は私にも見せてもらいたいものだな……良いかな？」
「あ、ちょ、抱き締めて囁くのは……う、うぅ……わ、分かりました」
リヴェリアに頼まれ、ベルは頷く。
ともかく、そうしてアイズ達も加えてベルは捕獲したモンスターを収監したカーゴをひきずる【ガネーシャ・ファミリア】と共にダンジョンからバベルへと帰還する。
『可愛い』
「ああ、ちょ、も、もう良いですからぁ」

その間もベルは女性陣に可愛がられ続けていた。
バベルに戻れば『怪物祭』の打ち合わせの為かギルド職員であるエイナが居て……。
「ただいま、戻りましたエイナさん」
「うん、お帰りなさい。ベル君」
ベルは挨拶をするとエイナに可愛がられ、蕩けるのであった。

その後、アイズやエイナ達と別れると事前にベルを可愛がり、愛している女性と女神陣による話し合いの元で決まっていた【ガネーシャ・ファミリア】の本拠にベルとリリルカは宿泊する事になる。

「こういうのって、尻に敷かれてるっていうのかなぁ……」
「ベル君はそういうの嫌？」
「いえ、そもそもは僕に原因がありますし、皆さんが僕の事を思って色々としてくれるのは嬉しいです」
「なら、良かった」
「これからも私達は色々とベル様に良いことしてあげますからね」
ふと思った事を呟いたが、アーディとリリルカとのやり取りの中、可愛がられ何とも言えない気分は無くなった。

そうして、【ガネーシャ・ファミリア】の本拠に入れば……。
「ベルよ、君には礼を言う」
「いえ、僕の方こそガネーシャ様に礼を言わせてください」
ガネーシャにベルは自分にとっての英雄である男に助けられた事やアーディに世話になった事について礼を言ったりした。
そうして……。

「ベル君、私たちの仕事を手伝ってくれてありがとうね。だから、いっぱいご褒美を上げるよ」
「私もいっぱい、ご褒美を上げます」
「んく、あ、うは……んきゃあああっ!!」
ベルのために用意された部屋にてアーディとリリルカから愛と快楽を与える奉仕をされたのであった……。

三十三話

今日はオラリオがいつもより、盛り上がる日であり、更にいつもより都市外の人や亜人、神がオラリオへとやってくる日である。
何故なら、今日は『怪物祭』という祭りが開催されるからだ。闘技場にてモンスターの調教劇を見る内容であるが、その最中には当然、モンスターとの争いも入っている。
安全にかなり配慮した状態にて英雄の如き、眷属とモンスターとの戦いを見られるとあって都市内、都市外の者たちに『怪物祭』は人気なのだ。
そして、一昨日から怪物祭のためのモンスター捕獲に協力していたベルはアーディの所属する【ガネーシャ・ファミリア】にて昨夜を過ごし、起床する。
「おはよう、ベル君。大好きだよ」
「おはようございます、ベル。大好きです」
「お、おはよ……ふああ、くふ、あう、んああ」
ベルより早起きしたアーディとリリルカにより、口づけや撫で回し、揉み解し、掻くなどの刺激によって蕩かされていった。

『すうぅぅぅっ!!』
「も、もう力抜けちゃうぅぅっ」
そして、最後には兎吸いをされた事でベルはふらふらに、アーディとリリルカは凄く元気になったのである。

「じゃあ、お手伝いありがとうねベル君、リリルカ。本拠に戻ってからは『怪物祭』を楽しんでくれて良いから……ベル君は初めてなんだし」
「はい、ありがとうございますアーディさん」
「それでは、また」
朝食を終えると【ヘスティア・ファミリア】の本拠である教会へと戻るため、【ガネーシャ・ファミリア】の本拠を出ようとするベルとリリルカをアーディは見送った。
そうして、自分たちの本拠である教会へ戻れば……。

「おかえり、ベル君。リリルカ君」
「おかえりなさい、二人とも」
教会の中に入れば、ベルとリリルカの帰りをヘスティアとアストレアが出迎える。

「ねえ、ベル君。実はね、ベル君たちが居ない間にお客様が来てるんだ。呼んでも良いかな？」
「ベル君に会いたかったって言ってたわよ」
「僕に会いたかったですか？　はい、良いですけど」
なにやら微笑みながら言うヘスティアとアストレア、何故かリリルカまで同じように微笑んでいる。
「それじゃあ……出てきて良いよっ、アルテミス」
そして、客の名をヘスティアは呼び……。
「久しぶりだな、ベル……あれから随分と大きくなった」
「っ!?」
ヘスティアの声にアルテミスは物陰から姿を現し、微笑むとベルは先ず、驚愕の表情を浮かべ……。
「……っ、う、うう……」
体を震わせながら、ヘスティアにアストレア、リリルカの方を一度見て、彼女たちが頷くと……。
「はい、お久しぶりです。アルテミス様ぁっ!!」

堪らなくなったベルは嬉し涙を流しながら、アルテミスへと駆け寄り抱き着くままに胸の中へと顔を埋めた。

「おいおい、どうしたベル……オラリオで今、大活躍してるって聞いたのに出会った時と同じ、甘えん坊じゃないか？」

アルテミスは優しく微笑みながらベルを受け入れ、彼の頭を撫で、背中に手を伸ばし、摩り始める。

「だって、だって……ずっと会いたかったんですよぉ」

そう、実のところベルはアルテミスに会いたくて堪らなかった。一年の修行の旅に出た幾つかの理由の一つはアルテミスたちに会えるかもという期待もあったくらいだ。

まあ、旅の時には会えなかったが……。

「ふふ、そうか……待たせてすまなかったな」

アルテミスはベルに微笑みかけ、涙を拭ってやりながら顔中を愛撫していく。

「んんぅ……」

ベルはそれに身を任せ、喜んでいた。

『(喜んでくれて良かった)』

そして、そんな微笑ましい様子をヘスティアにアストレア、リリルカに物陰からはアスフィにローリエ、輝夜にアリーゼ、リューにライラ、ノインにネーゼ、アスタにマリューにセルティ、リャーナ、イスカと【アルテミス・ファミリア】の眷属であるレトゥーサやランテらが微笑まし気に見守っていたのだった。

実は少し前からベルが喜ぶことがしたいと考え、ベルを愛する女性陣と女神陣がヘルメスを使ってアルテミスと手紙などで連絡を取っており、今回のサプライズを仕込んだのであった……。

三十四話

日々、『下界の中心』とも呼ばれる程に人に亜人、神々が集まり暮らしている大都市であるオラリオは今日、いつもより活気に満ちていた。

何故ならオラリオ特有の祭りである『怪物祭』が開催されているからである。

そして、『怪物祭』の日にベルが初めて出会った女神であり、別れてからずっと会いたがっていたアルテミスと再会した。

「ベル、本当に大きくなったな。君が旅していた時の話は聞いていたぞ」

「【白兎の槍士】なんてベル君ぐらいしか、思い浮かばなかったからすぐに分かったよ。それにしてもやっぱり、可愛いね」

「あうぅ、久しぶりです……」

そして、物陰から出てきた【アルテミス・ファミリア】の団長であるレトゥーサに団員であるランテ達とも再会し、軽く愛でられながらベルは受け入れ、喜ぶ。

「ベル、今まで渡せていなかった分のプレゼントだ」

アルテミスはそうして、いずれベルと再会したときに渡すために用意していた下界の中でも一、二を争う程丈夫とされている巨木の枝を素材に造られた長弓を渡した。
「っ、ありがとうございます。アルテミス様」
ベルは弓を受け取り、大きく喜ぶと礼を言った。
そんな様子をアルテミスにレトゥーサ達、アスフィたちも又、微笑ましく見る。
「それじゃあ、折角久々に会ったんだ。丁度初めてどうしだし、ベルとアルテミスは『怪物祭』楽しんできなよ」
「そうですね、私達はアスフィさん達と一緒に活動するのでアルテミス様はベル君と楽しんできてください」
ヘスティアが声をかけ、ランテが乗っかるように（元から打ち合わせしていたが）ベルとアルテミスへ『怪物祭』を楽しむように言う。
「そ、それじゃあ行きましょうアルテミス様。アフロディーテ様からも頑張ってアルテミス様をエスコート……あ、言っちゃった」
ベルは皆の表情からアルテミスとのデートをしようと気合を入れたのだが、再会した喜びの大きさもあってつい、口走ってしまった。脳内ではアフロディーテが『こらー』と怒ってきている。
「アフロディーテ……ふふ、そうか……なら、期待させてもらうぞ。オリオン」

「っ、はいっ!!」

こうしてアルテミスからもらったばかりの弓と矢を幾つか入れた矢筒を背中に、腰には長刀を装備してベルはアルテミスの腕に自分の腕を絡めて寄り添いながら、アルテミスを先導するようにして『怪物祭』が開催されている東のメインストリートへと向かったのであった……。

二

『怪物祭』が開催されている東のメインストリートには数えきれない出店が通りの真ん中や隅に並び、通りそのものはリボンや美しい花など様々な装飾で飾り付けられていた。

更に通りの上では旗模様はモンスターを表す凶悪な獅子のシルエットと【ガネーシャ・ファミリア】のエンブレムである象頭の二種類で色とりどりとなっている幾つもの旗が紐に通されていた。

「アルテミス様、僕こうして一緒にオラリオの街を歩けて幸せです」

「ああ、私もだよ。オリオン」
「忙しいのに会いに来てくれて、ありがとうございます」
「私だって会いたかったんだから、礼を言わなくて良い。むしろ、会いたがっていてくれて私の方こそ、ありがとうだ」
「えへへ」
「ふふ」
　ベルとアルテミスは今まで会えなかった分、話に花を咲かせながら共にいる時間を楽しんでいた。とても幸せそうで温かい雰囲気が漂っているほどだったが……。
『(あ、あの恋愛大アンチが恋愛してるぅぅぅぅぅっ!?)』
　アルテミスの恋愛に対する忌避感を知っている神々はベルと恋愛しているアルテミスを見て、宇宙猫状態になりながら大混乱や固まったり、絶叫を上げたりてんやわんやだった。
『(ベル・クラネルこっわぁぁぁぁぁっ!!)』
　そして、アルテミスと恋愛出来ているベルに男神陣は畏怖やら敬意やらを抱き……。
『(月と兎、なんて絵になる関係なのぉ……)』
　恋愛するならこれ以上無い組み合わせに女神陣は後方理解者面状態となりながら、見

守る事とした。

「あ、アイズさん、ロキ様。そして、バベルからいつも見てくれている女神さまもおはようございます」

ふと喫茶店の二階の窓から視線を感じたのでベルはそちらを見、椅子に座ったロキと傍で護衛のために付き添っていたアイズと対面する席で座っていた銀の視線をなげかけ、微笑んでいるローブ姿だがフードの隙間から銀の髪と美し過ぎる容貌を覗かせる女神を見たので手を振って挨拶する。

すると女神は立ち上がると席から姿を消し、そのままベルの方へ下りて姿を見せる。ローブ姿であっても十分に成熟した身体のスタイルは隠せていない。

「ベル、おはよう。私の名前はフレイヤよ、いつも応えてくれてありがとう……それと久しぶりね、アルテミス。貴女もようやく、『愛』の良さを知ってくれたようで嬉しいわ」

「ああ、こうして体感すると『愛』というのも悪くないのが理解できたよ、フレイヤ」

「ふあぁ、んく、ふむぅ……」

フレイヤとアルテミスは挨拶を交わしながらベルの頭やら耳に頬、喉などを撫で摩っ

たり、揉み解したり、軽く掻くように刺激するなど弄りに弄り、ベルは蕩けに蕩けていった。

「ベル、今日も可愛いね」

「フレイヤはともかく、あの恋愛アンチのアルテミスと親密な関係築いてるとか恐ろし過ぎやでベルたん」

花を象った刺繍の施された白い短衣にミニスカートという私服姿にレイピアを帯剣したアイズに額には今でも酒飲み勝負で負けた罰の証があるのでバンダナをしており、白いシャツにパンツという男装姿のロキも現れ、アイズはフレイヤとアルテミスのベルへの可愛がりに加わり、ロキは改めてベルの可愛がられ振りに戦々恐々とする。

「さて、じゃあ私は二人の邪魔をしないようお暇するわね。ベル、今度は私ともデートしましょうね」

フレイヤはベルへの可愛がりを堪能するとそう言って、この場を去り……。

「うちらもいくわ。『怪物祭』楽しんでなー」

「またね、ベル」

ロキとアイズも又、ベルとアルテミスの元から去っていったのであった……。

三十五話

『怪物祭』の関係で開催地であるオラリオの東のメインストリートでは多くの人と亜人、神々が行き交っている中……

「アルテミス様、食べさせ合いっこしませんか？」
「え、いやそれは……」
「僕とは嫌ですか？」
　ジャガ丸君の露店で二つ商品を買ったベルはアルテミスにジャガ丸君の一つを渡しながら言い、アルテミスは躊躇うもベルは悲し気な子兎の表情で問うた。
「っ、そ、その顔は反則だぞ。オリオン……わ、分かった、一度だけだからな」
「はい、ありがとうございます。アルテミス様」
　アルテミスはベルから感じた愛嬌に胸を疼かせながら、そしてこれを教えたアフロディーテに対しては出会った時に一発、矢を射ると決めつつベルの望みに応じた。
「えへへ、美味しいですねアルテミス様」

「ああ、そうだな」
　こんな感じでベルとアルテミスの一人と一柱は仲睦まじく、微笑ましい逢瀬の時間を過ごしていたのだが……。
「ちょっと、私はベルに食べさせ合いっことか要求された事ないんだけどッ!?」
「それを言うなら、あんなに積極的にエスコート自体も私達はされてませんねぇ」
「おうおう、中々上手くエスコートやら交流やらするじゃねえか」
「ま、まあ一年間だけ離れていた私達と違い、アルテミス様とは再会がいつになるかもわからなかった状態でしたから、その分、想いが高まっているのはしょうがないと思いますが……」
　そんな彼と彼女の様子を遠くから眷属としての人外の身体能力や感覚を活かして眺めながら、感想を呟く女性陣がいる。

　今日のオラリオは東のメインストリートにて『怪物祭』が開催されている事でその地区での人口や神口が多いため、ダンジョン探索とは別に都市の治安維持を派閥の活動としている【アストレア・ファミリア】は気合を入れて東のメインストリートを巡回していてその傍らでアリーゼに輝夜、ライラにリューがどんな感じでベルがアルテミスと接するのかを見ていたのだ。

結果としてベルは自分たちにしないやり方でアルテミスに接し、時には甘えているし懐いていた。事情はあらかた聞いているとはいえ、一人の女性として面白くは無いし嫉妬もあった。

「(ちゃんと後で私達にもあれくらいしてもらわないと)」

そんな思いを込めた視線をベルに送り、彼の身体を震わせる。ベルが視線には敏感なのを逆に利用して弄ったのだ。

『アルテミス様もベルも尊いなぁ……』

【アルテミス・ファミリア】の団長であるレトゥーサに団員であるランテ達も又、アルテミスとベルの逢瀬を見守り、微笑ましさに胸を疼かせたりしていたのだった……。

二

人と神が交わり、種族関係なく祭りを楽しんでいる者たちの活気で溢れているオラリオ。

しかし、その地下では……。

「主の命だ。オラリオを『狂乱(オルギア)』の舞台に変えろ」

悪意に満ちた者がそれを解き放ち……。

『オオオオオオッ!!』
東地区の地面から八体の巨大な食人花の怪物が破鐘の咆哮を産声のように響かせる。
「う、うわああ。モンスターだぁッ!!」
「な、なんでこんなところに!?」
モンスターの登場に当然、市民たちは恐怖し混乱していくも……。
『ッ!?』
突如、何かに反応したように食人花たちが一斉にどこかを見ると直後に一体の頭部が清らかな鐘の轟音を響かせながら穿たれ、消滅した。
魔石を射抜かれたからである。
「(絶対に誰も殺させないっ!!)」
先ずは手始めに食人花の一体を射抜いたベルは魔法により、月の視界と鐘音の加護を得ており、月の視界にて空間の間隙を無理やり見抜く事で虚空を足場とし、加速しながら、食人花の周囲を異次元的な軌道で駆け跳ねる。
『アアアアア』
「(魔力に反応しているのか)」
食人花は超反応ともいうべき速度で触手の雨をベルへと放つもベルの視界はあらゆる隙を無理やり見抜く程の域にある。触手による攻撃の間隙を縫い、更に鐘音の加護は

ベルに向かって放たれた触手を鐘音の轟震で弾く。
「ふっ!!」
そして、ベルはアルテミスから賜った弓より、矢を次々と放つ。
食人花の致命的な部位に致命的な瞬間を無理やり見抜きながら放った矢は標的に命中すると同時に鐘音の加護により、命中箇所を鐘音の轟振で崩壊させつつ、矢が射抜けるよう補助をする。
そうして、食人花の群れはベルに太刀打ちできず、ベルの矢によって魔石を射抜かれ消滅した。
更に……。
「お前かぁっ!!」
地下を動いていた何者かの姿を建物の屋根の上から月の視界で捉え、ベルは迷わず矢を放った。
ベルの放った矢は舗装された地面を鐘の轟音を響かせながら射抜き、そのまま……。
「グッ!?」
地下に潜んでいた者の肩へと突き刺さった。
「え、消えた……」
追撃を放とうとしたが、どうやったかは知らないが突如、消失したのでベルは中断す

る。
『ウオオオオッ!!』
絶望の状況を覆した英雄とも言うべきベルにオラリオに居る皆が歓声を送る。
「ど、どうも」
ベルはその歓声に照れながら、軽く頭を掻いて苦笑すると一旦、アルテミスの元へと建物の屋根を次々と駆け跳ねる事で戻った。
「ベル、遠くからだがお前の奮闘振りは見えたぞ。正しく英雄だった」
「ありがとうございます、アルテミス様」
「皆を助けた英雄には神として褒美を与えないとな……」
「あ、んむ……んく、ふ……」
アルテミスはベルへと近づくと意を決した表情を浮かべると彼を抱きしめ、深い口づけを交わす。
「んむ、ちゅ、ふちゅ、んちゅ……ふふ、蕩けてくれるなんて嬉しいな。良し、それじゃあここからは私がエスコートしてやろう」
「あ、アルテミス様ぁ」
アルテミスからの愛に蕩けたベルの様子にアルテミスは満足げな表情を浮かべるとそのまま、彼の手を掴んで引いていくのであった……。

三十六話

オラリオで開催される特有の祭りである『怪物祭』にて幼い頃に出会って、別れて以来、１４才になるまでの数年間……ずっと会いたいと想っていた女神のアルテミスとベルは逢瀬を楽しんだ。

しかし、その最中に謎の食人花の群れが八体現れたので都市の皆を救うために迅速にアルテミスから数年間越しのプレゼントに貰った弓にて射抜き、葬った。

「（一体、あれは何者だったんだろう……）」

更に食人花を地下から放ったであろう当事者をベルは路面越しに射抜いた。もっとも路面越しだったので矢の威力が多少なりとも減衰したのもあるが、肩に矢を命中させた瞬間にその当事者は消えたのだ。

おそらくは魔法によるものだろうとは思いつつも、その場は皆を守護する事が出来たのでその場は良しとし、再びアルテミスとの逢瀬を楽しみ始めた。

そして……。

「オリオンはあの時から変わらず、良い子だな……なにより、格好良くなった。」
「んふ、っうあ、くふああ……あ、アルテミス様ぁぁ……」

【ヘスティア・ファミリア】の本拠に一週間、【アルテミス・ファミリア】の主神であるアルテミスとその眷属たちが宿泊する事となっている。
そして、本拠内の浴室にてベルはアルテミスに体を洗われながら、大事なところを刺激されている事で悶えている。
「随分と可愛らしく悶えるじゃないか……ヘスティア達からは聞いているぞ。こういう事はいつもしてもらっていると……イケない事を覚えてしまったな」
「んやぁ、ご、ごめんなさっ……くふああっ!!」
普段のアルテミスと違って艶やかな声を耳へと吹き込まれ、変わらず体を洗われながら性的な刺激を与えられる。貞淑であり、大好きな女神の一柱にされる行為は背徳的でベルは否が応にも興奮をしてしまう。
「ああ、許すよ。本当に素直で良い子だ。そして、ヘスティアがした事を私もしてやろう。オリオン、愛しているぞ」
「んく、ふ、くやあああっ!!」

そうして、浴室にてベルは処女神であるがゆえに本番は無かったがそれ以外の性的な奉仕を受け……。

「んきゅ、ふぶ……んちゅ、ふ……」

浴室から移動して、アルテミスはベルの寝室にて寝台の上で一緒に横になるとベルを抱き締めながら深く口づけし、舌を絡ませて彼の口内を味わう。

「んぷあ……ふふ、皆が言う通り、凄いなオリオンは……幾ら可愛がっても飽きない。それどころか嵌ってしまう」

「あ、ぅぅ……」

「蕩けきってしまっているな。良いぞ、そのまま委ねてくれ……私も初めてだから、色々と試したい」

「は、いぃ……お願いしますぅ……」

「ああ、任せてくれ」

蕩け切っているベルの言葉にアルテミスは微笑みを浮かべると本番以外の性的な奉仕によって一晩中、愛と快楽を与えられ尽くし、やがて眠る。

「こんなにも愛というのが良い物だとはな。ありがとう、オリオン。私に愛の素晴らしさを教えてくれて」

「んぅぅ……」

アルテミスは自分に身を委ね、幸せそうに眠るベルに優しく囁きながら頭や背中を撫でて更に気持ち良く眠れるように尽くすのであった……。

時系列　原作とＳＯ　二巻
三十七話

謎の食人花のモンスターがオラリオの地面より出現するという予想外の災いはあったものの、それにベルは対処することが出来、被害も人員的なものは全く無かったので問題は無い。

そして、何より幼少のころに会って数日で別れてから心の底から再会を望んでいた女神であるアルテミスと『怪物祭』を楽しめてベルは幸せであった。それに本拠に戻ってからはなんと、浴室で寝室でアルテミスは自分を可愛がり、甘やかし、愛してくれる女性陣と女神陣と同じことをしてくれた。

これも又、ベルは心から幸せを感じていたのである。

そうして、疲れ果て眠ったベルの意識は覚醒し始め、眠っている自分に対し頭や顔を弄って気持ち良く眠れるようにしてくれているアルテミスの姿を見た。

「ん……アルテミス様ぁ……おはようございます」

「ああ、おはよう。オリオン……だが、まだ早朝には早いし、眠っていても良いぞ」

「なら、もうちょっとだけ……アルテミス様、大好きです」
ベルはアルテミスからの意見に素直に甘えながら、大好きという気持ちを伝える。ベルにしては珍しい行動だがアフロディーテからアルテミスに対してはそうしろとも言われているのでそういう行動をしていた。
「っ……さっきの言葉は撤回だ。もう少しだけ愛させてもらう。この後はレトゥーサたちに譲らないといけないしな」
「え、ふむ、んく、ふ……んちゅ、くちゅ」

愛嬌のある微笑みと直に伝えられた好意にアルテミスは心を疼かされ、それによってベルへと深く、口づけし彼の口内を味わっていく。
「ん……あ、アルテミスさ……んぶ、むぷ」
「蕩けるお前は本当に堪らないな、オリオン」
ベルの口から自分の口を離すと間髪入れずに指を入れて口内を弄りながら、アルテミスは言う。
その後、アルテミスは本番こそ無かったが昨夜のように奉仕をして、また蕩かせ尽くすとベルは『神の恩恵』が疼くのを感じたので起床した後、ヘスティアに【ステイタス更新】をするよう促すと新しいスキルが発現した。

【月愛狩人（オリオン）】
・照準能力強化。
・弓の装備時、発展アビリティ『射手』の一時発現（補正効果はＬＶ．に依存）。
・弓による射撃時、チャージ実行権。

「ふふ、そうかそうか。そんなに私の事を……」
「むぅ……ベル君、神に関係するスキルを発現するなら、ボクの方が先じゃないかい？」
「ふひゃっ!?　そ、そんな事……ふひゃはは、や、やめくすぐ……んひゃあああああっ!!」

アルテミスを愛している事、愛されている気持ちの強さが由来となったスキルが発現した事をアルテミスは喜び、ヘスティアはちょっと不満だぞとばかりにベルの背中から擽っていき、ベルを悶えさせたのである。

『兎吸いいきまーす』
「ふあああああああっ!!」

更にベルとリリルカ、【アルテミス・ファミリア】の団員たちでダンジョン探索しようと出かける前にベルは女子陣と処女神二柱に吸われたのであった……。

三十八話

『怪物祭』の翌日、ベルはサポーターであるリリルカと【アルテミス・ファミリア】の全団員たちとダンジョン探索へ向かった。

予定では三日間ほどダンジョンの中層域にて野営しつつ、【アルテミス・ファミリア】の団員たちが【経験値】やヴァリスを稼ぐのをベルが手伝うという事になっている。

普段、【アルテミス・ファミリア】は下界中を旅しながらモンスターを倒している。普段はダンジョンより弱いモンスターを相手しているが、まれに大物は存在する。

だからこそ、強くなるための努力必須であり、旅費においても同じこと。

ダンジョンでは経験値もそして、旅費を稼ぐという目的を果たしやすいので【アルテミス・ファミリア】はオラリオに来たときはダンジョンを探索するようにしているのだ。

「皆さんより少しはダンジョンに慣れていますから、頼りにしてくださいね」

『はい、お願いします』

「あっ、ちょ……ふぁう」

少しでも幼いころに世話になった【アルテミス・ファミリア】の団員たちに対し、張り切りながら言うベルに愛嬌を感じ、皆はベルの頭を撫でながら微笑む。
ベルはそれに嬉しそうに受け入れつつ、蕩ける。
そうして、ダンジョン探索を始めとベルは主武装としては長槍を使いながら……。
「(照準能力の強化ってこういう事なんだ)」
新しく発現させた【月愛狩人(スキル)】の効果の一つ、照準能力の効果のほどを知る。モンスターの動きが緩慢に見えるようになり、狙いやすくなったのである。
「そろそろこっちも使うか」
そして中層域である『岩窟の迷宮』に到達するとベルは槍からアルテミスより賜った長弓を使う事とし、ダンジョン内を駆け跳ねる。
縦横無尽に駆け跳ねながら、素早く矢筒から矢を取り出しては連射、あるいは複数の矢を一度に番えて放ち、更には弓自体がかなり高い硬度を持っているので棒のように振るう。
ベルにモンスターは碌に対応させてもらえず、射抜かれあるいは粉砕されていった。
「しっ!!」
更に弓の弦を引き絞り続ける事で光の粒が矢へと収束するチャージの実行をし、

チャージした時間に応じて威力と速度の上がった矢を放つ。
　通常の矢では届かない程に遠距離に居るモンスターを射抜いたり、複数モンスターが重なった時に放てば一度に射抜くことが出来るようになるなど切り札の一つになる代物であった。
「そりゃ、代償はあるよね……」
　ただ、チャージの時間に応じて体力と精神力の消費も大きくなるが……。
　そして、ベルが弓を使っている時……。

「凄いんだけどぅーん……ベル君が弓使ってるとなんか違和感が……」
「それはつまり、僕は狩人じゃ無くて狩られる側って言いたいんですね、ランテさん、やっぱり嫌いです」
「うわぁぁぁっ、ごめんごめん。もう二度と言わないし、思わないから許してぇぇぇぇっ!!」
　ランテが微妙な表情で言った事にベルは不機嫌気味に言うと必死に謝るランテ……。
「なんで言っちゃうんですか……ランテ様」
『ランテェ……』
　リリルカは呆れ、【アルテミス・ファミリア】の団長であるレトゥーサと他の団員たち

は皆、項垂れたのであった……。

二

【ガネーシャ・ファミリア】の団員であるアーディ・ヴァルマはとある協力者からダンジョンの３０階層でこれまた、とある物を極秘裏に手に入れ、別に用意する回収人に渡すよう依頼された。

この依頼は彼女にとって無視できないし、やらなければならない依頼なのですぐにアーディは３０階層へと向かい、目的の物を手に入れた。

「そろそろ出てきたら？」

『大樹の迷宮』と呼ばれる２２階層まで戻った時、相当に気配を消して自分を追う者へと声をかける。

「ちっ、気づかれていたか……良いだろう」

そうして、外套で全身を隠したモンスターの牙をそのまま長剣にした無骨な武器を持った者はアーディへと襲い掛かり……。

「うあっ!?」
その実力はＬＶ．５のアーディよりも高く、襲撃者の剣と拳と蹴りによる暴威の嵐に負けて剣は弾き飛ばされ、アーディも自身も吹っ飛ばされて倒れてしまう。
「少しはやるようだが、残念だったな」
襲撃者はフードで隠した赤髪と緑の瞳を覗かせつつ、アーディへと近づき長剣を振り上げ……。
「(ごめん、ベル君……)」
アーディは終わりを悟ると自分が死ぬことで愛するベルが悲しむ事に謝り、自分ももっとベルと一緒に生きたいと無念を抱く中……。
「死ね」
襲撃者が長剣を無情に振り下ろす。
その刹那、一筋の閃光が襲撃者の長剣を振り下ろしている腕へと迫り……。
「がああああっ!?」
閃光が襲撃者の腕に炸裂した瞬間、襲撃者だけを激しい光に鐘音と振動の爆発が呑み込む。襲撃者の腕は長剣ごと崩壊し、襲撃者の外套も体も血を吹き出しながら凄まじい

距離を吹っ飛び続けたのであった。
「い、一体何が……」
「アーディお姉ちゃん、大丈夫っ!?」
突然の事態にアーディは呆然としていると彼女へと超速で駆け跳ねながら、ベルは近づく。偶々ここで【アルテミス・ファミリア】と野営をしていた時に戦闘の気配を感じたベルは【ムーン・サイト】で捜索し、アーディがピンチになっているのを見ると【クリロノミア・チャイム】を使いながら弓によるチャージを最大限、行いアーディを殺そうとした襲撃者を狙撃したのである。
「ベル君、うん、君のお陰で大丈夫だよ。ありがとう」
「良かった……良かったよぉ……」
近づいてきたベルへとアーディは笑みを浮かべて礼を言う。
するとベルは涙を流しながら、アーディを抱き締めてそれに対しアーディは抱き締め返し、安心させるため背中を撫でるのであった……。